

立命館文學

第一卷 第一號

# 立命館文學

第一卷 第一號  
昭和九年一月

## 目次

發刊の辭	中川小十郎(二)
先づいひたきこと	吉澤義則(四)
慶長版倭玉篇版種攷	岡田希雄(三)
中江藤樹と十三經注疏	加藤盛一(三元)
印度古代史に關する葛藤	佐保田鶴治(五)
根岸短歌會の位相(一)	小泉蓼三(七)
芭蕉と方言	淺田善二郎(八)
イーチャイナの大石像	ウオールター・ペーター(九)
短篇小説構成の諸問題	内館忠藏譯(九)
	八木春二(二六)

所謂南洋説に就いて……………三 森 定 男……………(二五)

海外文壇グリンプス……………藤 井 啓 一……………(三五)

新刊紹介

英文學風物談(中川芳太郎氏著)……………(二三) 正岡子規(藤川忠治郎著)……………(三三)

革命の印度(ボース氏著)……………(三五) 伊勢物語に就きての研究(池田龜鑑氏著)……………(三七)

校本風葉和歌集(中野莊次氏著)……………(三八) 日本文學の方法論(岩永胖氏著)……………(三九)

京都民俗志(井上頼壽氏著)……………(三九) 芭蕉の研究(小宮豊隆氏著)……………(四〇)

彙 報

雜誌 要 目……………(四二)

附 録

現代短歌大年表……………小 泉 荃 三

## 發刊の辭

茲に、大學の内容充實にともなひ、立命館學叢を「法と經濟」及び「立命館文學」の二者に發展せしむるに至つたことは欣快とするところである。

立命館文學の目標とするところは多い。立命館文學は先づ日本的なるものゝ追求を以て第一の目標となし、國文學、漢文學、歴史、哲學、倫理、外國文學其他精神文化系統諸學科の根柢を明にし、以て過去現在未來に互る日本精神の本質とその歴史及び歴史性の解明に努めようとするものである。蓋し日本精神の再認識、日本文化の創造こそは今や最も重要なことであり、また爲されねばならぬことゝ信ずるからである。立命館文學は更に前記諸學科に關する方法論の究明、資料の紹介、解説解釋及びこれに對する考察と批判等を第二の目標とする。次に學界の展望、報告等を第三の目標とする。立命館文學は以上の目標に

# 根岸短歌會の位相（二）

——正岡子規を中心として——

小 泉 荃 三

序

- 一、根岸短歌會の成立
- 二、根岸短歌會の意義
- 三、根岸短歌會の短歌及短歌觀

序

根岸短歌會は新詩社とともに現代短歌史上の高峰である。根岸短歌會のなした寫實主義短歌運動が、たとひ何人かの手によつて當になさるべき必需的なものであつたにせよ、それが根岸短歌會の人々の手によつて理論づけられ實踐化せられたといふことは、少くとも、現代短歌史に於ける現實主義短歌の性格を規定してゐることは否定し得ない。假りに、この運動が根岸短歌會以外の人々によつてなされてゐたら、或は、現代の現實主義短歌は、今日吾々の接しつゝあるものとは異つた形で吾々の手に渡されてゐたかも知れないであらう。しかも、根岸短歌會は一應は子規を中心とする一つの精神的共同團體であつた。むしろ、屢々子規個人の會であるかの如くでさへあつた。即ち、茲に根岸

短歌會の位相なる小篇を綴るにあたり、一根岸短歌會の成立、二根岸短歌會の意義、三根岸短歌會の短歌及短歌觀の三項目に分ち、且つ子規を眼前に點じ來り、根岸短歌會を遠景に眺めつゝ考察を進めようとするのは、對象の性質がしかく要求してゐると信ずるからである。

### 一、根岸短歌會の成立

根岸短歌會の成立したのは明治<sup>卅一</sup>三十二年三月である。が、其成立までには相當年月の種重ねがあつた。次に、一成立に至るまで、二前期(三十二年より三十三年まで)、三後期(三十四年より三十五年九月子規の死にいたるまで)の三期に區分し、順次成立過程を實證的にあとづけることによつて、その外貌を浮び出させることにしたい。

一、成立にいたるまで、俳人正岡子規が短歌革新の志向を明瞭に示したのは、二十七年頃のことであつた。彼はこれよりさき二十五年十月には、早稲田文學に我邦に短篇韻文の起りし所以を論ず、と類する一文に於て、古典短歌に對する周到なる理解を示し、つゞいて、二十六年三月より五月に亘つて日本に發表せる、文界八つあたり、中の和歌の項にて、當時の御歌所派を中心とする古典主義短歌の弊を剔抉し、早くも後年の辛辣なる批判の一端を見せてゐた。かくて翌二十七年七月、同じく日本紙上に於ける文學漫言、中の和歌の項及び和歌と俳句の項にて短歌を論ずるや、こゝに初めて古今集卷頭の一首を難じ萬葉集を賛する態度をとるにいたつたのである。彼の古今集及その亞流香川景樹を非とせる態度は、二十六年<sup>註</sup>より二十七年の間に於て初めて見出すことが出来るのである。この態度は次第に彼の信念となつて行つた。彼はさらに二十八年には梅三昧に於て御歌所派の歌に對して科學的なる批判を試みた。彼の具體的な作品評の最初のものである。ついで二十九年の、文學に於ては、早稲田文學、明治評論、めざまし草、太

陽等に掲げられた高崎正風、小杉楳邨、佐々木信綱、金子黨園等の作品を評し、また鐵幹の東西南北に言及して「今の世に歌ありやといふものあらば、心ならずも東西南北を示さん」として革新の意氣に好意を寄せてゐる。かくの如くして、彼の短歌に對する見識と信念とは次第に其の深さと確實さとを加へるにいたり、ついに三十一年二月歌よみに與ふる書十回、百中十首計百十首、人々に答ふ十二回を發表するに及んで、彼の短歌革新運動は急速なる展開を上げたのである。しかしながら、それは上述の如き過程を経てきたものであつて、決して突然としてなされたものではなかつた。

かくて決死<sup>註</sup>の覺悟を以て一度口火を切つた彼の短歌革新運動は、中途にして挫折することを許されない。とはいへ、時代は正に貴族中心文化より工業中心文化へ、主情主義より浪漫主義への展開途上にあつた。彼の寫實精神に立つ理論及び藝術がよき成長をなす爲には、彼はなほしばらく隱忍を強ひられざるを得なかつたのである。

二、前期、三十一年三月二十五日には、上根岸八二番地の子規庵に於て初めて歌會が開かれた。が會者は子規、虛子、碧梧桐、露月、墨水、秋竹、遠人（把栗）等の俳人のみであつた。三十一年はやゝ焦燥のうちに過ぎて、彼にとり、また明治短歌史にとつて意義ふかき三十二年の春はめぐつて來た。

三十二年一月、當時心の華の編輯員だつた香取秀眞、岡籬、大橋文之に山本鹿洲が加はり、秀眞の新年雜詠三十二首に三人の歌をあはせて、三十二番歌合せ二冊を作つた。その一冊は竹柏園に他の一冊は誰か變つた人に判をしてもらはうといふことになり、竹の里人説が出て山本鹿洲が使に立つことになつた。その頃、竹の里人とはまだ誰も面識を持つてゐなかつたので、鹿洲は頗る躊躇したのであつたが無理に行かせられたのである。しかし、竹の里人の名

は、新聞日本によつてすでにこの人々から或驚異と好奇とを以て迎へられてゐた。秀眞の如き一竹柏園（註）より餘程うまいとさへ思つてゐたといふ。この時子規は快く面會して持參の歌を五六日目に返送して來た。それに感激した秀眞と麓とは、一月二十日前後の或日偶然途中であつたのを機會にすぐそのまゝ思ひ立つて根岸の子規庵を訪問した。風のない日の午後三時頃であつたと麓は言うてゐる。子規が病牀にあつたことはいふまでもない。それでもまだ元氣な頃だつた。「誰（註）か歌の仲間をと思つてゐたのですが丁度幸な處ですから此後とも是非來て下さい。あなた方は歌會でもやつておいでですか、題があるなら聞かせて下さい」といふことで大いに歓迎された。子規としては、山本鹿洲の訪問以來今日あることをひそかに心持ちにしてゐたのであつた。かくて、秀眞と麓とは詠草の判の挨拶に行きながら、歸りにはすつかりお弟子になつたつもりで引上げたのである。この訪問は、一時間程の短時間に過ぎなかつたがこれが機縁となつて、前年三月に一度開いて以來中絶してゐた子規庵の歌會を催すことになり、三月十四日にその第一回の歌會が行はれた。所謂後年よぶところの根岸短歌會及子規庵歌會は、茲にその第一歩を短歌史上に印したのである。

この三月十四日の會には、秀眞、麓、鹿洲、木村芳雨、黒井如心堂等が出席した。歌人の加つた歌會はこれが最初であつた。兼題垣十首。四月十八日二度目の歌會があり、麓、鹿洲、秀眞、芳雨、俳人の側から、白雲（飄亭）青々等、兼題山吹、病各五首。七月二日三度目の歌會、歌人側では新しく大橋文之、川崎安民、俳人側では碧梧桐等。文之が根岸短歌會に出たのはこの時だけであつた。兼題旅。この歌會の作品及作品評は短歌小會と題し初めて七月二十四五日の日本に發表され、爾後引つゞき歌會の記事を同紙上に掲げるやうになつた。



八月六日の會には柘植潮音、岡倉一雄、俳人の側では虚子が初めて出席した。兼題夏の月。九月三日の會には赤木格堂、一五坊の二人が加つた。兼題書冊。十月一日の歌會は兼題佛。和田不可得、湖月、山田三子が加はる。十一月五日、兼題鹿。この會より兼題を回覧することになった。十二月三日、無安嶺、桃澤茂春加はる。この一年の間に、子規庵の歌會に集る人々の作品は長足の進歩をなし、ついに日本に短歌を募る辭を掲げ、新年雜詠を募集するにいたつた。愈々對外的に活動すべく準備が整へられたのである。

三十三年一月一日より五日に亘る日本紙上には募集短歌一二一首（作者八九名）が發表せられた。巴子の七首、格堂の三首、左千夫の三首、秀眞の三首等が重なるものであつた。同七日の歌會にはこの第一回募集歌に参加した伊藤左千夫が初めて來り加つた。この日の會者十三名。顔振れがやうやく固定して來た。つゞいて、二月四日より二月二十日に亘る同紙上に第二回募集短歌森が掲載された。短歌一八一首（作者八四名）。不可得一七首、上小澤潛一〇首、無得居士九首、格堂七首、山下愛花三首、左千夫三首、大夢二首、長塚節二首、巴子一三首。四月十五日より二十七日にかけて第三回募集短歌櫻が發表された。短歌一八〇首（作者七六名）、秀眞二三首、巴子一八首、左千夫二三首、巖一六首、格堂一六首、哲壽一四首、大夢四首、葎房子一一首、安江秋水一〇首、茂春七首、奥村政治郎三首、矢野奇偶三首等。これは應募歌數三千餘首より選抜した結果であつた。同三十日には、竹の里人の名による「第三回募集短歌に就いて」といふ募集短歌に對する評論が掲げられた。この櫻の歌にいたつて作品はほぼ子規の理想とする標準に近づいたのである。歌會は一月に引つゞき二月四日、三月四日に行はれ、四月一日の歌會には長塚節が始めてその名を運ねてゐる。節が子規を訪ねたのはこの歌會よりやゝ前の三月二十八日であつた。

四月十五日には萬葉集論講會が催された。この論講會は五月二十日、六月十七日、八月十九日と引つゞき開かれた。子規が眞に萬葉調の作を作るやうになつたのはこれ以後である。

五月十日より、日本紙上には左千夫以下の奉祝東宮殿下御婚儀歌が掲載され、同二十四日の紙上には募集短歌讀平家物語が發表せられた。これは題が困難であつたためか發表の歌數も作者も少く、短歌四二首(作者一七名)に過ぎなかつた。應募歌は少くなかつたが佳作が少かつたためである。中で安江秋水二首、秀眞四首、左千夫五首、節七首、巴子八首等が主なるものであつた。子規は七月一日の紙上に「募集歌讀平家物語に就きて」を掲載して、かゝる題に對して如何なる態度にて臨むべきかを詳細に述べてゐる。

七月二十八日及八月一日の紙上には題詠ならざる格堂、左千夫、子規の作があり、八月二十三日より九月九日に互り募集歌瀧がある。短歌七六首(作者三一名)主なるものは、哲壽二首、巴子二首、秀眞二首、秋水五首、眞二首、茂春三首、節五首、葯房子六首、格堂八首、左千夫一二首等であつた。十月四日には左千夫の洪水のなかに家を守りつゝこほろぎの音を聞いて詠んだ聯作十首が掲載された。

一方子規庵の歌會は四月に引つゞき五月六日、七月一日、八月五日、九月二日に開催せられた。十月の歌會は日が明かでない。十一月以後は子規庵歌會を廢し左千夫、麓の宅にて隔月に催すことになつた。子規の病苦が烈しくなつたためである。この間新しく出席した人に安江秋水(不空)があり、森田義郎があつた。麓眞が子規庵に出入するやうになつたのは、すでに歌會の開かれなくなつた三十四年になつてからである。節が加つて間もなく秋水、義郎の未だ加はらざる三十三年の五月頃、麓が根岸座座附役者の番附を作つて子規に示したのに對する返事として子規の作つた

番附がある。當時の根岸短歌會をしのぶよすがにもなるであらう。

麓、五疊半の茶室の紅白薔薇、鹽谷判官、一力亭主

秀眞、天の香具山の眞禰、勤平、足利直義

不可得、尼寺の百日紅、鷺阪伴内、力彌

三子、西洋料理室の鬼百合、桃井若狭助、小浪

潮音、腸胃病院の庭の梔子花、顔世御前、藥師寺

格堂、竹藪の水仙花、加古川本藏、石堂馬之丞

芳雨、改良髮店の福壽草、定九郎、お石

安民、幼稚園の立葵、原郷右衛門、駕昇

鹿洲、巡查派のしだり柳、大野九太夫、駕昇

茂春、縁日の美人草、お輕、神崎矢五郎

煙村、孤兒院の木蓮華、與一平、一力齋者

無安嶺、掃溜の大根花、猪、天野屋儀平

左千夫、牛小屋の裏の日蓮、高師直、となせ

大星由良之助の役割には争ひ起り候ため衆役者一日代りに相つとめ御覽に入候。

73  
三、後期、三十四年に入ると一月一日及六日の日本紙上に募集旋頭歌雪が發表せられた。作者は左千夫、節、佐草人、大虚、烏堂、無得、奇遇の七名、歌數七首、外に選者詠十首、旋頭歌の募集はこの一回だけであつた。日本紙上

の募集歌は以上で終つてゐる。尤も日本紙上にはひきつゞき左千夫及麓の奉祝皇孫御降誕歌等、詠草の發表は行はれてゐたが、募集歌は一度中絶し改めて週報課題として週報の方に發表せられるやうになつたのである。

三十五年には、一月一日の日本紙上に左千夫の新年の長歌二篇及反歌一首がある。募集歌は前年につゞいて週報の方に發表せられた。四月二十日の日本紙上には詠接骨木樂燒道人（左千夫）五月十八日には節の短歌九首が掲載せられてゐる。伊藤左千夫編輯するところの竹の里人選歌（三七）は前記節及左千夫の歌を以て終つてゐる。なほこの年一月十六日の日本紙上には「短歌を募る」といふ社告があり選者は社員三名とあるが鈴木葎房子があつたらしい。子規の病苦愈々甚しかつたためであらう。二月十一日にその第一回發表があり、葎房子の「選歌に就いて」の評が掲げられた。爾後十二月までの重なる投稿者は岡本大夢、山下愛花、藤真次郎、岡麓、格堂、石原阿都志、中西文彦等であつた。なほ、森山汀川、岡稻里、吉植愛劍、平井晚村等の名も見える。子規はこの年の九月十八日ついに不歸の客となつた。子規を中心とする根岸短歌會の人々の日本紙上に發表せる詠草としては、前記節の歌を以て最後とすべきであらう。

一方歌會は三月九日に上野東照宮内に於て開かれた。出席者は左千夫、葎房子、麓、潮音、眞、芳雨、秋水、義郎等であつた。席上左千夫の武陵桃源の作品にあらはれた主觀的傾向への移行が論議の中心となり、客觀に執する義郎との間に早くも後年の對立を思はせるものがあつた。この會は以前からも存在してゐたものゝ如くであるが、（心華五雜報欄による）この三月の例會以後は、各自の詠草に就て互に意見を闘はせた結果を、心の華に掲げることになつたのである。記事は當時心の華編輯員だつた義郎の手で多く記録せられた。三月の會について、六月十四日には前と同じ東照

宮内に於て、七月二十日には大日本歌學會(心の華發行所)に於て、八月十日にも同所に於て會合が催されてゐる。九月十五日の會は上總の蕨眞の宅に於て開かれ、左千夫、秋水、芳雨、義郎等が出席した。九月子規の死に會ふや、十一月より毎月十九日の子規忌日を例會日に改め、十月十九日、十一月十九日と大日本歌學會に於て開かれた。三十六年一月十九日の例會は雨のため中止されて二十六日に開かれた。この時の出席者は麓、秋水、左千夫、義郎、葯房の五名で、記事は左千夫が執筆してゐる。心の華誌上に記録の存する根岸短歌會はこれで終つてゐる。恐らくこれが最後の歌會であつたのではなからうか。その後の根岸短歌會は、馬酔木、アカネよりアララギに進展した左千夫、節系のアララギ短歌會と、大正十三年春、秀眞、蕨檀堂(眞)、秋圃、不空(秋水)、寒川陽光(鼠骨)等によつて復活せられた子規庵歌會系とに分離して行つたのである。

子規及び根岸短歌會の人々の作品及び評論等の發表せられたものには、日本の外に心の華、大帝國、天地人、國力新佛敎、韻文、小天地等があつた。佐々木信綱と子規との間にあつたのは坂井久良伎である。その上、秀眞、麓、義郎等と心の華との關係は前述の如くであつたしするので、機關雜誌をもつにいたらなかつた根岸短歌會は、屢々作品や評論を同誌に持込んだのである。大帝國も久良伎の關係によつたものと思はれる。大帝國に根岸短歌會の人々の作品が掲載されたのは第二卷第八號(三三)から第三卷第九號(三三)までであつた。久良伎が「へなづち」「くちあみ」等の名によつて子規の提灯を持ち、鐵幹やいかづち會、若菜會等の攻撃文を連載したもこの雜誌であつた。天地人には第四十五號(三三)から第五十四號(三四)までの間に亘つて根岸短歌會の詠草が發表せられてゐる。

惟ふに根岸短歌會の最高潮期は三十三年であつた。當時の子規の意圖は新聞日本を本陣として、漸次他の新聞雜誌

の歌壇を占領し、形勢可ならば機を見てホトトギスの如き機關雜誌を發行しようといふにあり、第一步として國力及大帝國の歌壇の選者に赤木格堂を推したりした。左千夫は焦つて屢々雜誌發刊を提議し、其都度子規より編輯經營の容易ならざるを説かれ、今は實力を養成して徐ろに機を待つべしと諭されてゐた。子規の當時の意氣は三十三年八月一日に鐵幹あてに發せられた書狀によつても知ることが出来る。これは子規が口授して赤木格堂が代筆したものである。

「……或は明星の味方として拙稿を投ずる事を止め、御互に文壇の敵同志として喧嘩する方面白からずやと存じ候、是迄は新派を一團として舊派に抵抗する必要も有之候へども、舊派聲をひそめて事實上大略降服したる今日は新派同志の喧嘩こそ必要と存じ候、明星掲載の歌に就きては小生共の友人の中には隨分議論も有之候事故これを幸に陣頭に相見ゆる機とし致し度くその方歌學界の爲にもよろしかるべきかと存候(略)兎に角兩派に別れて歌戰するも快事と存候(略)……」といふのが大意である。この書簡が發せられるや、伊藤左千夫、坂井久良伎の徒が心の華、大帝國等て事を興味的に傳へたので、鐵幹も亦明星誌上に於てこれに應酬するところがあつた。いはゆる鐵幹<sup>註10</sup>子規不可並稱説である。これは、いふまでもなく浪漫精神と寫實精神との對立であつた。そしてさう解釋することによつて重要な意義を見出しうるのであるが、當時はたゞ徒なる感情論に終つてしまつた。

三十四年になると、子規の病勢昂進精力減退に伴ひ、募集短歌は中絶せられ歌會は行はれなくなり、一同意氣消沈して再び前年の活氣を見得ざるにいたつた。それとともに子規の態度も積極より消極に變じ、その作品も狭く深く主觀的になつていつた。

三十五年には其創作的精力愈々衰へ、歌會も俄に振はざるやうになつた。彼は瀕死の病床にありながらなほ一日も歌界統一の理想を絶たなかつたのであるが、ついに三十三年の盛運を挽回することをえず、その死後左千夫をして「子規の歌壇の偉人たることを知るもの天下に幾人もない」といふ、歎聲を敢へてせしめつゝ、後年大正期のアララギの登場を地下に於て俟たねばならなかつたのである。

彼の死後の根岸短歌會が統一を失ひ次第に分離していつたことは、前述せる如くであるが、なほそれについては寫實主義短歌の展開の項を参照せられたい。

註1 齋藤茂吉氏の明治大正短歌史概観(改造社現代日本文學全集三八卷)四九六頁。「明治三十一年一月から香取秀眞、岡麓等によつて根岸短歌會が創立された」とあるのは、三十二年に改めらるべきである。

註2 與謝野鐵幹氏の新派和歌大要(三五)一一七頁。「二十六年夏、僕(註鐵幹)と槐園が松島見物に往つた時に、子規君もあの方で遊んで居つて槐園と子規君とが出會つたことがある。其時に槐園から國詩の革新せられねばならんことを色々子規君に話した所が、子規君の曰くに、至極御同感であるが、僕はまだ和歌のことは研究しないから和歌の標準といふものは頭から解つて居らぬ、けれども此頃は古今集が面白いと思つてゐると云ふ話であつた。『古今集が面白いやうでは俳句には明るい人であらうけれども、和歌はまだ如何にも初心である』と評した位のことである。云云」とある。なほこの槐園子規の會見は、子規のはて知らずの記(改造社版子規全集第十卷)及び、鐵幹槐園の松風島月(八月二十八日、日本)とでは日時が一致してゐない。とにかく二人が會つたのは二十六年の七月三十一日頃であつた。子規の萬葉集に對する態度がこの年の末から二十七年にかけて變つてきてゐることは注目すべきである。

註3 此頃歌をはじめ候處餘り急激なりと幽翁はじめ皆々に叱かれ候へどもやりかけたものなら死ぬる迄やる決心に御座候昨夜も

湖村子來訪歌の話に夜の二時迄更かし申候同子も漢語が多過ぎると申て忠告いたしくれ候前月末頃は歌のため毎夜二時一時に及び或は徹夜など致し候此頃のよわりも多少はそれに原因致し候ひけんと存候尤も愚見は漢語を用ゐざれば歌にならずなど申すにては無之萬葉調など大に好む所に御座候(三十一年三月十八日、愚座あて)

近日歌論沸騰の餘小生も彼是さし出口叩くやう相成嗚かし御笑ひ種に相成候事と存候尤も歌については前年來しばし打て出でむとして出づる能はざる事情有之(先輩と衝突するが大原因に相成申候)そが爲歌といふものは人のも自分のも一切出さざる方針を相取申候然るに過日來歌論和歌續々あらはれ(註、日本紙上の新自讃歌等をさす)候につきては愚論愚歌をも並べたく羯南氏に相願ひ候上にて拙歌等掲載の儀を許され漸く數年來の宿志を遂げ申候(略)攻撃四方より至り候へども自ら多少信ずるところ有之候上は死を決しやる所存に存候(略)(同年三月十九日、落合直文あて)

歌につきては内外共に敵にて候外の敵は面白く候へども内の敵には閉口致候内の敵とは新聞社の先輩其他交際ある先輩の小言に有之候(略)併し歌につきてはたび々失敗の經驗有之候故今度はじめより許可を出願して而後に出しはじめしものに此上は死ぬる迄ひつこみ不申候。(同年三月二十八日夏目漱石あて)

註4 香取秀眞氏の根岸短歌會の思出(改造社短歌講座第十二卷、八五頁)による。岡齋氏の子規の追憶(同書、一七八頁)による。と、十番歌合となつてゐる。席上子規説を提議したのも秀眞氏によれば大橋文之だとなり、岡氏によれば秀眞氏とある。

註5 前記根岸短歌會の思出八四頁。

註6 前記子規の追憶一七八頁による。なほ秀眞氏の根岸短歌會の思出八三頁には「明治三十二年の二月である。日はどうしても思出せない。私が先生からいただいた最初の手紙が二月十一日の日附で、それに「先日は御光來被下候處以梅中にて失禮致候」とあるから、上句であつたことは間違ひない云云」とある。



註7 前記根岸短歌會の思出八六頁による。

註8 アアラギ一ノ一〇(大正八、一〇)二九頁による。

註9 毎月十九日、子規の忌日に子規庵に會し、兼題の外に席上一題十首を課し互選し批評する等子規生前の會を髣髴せしめるものがあつた。そこにアララギへの反撥といふやうなことも考へられなくはない。その成果は歌集わかくさ(昭四、四)にまとめられて、子規庵歌會から發行されてゐる。

註10 拙稿、新詩社の短歌運動の項を參照せられたい。

## 二、根岸短歌會の意義

子規庵歌會を一般には根岸短歌會とよんでゐるが、根岸短歌會といふ名稱の生れたのは後のことであつて、その頃の子規庵歌會はさういふ名では呼ばれてはゐなかつたといふことである。しかし當時すでに根岸短歌會と呼んでゐた例がなくもないので茲にはこの名稱に従つておく。

根岸短歌會は淺香社、新詩社と共にまた一應は精神的共同團體であつた。子規の俳句革新は宗匠弟子の階級を打破し、月並宗匠を粉碎することが重なる仕事の一つであつた。さういふ一介の書生子規としては、短歌に於ても「註自分に弟子はない皆友だち」であるといふ態度をとつたのは當然である。しかるに歌の仲間だけは最初から子規を先生と呼んでゐたのである。子規庵の歌會に集つた人々のうちでは、最初は香取秀眞が「註お弟子の頭」であつたが、左千夫が加はるやうになつてからは最年長者であつた上に、何事にも口を出すといふ性格であつたので、いきほひ仲間の軸になつていつた。それとともに秀眞は歌會に顔出しをせぬやうになつていつた。そこに多少對立的なものがあつたら

うと想像されるのである。

淺香社系の團體はいづれも若く都市的であつた。その短歌運動は新時代の青年子弟を對象に行はれた。根岸短歌會の人々は地方的であり、年齢に於てもやゝ長じてゐた。麓と秀眞とは子規を訪ねる前に寶田通文に入門してゐた。通文は神道學者で典型的なる宗匠氣質の持主であつた。さういふ通文に師事した麓などにとつて、直文の自由主義的な態度には却つて物足らぬものがあつたらうと思はれる。麓は度々掃除町時代の直文を訪ねてゐながらついに淺香社の仲間には加らなかつた。さうかと言つて、疑問など質さうとすると言下に折伏せてしまつたといふ舊時代的な通文にも十分満足しえなかつたのである。さうした惱みを通つてきてゐた麓は、子規によつて、直文の持たぬ指導的精神より來る重壓感と、通文の持たぬ自由主義的な親愛感とを請けとつた。かういふ空氣はひとり麓にとつてばかりでなく、秀眞にも、左千夫にも、根岸短歌會一般に共通してゐた。従つて根岸短歌會は子規について言へば、精神的共同團體であり、集る人々からいへば子規を師とする師弟關係の團體であつた。そのみならず、子規は時代の浪漫主義短歌に満足しえぬための、或はさういふ事が適當でないとすれば、それへの對蹠的立場にある寫實主義の上に立つてゐるための、指導精神に燃えてゐたのである。しかも彼は反動國粹主義を標榜する新聞「日本」に據つてゐた。他の短歌の團體に比して、なほ多くの封建的地方的宗匠氣質が濃く滲んでゐたことは否定しえぬところであつた。殊に生命の長からざるを知る彼は門流を作るに汲々たるものがあつた。子規没後根岸短歌會の系統が強固な封建的師弟關係をかためられるやうになつていつた一端は、すでに根岸短歌會に於て見出されるのである。が、少くとも革新運動當時に於ける限り、根岸短歌會は一應は精神的共同團體であつた。短歌小會短歌第一會等々作品の共同製作及共同批判が

こゝにあつた。前述せる如く子規が古典主義短歌批判の聲を最初に發したのは二十七年七月のことである。子規はこれよりさき、我邦に短篇韻文の起りし所以を論ず、のうちに於て、我邦に短歌の如き短篇の韻文が長く榮えた理由を平和の永續と自然の美とによるとしさらに一步をすゝめて、一、平安朝に入りてより短歌が公卿の玩弄物となりしこと。二、叙事よりも叙情を、叙情よりも叙景を主とせること、語を換へて言へば錯雜にして變化多き人間社會の現象を模寫せずして、専ら簡單にして靜然なる天然を模寫せるため、さらに換言すれば偏に山光水色若くは花木竹草の如き幾多の長時間に微妙の變動を成就する容觀的の萬象が、直接に吾人の裡に生じたる表象をとりて、これに極めて僅少の理想を加へて一首の韻文を構造するにすぎなかつたこと。三、我邦の事物は皆規模の小なること等に分ちて詳論し、かくて短歌流行久しくして古語古文法に拘束せらるゝにいたり、ついに俳句が生れたと説いてゐる。彼は短歌と俳句とは全く同一のものであつて、たゞ詩形の長さがちがふだけと考へてゐた。ついで文界八つあたりの中の和歌なる項目に於て、當時の古典主義和歌に對する不滿を述べ、近來新聞雜誌まで詩歌小説の類を載せざるはなく、そのうち最普通なるは三十一文字の和歌であるが、今の世の文學に於てこの三十一文字程つまらぬものはまたとない、それは歌人其の人が面白からぬためである。試に今日の歌人は如何なる人かとたづねると、先づ國學者、神官、公卿、貴女、女學生、少し文字ある才子、高位高官を得たる新紳士、我歌を書籍雜誌の中に印刷してみたき少年の如き者である。ために短歌は最早地に墜ちてしまつた。これ第一歌人に見識なきこと、第二言語の區域狭く新句法を用ひ新意匠を述ぶるを得ぬことゝ由る。この上は多少の新語を挿むか、和歌のみに頼らずして長歌を用ふるかの外に別に方便もあるまい。今日和歌といふものゝ價値を回復せんとならば所謂歌人の手を離して之を直接詩人の手に渡す一策のみ

である、としてゐる。二九年の文學にいたつて彼の萬葉集を重んじ古今集を貶する識見が明瞭に示されるにいたつた。三十一年の歌よみに與ふる書のうちには、萬葉調作家源實朝及眞淵を稱揚し、和歌は萬葉以來一向振ひ不申、たゞ近來生等の相知れる人の中に、歌よみにあらで古調を巧に模する人少からぬを知り申候というてゐる。相知れる人とは日南愚庵を指したのである。彼は語を次いで曰く、貫之は下手な歌よみにて古今集はくだらぬ集に有之、その作品はすべて無趣味である。明治の景樹派は景樹の俗なるところを學んで景樹よりも下手につらねてゐるにすぎない（再び歌よみに與ふる書）。元來歌調にはなだらかなる調もあり迫りたる調もある。歌はすべてなだらかなるものとのみ心得てゐるのは誤である（三度歌よみに與ふる書）古今調短歌は多く理窟的趣向に陥つてゐる。ために甚だ殺風景である（四度歌よみに與ふる書）。かくて和歌の精神こそ衰へたれ形骸はなほ保つべし、今にして精神を入れ替へなば再び健全なる和歌となりて文壇に馳驅するを得るであらう。しからば何がかく和歌を腐敗せしめたかといふに、趣向の陳腐が最大原因である。趣向を新にせんがためには寫生を方法とする客觀描寫によるべきである。元來和歌とは俳句の長きもの、俳句とは和歌の短き者なりと謂うて何の故障もない。和歌と俳句とはたゞ詩形を異にするのみである。と。彼の百中十首はかういふ短歌觀を根柢として生れた作品である。彼の寫實主義短歌の提唱はかゝる俳句的なるものを多分にその背景にもつてゐた。彼はいふ、和歌は長く上等社會にのみ行はれたるがために腐敗したのである（人々に與ふ十一）。今まで隱居したる歌社會に老人崇拜の田舎者多きを怪むに足らねども、此老人崇拜の弊を改めねば歌は進歩不可致候、歌は平等無差別なり、歌の上には老小貴賤も無之候、明治の漢詩壇が振ひたるは老人そつちのけにして青年の詩人が出たる故に候（たび歌よみに與ふる書）と。茲に彼の自由主義思潮に出發せる短歌革正の見解を

求めることができる。

然しながら彼のこの自由主義的思想はついに文學といふ觀念の世界のうちに限られてゐた。さらにいへば、文學の方法の範圍内に限られてゐた。それは彼の世界觀にまで滲透してはゐなかつた。といふよりも壯年以後の彼はさうした時代への反省や批判を持つてゐなかつた。生は和歌に就きても舊思想を破壊して新思想を注文する考(六たび歌よみに與ふる書)であると宣言しながらも、それは短歌の趣向の上に限定せられてゐたのである。彼の中學生時代は自由民権運動が四方に起り反政府熱強烈を極めて、政府は極端に神經をとがらせてその彈壓に努めてゐた時代であつた。加ふるに、彼を生んだ松山中學の第一期の校長は當時の民権家草間時福であつた。縣令の岩村高俊も亦自由民権論者であつた。「廢藩後間もない頃だつたので何もかも新規蕪直しになるのだが、舊いものは倒れて新しいものはまだ出來かけ」であつた。板垣退助の同志社一派の雄辯家はしきりに土佐から松山に來て政談演說會を開催したりした。中學生時代をさういふ自由主義の思潮による政治熱のうちに成長して來た彼は友人等と演說會を組織して、「自由何クニカアル」と叫び、また「天將ニ黒塊ヲ現サントス」と題する國會開設要望の政談演說(たご)を試みて中止をうけたことさへあつた。かういふ空氣の中に成長して來てはゐたのであるが、彼の短歌作品には、前述の如き現實生活の無意識的肯定者としての限界が存してゐた。けだし、彼の思想性格のうちには、自由主義的要素と、そのうらに執拗なまでに殘されてゐる封建的士族的要素とが背中あはせになつてゐたのである。それはとりもなほさず、社會一般の情勢を反映してゐた。そのうへ、當時の社會一般の情勢は、自由主義の順調な發達を阻まうとする傾向に進みつゝさへあつた。彼は下級士族の子であつた。當時にあつて、武士としての特權を失つた士族階級は、何よりも新時代に處して如何に

自己の生活の基礎を開拓すべきかといふ問題に逢着せざるを得なかつた。成功を希ひ名譽を望んだ青年の多くは政治に走り經濟に志した。社會の情勢がしからしめたのである。彼も亦普通の青年の如く先づ政治家たらんとした。つぎに彼は哲學を專攻せんとし、さらに轉じて文學に移り詩人たらむことを欲するにいたつた。且つ彼は早く父を失ひ生活を目ら支へなければならぬ境遇にあつた。學生時代には舊藩主の貸費にすがらねばならなかつた。略血に惱みながらも十分に療養を加へる餘裕すら與へられなかつた。生活は事實である。彼は何よりも生活といふ事實のために新聞日本に入社したのであつた。「彼の俳句和歌の革新運動は客觀的文化運動の新精神に根ざしたものである。然るにそれは國粹主義者等に得たり賢しと利用された氣味があるとする考察」と、彼の和歌は「しきしまのみち」即ち「日本精神」の表現そのものであつたとする考察との對蹠的觀察がこゝより導き出されてゐる。彼はそのどちらでもあつた。彼のうちに、どちらか一方の面を見出して、他のもう一つの面に強ひて眼を閉ぢようとするのは彼の全面への無理解を示すに過ぎない。たゞ、彼がその自由主義精神を、政治經濟の面より、哲學文學といふ觀念的な面に彎曲せしめられるにいたつた過程に於て、透谷の通らねばならなかつた悩みを見せてゐないことは否定し得ない。それだけ彼の中には封建的なるものが殘存してゐたのではなからうか。勿論現實生活がいや應なく彼をさう導いたことも十分考慮せられねばならない。が、それだけなら、彼と同じ様に結核性の病者であり、彼以上に生活の不安に打ちのめされてゐた啄木は短歌のうちに生活や社會性を採入れてゐる。子規の場合にあつては、寫實がより多く自然界に向けられ日常生活相の作品といへども、現象的に扱はれてをり、晩年の作は東洋流諦念觀の濃い心理的作風になつてきてゐる。此事は當時の社會狀勢のうちに、多分に封建的なるものゝ殘存せることを反映せるものである事はすでに觸れた所で

あるが、同時に彼の性格思想のうちの封建的なるものと關聯せしめることによつて、正當に理解しうるであらう。

彼は新時代の文化運動にも反對の意を示した例が少くない。たとへば新體詩運動に對する如き、また言文一致運動に對する如き。彼のこの消極性は俳句和歌の革新期を過ると共に、再び三十三年の終頃から彼の上に現れて、革新時代とは逆に定型保守傳統尊重の傾向を示すにいたつてゐる。それ故に彼は短歌の形式そのものゝ價値を正しく認識し得もしたのであるが、(俳句に於ける新傾向の句は彼の革新運動時代の自由主義をそのまま進展せしめたものであつて、彼の退却に置き去りにされたものといへる。)かく見て來る時、言ふまでもなく彼の短歌革新運動は彼の積極的な面であり、その根柢は前述せる如く彼の自由主義思想に出發してゐた。一言にしていへば、それは短歌内容(趣向)及形式(用語及形式)の自由論であつた。彼の古典主義短歌の否定は趣向の陳腐といふ一點に集中されてゐた。彼は、短歌の内容たる趣向を擴大し自由にして、新鮮なる趣向を自由にして新鮮なる語を用ひ、寫生の方法によつて、客觀的に具象的に表現しようとしたのである。彼は進んで短歌の定型に對してさへも自由論を持つてゐた。二十七年八月の字餘りの和歌俳句を見るに、彼は字餘りの和歌俳句を積極的に主張し、字餘りといふ代に、三十二字の和歌三十三字の和歌といへばよい。和歌の陳腐を脱せんには三十二、三字の新調を作ることが必要である、として、百中十首には多くの字餘をみづから試みてゐる。しかも、彼の積極的な革新論は三十三年の終頃から明に一轉して保守的な相を帯びるやうになつて來た。革新運動が頂點を越えたための弛緩とか、病勢昂進に伴ふ製作慾の減退といふやうなことも、その原因ではあつたらうが、さうした事が動機となつて、彼の本質のうちの消極的な面が表面に現れてきたものと見ることができよう。晩年の彼の作歌がさういふ態度によつてなされたといふことは、彼以後の寫實主義短歌を規定し

それに重要な影響をあたへてゐる。即ち伊藤左千夫は晩年の主觀的心理的な作風を繼承發展せしめ、長塚節は子規の自然寫生の面を繼承發展せしめた。アララギ短歌會の歌風が専ら個人心理の描寫と自然觀照の面に限られて行く素因の一つは、すでに子規のうちに存してゐたのである。最近のアララギに見える日常生活相の歌にしても、左千夫の日常生活相の歌に出發してゐると考へられなくはない。しかも左千夫の日常生活歌は子規に出發してゐる。而して、そこには積極的な色相——自然觀照歌や個人の心理描寫歌に比して——が共通してゐる。これらの作品こそ、寫實主義短歌を積極的に意義あらしめるものであつた。このことは子規の日常生活歌が、彼の積極的な革新運動時代、即ち晩年の作に入る一步手前に、多く現れてゐること、關聯せしめて考察せられねばならない。

彼の短歌革新運動はすでに淺香社に於て一應開拓された上に立つてゐた。直文、信綱、鐵幹等は身を以て短歌革新の事にあたつて來た。彼等は自由主義を根柢とする和歌改良論の上に立つてゐた。子規の革新運動はそれらを足場としてその上に樹立せられてゐた。従つて彼は古典短歌の破壊運動の上にはたゞそれに最後の止めを刺したにとどまつてゐる。根岸短歌會の使命は破壊の面よりは建設の面にあつた。彼及び根岸短歌會の人々の作品に比較的動きの少いのは、上述の如く新派短歌が一つの安定に達した後に初めてその革新運動の第一歩を踏み出したのに起因する。いへば、根岸短歌會の意義は古典主義短歌の否定よりも、時代の主觀的な浪漫主義短歌に對立する、科學的な批評の方法及び客觀的な寫實主義短歌の樹立、並に後の現實主義短歌への展開の基礎を築いたといふ上にかゝつてゐる。それは浪漫主義短歌と共に向う的な新興階級の藝術形式を代表するところのものであつた。

註1 香取秀眞氏根岸短歌會の思出、(改造社短歌講座、第十二卷九二頁)による。



註2 大帝國三ノ五(三三、九)新歌界の新消息等による。

註3 岡鷺氏の子規の思出(註1と同書)による。

註4 同氏のアララギ一二ノ一〇(大年八、一〇)の記事による。

註5 三並良氏の、子規の少年時代(日本及日本人一六〇號、正岡子規號七四頁)。柳原正之氏の子規の青年時代(同誌八五頁)による。

註6 西宮藤朝氏の、人及び藝術家としての正岡子規(大正七、六)。三井甲之氏の、正岡子規に関する論說等を参照。

註7 拙稿。淺香社の短歌運動、及び、折衷派の完成、を参照せられたし。

附  
錄

現代短歌大年表 上卷

（自明治元年  
至明治三十五年）

# 參考雜誌新聞表

(自明治三十五年)  
(至明治三十五年)

(あいうえお順)

秋田風雅集

第一卷第七號

(三三・三五・三六)

(秋田)

亞細亞

(亞細)

第一卷第一號

(三三・三四・三五)

(終刊)

郵便報知新聞

(郵便報知)

第一號

(三七・三五・三六)

(二七・報知新聞ト改題)

以良都女

(以良)

第八四號

(三三・三四・三五)

いささ川

第七號

(三三・三三・三三)

(終刊、心の華ニ接續)

韻文學

(韻文)

第一號

(三三・三三・三三)

今文

(今文)

第二卷第一號

(三四・三四・三四)

(古今文學ヨリ改題)

裏錦

(裏錦)

第一號

(四〇・四五・一一)

大八洲學會雜誌

(八洲)

第一號

(一九・一九・二一)

(七〇號ヨリ大八洲雜誌ト改題)

歌文新誌

第一號

(二四・七)

學

(學)

第一號

(三三・三三・三三)

(終刊)

學林

(學林)

第一卷第一號

(三三・三三・三三)

一八五號(三四・一)以後

未檢

歌學	(歌學)	第一卷第一號	(三五四)	(終刊)
歌林	(歌林)	第五號	(三五九)	
家庭雜誌	(家庭)	第一一九號	(三五八)	(終刊)
歌文	(歌文)	第一號	(三七二)	
歌文學				
學窓餘談	(學窓)	第一卷第一號	(三七四)	
學生園	(學生)	第四卷第一號	(三三九)	
花月新誌		第八號	(三三九)	
閨秀新誌	(閨秀)	第一五五號	(一七〇)	
藝文	(藝文)	第七號	(三三〇)	
京都新聞	(京都新聞)	第一號	(三五八)	(文友社)
國民之友	(國友)	第一三九號	(二九二)	(京都)
皇典講究所講演	(皇典)	第一卷第一號	(三〇一)	(終刊)
國民新聞	(國民新聞)	第二卷第三七二號	(三一八)	
國民文學	(國)	第一八〇號	(三二八)	
		現存	(三三二)	
		第三〇一號	(三四四)	(日本文學下改題)

國文	(國文)	第二四號	(二七・二五)	
ことばの花	(こと)	第一四號	(二六・八七)	
國學院雜誌	(國學院)	第一卷第一號	(二七・一一)	
國學	(國學)	第一〇號	(二七・二二)	
高等國文	(高國)	第一二號	(二八・二八)	
國文雜誌	(國誌)	第一二號	(二八・二二)	
心の華	(心華)	第一卷第一號	(三〇・三三)	(いささ川ヨリ改題)
古今文學	(古今)	第一卷第一號	(三三・一一)	(以下今文ニ接續)
小柴舟	(小柴)	第五編	(三五・五一)	(大阪)
山陽新聞	(山陽新聞)	第七三五六號	(三六・八一)	(岡山)
三眼	(三眼)	第一二號	(三三・五六)	
出版月評	(出版)	第四〇號	(三三・八七)	
しがらみ草紙	(柵草)	第五九號	(三三・一〇八)	(二六・五柵草紙ヨリ改題) (終刊)
少年文庫	(少庫)	第一卷第一號	(三八・一一)	(八月、文庫ト改題)
史學會雜誌	(史會)	第一三號	(三三・一一)	(史雜學誌ヨリ改題)

しきしま	(しき)	第一九五號	(三四・四〇・三)	(終刊)
史學雜誌	(史學)	第一編第五號	(昭五・五)	
城南評論	(城南)	第一一號	(三五・六)	(以下しからみ草紙ト合併)
精華	(精華)	第四一號	(三五・八五)	
淑女	(淑女)	第一卷第一〇號	(三五・八九)	
思想	(思想)	第一號	(三六・六)	
自由新聞	(自由新聞)	第一三四號	(三六・三)	(自由ヨリ改題)
詞林	(詞林)	第二九號	(三八・二)	第三〇號(三一・二)以後
新聲	(新聲)	第一編第一號	(三九・三)	第四六、七、一六、一七編
新國學	(新國)	第一四號	(三九・九)	
新小説	(新小)	復活第二號	(三九・七)	第三卷第三號以後
新佛敎	(新佛)	第一卷第一號	(三三・一)	第三卷以後
新文藝	(新文)	第一九號	(三四・九)	
新文		第七號	(三四・二)	
小天地	(小天)	第一卷第一號	(三五・一)	(大阪)

第四編第四六號  
(二六・九)以後

第三〇號(三一・二)以後  
第四六、七、一六、一七編

第三卷第三號以後

第三卷以後

少年界	(少界)	第一二號	(三五・五二)
白百合	(白百)	第一卷第一號 第四卷第六號	(三五・六四) (四〇・四)
少年園	(少園)	第七二號	(三一・一〇)
小國民(又ハ少國民)	(少國)	第一四年第一二號	(三三・二六)
青年文學	(青文)	第一四號	(三五・一三)
精神	(精神)	第一六號 第七〇號	(三五・一〇) (三八・一一)
小文林	(小文)	第一卷第一〇號 第二卷第一〇號	(三五・二五) (三七・七)
小日本		第一三〇號	(三七・七) (終刊)
少年世界	(少世)	第一卷第一四號 第八卷第二四號	(三五・一一) (二八・一一)
少年文集	(少集)	第一卷第一號	(二八・八)
世界之日本	(世界)	第一卷第一號 第五卷第五六號	(二九・三七) (三三・三)
少年俱樂部	(少俱)	第二卷第一二號	(三一・一一)
少女界	(少女)	第一〇號	(三五・一四)
太陽	(太陽)	第八卷第二四號	(二八・一一)
大帝國	(大帝)	第一卷第一〇號 第三卷第一〇號	(三一・一六) (三三・一〇)

(明治書院)  
(終刊)

(以下明治評論ニ接續ス)  
(大阪文林會)

第一號ヨリ  
第五號マデ

二ノ二、三號  
八ノ一〇、一二號  
四ノ三、四、五、三、二、一號  
三ノ四號

中外新聞	女學雜誌	知玉叢誌	女鑑	女學講義	中學新誌	女子の友	中外時論	中央公論	女學世界	中學世界	哲學雜誌	帝國文學	天地人	東京日日新聞
(女)	(女)	(知)	(女)	(女)	(中)	(女)	(中)	(中)	(女)	(中)	(哲)	(帝)	(天)	(東京日日)
第四一號	第五一六號	第四五號	第一卷第一號	第一號	第一卷第八號	第一七三號	第一號	第一四一號	第一卷第十一號	第一卷第十二號	第一卷第二〇號	第二一九號	第二二九號	第一號
(慶應四・三)	(一八・七)	(三・四・一〇七)	(二四・三)	(二五・四)	(三〇・九)	(三八・一六)	(三一・四)	(三一・六)	(三三・二)	(三五・二)	(三三・一〇八)	(四一・九)	(二八・二)	(五・二・二)
		(橫濱)					(明治評論ヨリ改題)	(反省雜誌ヨリ接續)			(哲學會雜誌ト稱ス)			

創刊ヨリ七年マデ  
一八年ヨリ二一年マデ



東京經濟雜誌	東洋學藝雜誌	東洋學會雜誌	東京獨立雜誌	花の八千種	反省會雜誌	花の園生	諷歌新聞	筆の花	婦人教育雜誌	文	文則	文學	文學界	文海
(東經)	(東學)	(東獨)	(八千)	(反省)	(花園)	(筆花)	(婦教)	(文)	(文則)	(文學)	(文學)	(文學)	(文海)	
第二二〇號	第一號	第四編第一〇號	第一集 第六九號	第一集 第二二號	第一三〇號 第二四號	第一一六集 第一七〇號	第一二七號	第四卷第一號	第一號	第一號	第一號	第一號	第一號	第一號
(大一一)	(六一四)	(二九二)	(三五三)	(二七五)	(三〇八)	(二二一)	(二二一)	(二二一)	(二二一)	(二二一)	(二二一)	(二二一)	(二二一)	(二二一)
(二二)	(二二)	卷四	六六	八八	以下中央公論ニ接續	六六	六七	四〇	四〇	五三	一一	一一	一一	一一

(元・四) 終刊

第一號ヨリ第三號マデ

第六四集ヨリ第一〇集マデ以後

文藝俱樂部	(文)	第一五卷第三號	(二八・二)	
文庫	(文)	第一卷第一二號	(二八・八)	
文藝新聞	(文)	第四〇卷第一二號	(四三・八)	
文藝界	(文)	第一號	(三三・二)	
婦人界	(婦)	第一號	(三五・二)	
評釋界	(評)	第六號	(三五・二七)	
ホトトギス	(ホ)	第一號	(三四・一)	
日本大家論集	(日)	第六卷第一四號	(三〇・一)	
日本人	(日)	第六卷第一二號	(三五・二)	
日本文學	(日)	第一卷第一二號	(二七・二五)	
日本學誌	(日)	第七〇四號	(二一・四)	日本及日本人ト改題 途中廢刊四回アリ
新潟歌學協會雜誌	(新)	第一號	(二一・五)	
日本	(日)	第二〇號	(二一・四)	(二一號ヨリ國文學ニ接續ス)
日本之文華	(日)	第三號	(二一・四)	
日本學會雜誌	(日)	第一號	(二一・四)	(神奈川)
		第六號	(二二・一)	新潟
		第九一九四號	(二三・二)	
		第一九四號	(二三・二)	
		第二四號	(二三・二)	終刊
		第一八號	(二三・二)	
		第一八號	(二四・九)	(京都)

日本評論 (日評)  
 日本學會 (日學)  
 二六新報 (二六新報)  
 日本主義 (日主)  
 明治歌林 (明歌)  
 明治會叢誌 (明叢)  
 名家談叢 (名家)  
 明治評論 (明評)  
 めざまし草 (めざ)  
 明治小説文庫 (明説)  
 明星 (明星)  
 大倭心 (大倭)  
 讀賣新聞 (讀賣新聞)  
 兼葭具佐  
 萬朝報 (萬朝報)

第一九號 (三三・一三)  
 第一九號 (三五・一三)  
 第一九七號 (二七・〇二六)  
 第一五號 (三三・〇五)  
 第一四七集 (三一・一三)  
 第一號 (二七・一三)  
 第一〇號 (二八・一三)  
 第一號 (三〇・一〇)  
 第五號 (三五・一三)  
 第一〇號 (三一・一三)  
 第一〇號 (三三・一四)  
 第一號 (三九・一三)  
 第一號 (二九・一三)  
 現存 (七・一三)  
 第一〇號 (二二・一〇)  
 第二〇號 (二二・一四)  
 第一九七號 (二五・一六・一三)

(日本學會雜誌ヨリ接續)  
 (東京二六新聞ト改題)  
 (精神ヨリ改題)  
 (以下中外時論ト改題)  
 (終刊)  
 (終刊)  
 (終刊)

(一八年)ヨリ(二一年)マデ  
 (一八年)ヨリ(二一年)マデ  
 (一八年)ヨリ(二一年)マデ  
 (一八年)ヨリ(二一年)マデ  
 (一八年)ヨリ(二一年)マデ  
 (一八年)ヨリ(二一年)マデ  
 (一八年)ヨリ(二一年)マデ  
 (一八年)ヨリ(二一年)マデ  
 (一八年)ヨリ(二一年)マデ  
 (一八年)ヨリ(二一年)マデ  
 (一八年)ヨリ(二一年)マデ

月日の不詳となれるものハ初期の調査  
 月日不明なるものハ初期の調査

て表中より省いておいた。たゞ和歌専門

よしあし草

(よし)

第二一六號

(三三・二七)

六合雜誌

(六合)

第三七一號

(四四・三〇)

早稻田文學

(早稲)

第七年第一六一號

(三一・四一)

をんな

(をんな)

第五卷第一〇號

(三八・二〇)

第一號ヨリ第六號  
 マデ第一八號第一七號  
 第二號第二〇  
 第一號(一三・一〇)  
 ヨリ第四〇號(一  
 六・一二)マデ  
 (二八・四)ヨリ(二  
 八・一二)マデ

例 言

一、本表は明治元年以後大正末期に亘る歌書及新聞雜誌に發表せられたる短歌に關する評論研究の殆んどを年代順に排列し毎年の終に歌壇事項を添へたものである。

一、排列は年月の次にイ單行本(書名、著者、發行所、但し著者の發行にかゝるもの發行所を省く)ロ雜誌(題目、執筆者、雜誌略號、卷號數)ハ新聞(題目、執筆者、新聞名、日附)ニ歌壇事項、の順序に従ひ月によつてそのうちの或項目を缺く場合は順に繰上げておいた。歌壇事項中歌人氏名歿の下の數字は、享年。次の書名はその著作にかゝる未刊本、但し×印のある書名は後に刊行せられた由なるも未見に屬するものである。

一、茲に收録せる項目中、雜誌新聞の部にあつては實物によらざるものは一項も存しない。單行本も殆んど實物による方針をとつたが、出版された事實のもので、どうしても實物を見ることができなかつたものは、年末の月不詳のうちに収めておいた。月不詳のうちには、イ全然最初より月日の記入なきもの、ロ改装のため

月日の不詳とされるものハ初期の調査に屬し發行月日を寫しておかなかつたものにして其後再び該書を手にする機を得ざるもの、等がふくまれてゐる。未見のものは極めて少數にすぎない。

一、單行本は初版の刊行年月、新聞雜誌の項目は初出にかゝるものを主とした。明治前半期の單行本には裝幀奥附を變へた後摺本が少くない。その大部分は何とも斷つてないのが普通になつてゐる。それらは最初のものでさかのぼることを原則とした。

一、單行本及評論研究の本流的なものは殆んど盡したつもりである。詠草は短歌史的に見て、必要と思はれるものをだけ採録した。たとへば、日本、二六新聞、めざまし草、讀賣新聞等の淺香社、竹柏會、いかづち會、若菜會、根岸庵歌會詠草等々である。これらは、新派和歌の發生成長を語るものであつて、しかも、大部分は一度新聞に掲げられたゞけのものである。

一、調査した新聞雜誌は最初に表にして掲げておいた。雜誌名の下は略號である。この外にも調査した雜誌は少くないのであるが、引用項目の存しないものは、すべ

て表中より省いておいた。たゞ和歌専門雜誌は引用項目の存しないものをも表中に加へ誌名の下に略號を附せずにおいた。一、本表はもと目下執筆中の短歌史のために作成したものである。従つて單に實證主義的な羅列には終つてゐないつもりであるが、同攻者から見たら尙遺漏が少くないことであらう。それらは他日の補正を期する次第である。たゞこの方面の研究者とつて一部の資料として役立つれば光榮である。さらにこれによつて同攻の士を得て共に研讀を重ねるやうになれば望外の喜である。本表を發表する目的も一にこゝにある。

一、本表は頁數の都合上ひとまづ、新派和歌の確立した三十五年までを掲げることにした。その後の分も近く發表する筈である。本表作成にあたり國崎望久太郎、瀧澤八郎、瀧定の三君の協力を得たこと少くない。記して以て謝意を表す。

一、參考新聞雜誌表中の未檢の分、及び毎年未の月不詳の單行本について、大方の示教を切に願ふものである。

立命館大學文學科研究室にて、

小泉孝三

明治元年（一八六八）

孟春（慶應）

歎涕和歌集

三

宮地維宣

初夏

殉難前草  
殉難後草

六月

城 兼文  
城 兼文

文 正文堂  
文 正文堂

四英 獄窓唱和集

二

七月

隱玖菟岐集

十二月

東籬園主人

（明治）

蓮月 式部 二女和歌集

月不詳

小田垣蓮月  
高島式部

金 屏堂

南山踏雲錄

二

伴林光平

とかのおちば

二

山田嘉猷

山田永年

三・二八

六月にかけて中外新聞及同外篇に幕府方の

人々の詠歌掲載せらる。

四・二 入江爲守京都今出川に生る。

四・二三 山縣有朋會津征討越後國總督參謀となる。

七・二九 大隈元道歿（七一） 大隈言道家集

八・一八 伊藤左千夫生る。

八・二三 野矢常方成辰の役に戦死（六七）

八・二八 井手曙覽歿（五七）

一一・二二 井上文雄 大神御牧 諷歌新開の時事歌により筆禍をうけて傳馬町に入牢。二十四日田安家に預けられ十二月四日許さる。

一一・二〇 草野御牧歿

一一・一九 大石千秋歿（五八）

月日不詳 金子元臣東京に生る。

同 川喜多眞彦歿（五一）

同

萬葉集に關する未刊本

刪定萬葉集五 （八・二・自跋）

校正萬葉集通解二〇 （一八・成）

萬葉名歌集 （二二・成）

萬葉東語集 （二四・八・自序）

萬葉集類纂二

萬葉集作者部類

萬華集學捷徑

萬葉集長歌略解

松岡 調

中島 友文

草鹿 祇宣隆

高須 葛根

速水 行道

速水 行道

中村 良顯

鈴木 庸正

明治二年(二八六九)

初春

興風集  
殉難拾遺

久坂通武  
馬場文英

松下村塾

一月

にほのうきす  
縁濱詠草

高田のおしね  
うすかすみ

振氣篇 三

二月

六戸直激  
福原元佃  
國司親相  
加茂經春

抄宗寮  
抄宗寮  
抄宗寮

四月

殉難遺草

六月

城兼文

文正堂

殉難續草

権能故夜提

晚秋

城兼文  
橋冬照

文正堂

興風後集

初冬

近世  
殉國一人一首傳 四

城兼文

城氏活版

桂蔭 二

十二月

渡忠秋

楊園社

月不詳

平野國臣歌集

有節錄

雄魂雜書

比賣島日記初篇

老のくりこと

平野國臣

城兼文

野村望東尼  
井上文雄

浪華柏屋  
文正堂  
松下村塾  
村上平樂寺

一・三 據井雨江但馬豊岡町に生る。

一・二〇 大町桂月(芳菊)高知市に生る。

二・二一 林良本歿(七六) 歳々百首、蚯蚓集、五十六番

歌結、十五番歌結

五・二八 河邊一也歿(六八) 葎園和歌集

八・二六 石樽千亦愛媛縣橋村に生る。

一一・八 歌道御用侍從候所に於て取扱はる。三條西季知

歌道御用有之時參朝可致旨被仰付。

一一・二九 正田千益(景樹門)歿(七七)

月日不詳 草鹿砥宜隆歿(五二)

明治三年（一八七〇）

初夏

海人の刈藻

小田垣蓮月

辻本仁兵衛

月不詳

沖繩集

宜野灣朝保

禪師一休骸骨草紙伊呂波歌

忍 阿

一・ 歌御會始。御題春來日暖。題者三條西季知。

三・一七 保田光則歿（七四）

一〇・二四 室谷賀親歿（四五） 麻懷詠草

一一・ 鳥（出雲）重老（通稱彈正）歿（七八） 櫛舍集

明治四年（一八七二）

二月

類題新竹集 三

猿渡容盛

玉巖堂

月不詳

神妙集

龜井茲堅

龜井家

のものとましば

小山敬容

野呂直貞

讀史餘感

近藤幸殖

有為堂

夕日岡月次集

伊達千廣

本居頭書古道百首解

岡本通理

一・ 御歌會始。御題貴賤迎春。題者三條西季知。

一・二〇 宮内省に歌道御用掛を設けらる。福羽美靜歌道御用掛被仰付。

一・二二 古川松根歿（五九）×嵯峨の菜

二・一 村田春野歿（七一）

四・二一 鈴木雅之歿（三五） 百體百首、花實百首、歌學正言

七・七 大館晴勝歿（四八）

八・一七 大國（野之口）隆正歿（八〇） 花なきはな、歌日記

一一・一八 井上文雄歿（七二）

月日不詳 毛利敬親歿（五三） 毛利敬親遺草、露山集



明治五年(一八七二)

三月

新内裏御障子色紙和歌

源 延平

月不詳

なるをの松

岡本保孝

雅語譯解拾遺

村上忠順

三輪清七

一・ 歌御會始。御題風光日々新。題者三條西季知。

一・ 三 間宮永好歿(六八)×松屋歌集、×松蔭集

二・二〇 奥村貞信尼歿(七五)

二・一八 淺見貞忠歿

三・ 内海月杖(弘藏)相摸大山町に生る。

五・一一 三浦守治警城三春在に生る。

六・三 佐々木信綱伊勢鈴鹿石薬寺村に生る。

六・二八 伊庭秀賢歿(七三)

八・三 門脇重綾歿(四七)

九・一八 於吹上御苑御歌會。聖上皇后宮臨御二品熾仁親王以下二十二人陪席。

一〇・二三 八田知紀歌道御用掛被命。

一一・ 武島羽衣東京日本橋に生る。

月日不詳 千家尊孫歿(八〇)

明治六年(一八七三)

三月

横文字百人一首

黒川眞頼

文淵堂

八月

一窓集草稿初篇

平 千胤

揚 園

童戯百人一首

總生 寛

梶屋喜兵衛

月不詳

讀史有感集

渡 忠秋

萬廼家集 三

林 保綱

梅園歌集

吉山直内

佐渡名所歌集

藏田茂樹

磯部最信

百異拾解

相川景見

登山學舍

歌題歲時表

福羽美靜

一・ 御歌會始。御題新年祝道。題者三條西季知。點者福羽美靜

二・二六 與謝野寛京都岡崎に生る。

四・ 今尾清香歿(六九) 賤緒環歌集

八・二四 鬼島(富樫)廣蔭歿(八一)

九・二 八田知紀歿(七五) 祭棗料一萬疋下賜。

九・ 堀内新泉京都に生る。

一〇・一八 橋糸重東京に生る。

月日不詳 鳥野幸次越前丸岡町に生る。

同 湯本武彦歿(二八) 湯本武彦詠草

歌合に関する寫本

千浪判苜蓿歌合 (五・五・六)

うたのさうし (七・二)

翠園催八十番歌合 (一〇・一〇)

後の十番歌結

正風判二十四番歌合 (一三・一〇・二三)

冬道判六十四番歌合 (一四・七・一)

樂判十二番歌結 (一五)

直香判九十番歌合

酒十三番歌合 (一六・五)

冬道判十五番歌結 (一九・五)

冬道判九十七番歌結 (一九・一〇・二九)

冬道判三十四番歌合 (二〇・六・一四)

正風判二十五番歌結 (二三)

梶岡大人判十四番歌結(二五・一〇)

服部邦照白歌合 (二六・八)

判者 加藤 千浪

同 日尾 直子

同 本居 豊穎

同 小中村清矩

判者 高崎 正風

同 間島 冬道

同 小出 榮

同 橋木 直香

同 長瀬 幸室

同 間島 冬道

同 間島 冬道

同 間島 冬道

同 高崎 正風

同 小出 榮

同 本居 豊穎

明治七年(一八七四)

五月

元治元年千首

村上忠順

深見藤十

六月

類題月波集 二

近藤芳樹

聚珍堂

九月

義烈回天百首

染崎延房

金拙堂

月不詳

名教百首

堀 秀成

甘泉堂

明教百首

久保季茲

神代百首

角田忠行

新田百首詠和歌

大島伴作

道の莠

物集 高見

一・一 香取秀真下總印旛沼のほざりに生る。

一・二 御歌會始。御題迎年言志。題者點者三條西季知。

一・二二 宮内省布達あり。左の如し。

毎年一月御歌會始の節官員華士族平民之無差別詠進之向採録之上觀覽に相供候儀に付勝手次第詠進

明治八年（一八七五）

一・一四 松平忠敏御掛被命。

四・五 渡忠秋宮内省雇歌道御用掛被命。

五・七 河井醉若大阪府堺市に生る。

六・二 吉岡信之歿（六一）四七？

六・七 青山霞村京都深草霞谷に生る。

一・三 天長節 御題天晴有鶴聲。掛員一同詠進。（註 天長節の詠進は此年を以て始す）

一・二七 鹿島鶴翁歿（八九）

一・二七 達 都鄙迎年 右來明治八年一月十八日御歌會始御題に候條此旨布達候事但一月十五日迄に詠進可致尤

遺隔の向は一月中差出不苦候事

一・二七 每年一月御歌會始の節官員華士族平民僧侶平民之無差別詠進之向者採録之上 觀覽に相供候 各管轄廳へ可差出旨本年一月中可及布達置候處向後各管轄廳を經るに不及直に當省へ可差出候旨更に布達候事但書式は隨意たるべし尤も官員は官氏名華士族及有位は本貫位階氏名僧侶平民は管轄郡村町寺號氏名詳細可相認且郵便を以て差出候節は宮内省宛可相認事

久保猪之吉福島縣二本松町に生る。

一・二六 中山宮子（景恒門）歿（三七） 浮木のかめ

月日不詳 大塚楠緒子東京麴町に生る。

二月

防長正氣集（續風簷遺草）四 天野御民

十一月

富士入百人一首 陶山直良

月不詳

近報國百人一首 轉々堂藍泉

隨緣集 伊達千廣

一・一八 歌御會始。御題都鄙迎年。題者中山忠能、点者福羽美靜。

三・一四 稅所敦子宮内省に入る。

三・二八 服部躬治福島縣須賀川町に生る。

四・一六 森爲泰歿（六五） 千竹園集

五・一〇 近藤芳樹歌道御用掛被命。

五・一一 下村海南（宏）和歌山市に生る。

八・一八 皇學御用掛を被設。近藤芳樹皇學御用掛被仰付。

一・二一〇 大田垣速月歿（八五）

一・二一七 太烟春國歿（五八）

月日不詳 辻辰之助歿（五七） 辻辰之助家集

明治九年（一八七六）

一月

明治歌集 七

橘 東世子

橘 氏

六月

樟齋集

飯田秀雄

飯田年平

九月

埋木廼花 二

高崎正風

宮内省

月不詳

冢の緒

梅辻春樵

金花堂

近世暴徒遺草

鈴木 幸

萬卷樓

今世義魂集 二

竹内莊三郎

萬笈堂

月舍集

横山由清

なりのその花

村山松根

宮内省

葦月歌集

一・一八 歌御會始。御題新年望山。題者點者三條西季知。點者福羽美靜 近藤芳樹。

三・二〇 植松茂岳歿（八三）八四？

四・二五 侍從番長高崎正風御歌掛兼務被仰付。

五・九 渡忠秋歌書進講被仰付（但三の日進講の事）

六・二〇 龍代繁里歿（四八） 清渚集、常磐集、繁里家集

八・五 力石重遠歌道御用掛被命。

八・二〇 藤真千葉縣陸阿村に生る。

八・二〇 尾上柴舟（八郎）岡山縣津山市に生る。

九・ 安部眞貞御歌掛被命。

九・ 幽眞歿（六五）

一〇・一〇 平塚義平（海上胤平門）千葉に生る。

一〇・二一 歌道御用掛皇學御用掛自今文學御用掛と相稱候事

三條西季知 高崎正風 渡忠秋 力石重遠 松平忠敏 自今文學御用掛と相稱候事

一一・三〇 金子蕨園（雄太郎）東京神田に生る。

一二・七 萬葉集注解意見建白三條西季知 高崎正風兩人より宮内卿へ出す。

一二・九 太田水穂（貞一）長野縣新田村に生る。

一二・一六 島木赤彦（塚原俊彦）長野縣上諏訪町に生る。

一二・一九 後花園天皇より孝明天皇に至るまでの公宴續歌編集可致旨徳大寺宮内卿より被達之

一二・二六 文學御用掛右萬葉集註疏編纂被仰付右三條西季知堤

權大取より書付被渡 萬葉集註疏編纂福羽美靜 近

藤芳樹 渡忠秋 公宴續歌編纂三條西季知 高崎正風

宜灣朝保（知紀門）歿（五四）

同日不詳 池田慶徳歿（四三） 竹廼合家集、しのぶぐさ

明治十年（一八七七）

明治三十六歌撰 現在	六月	山田謙益	豊島有常
明治歌集第二編	八月	橋東世子	金花堂佐助
葎屋集	九月	物集高世	雁金屋
類題石川歌集	十月	高橋富枝	中村喜平
朝 <small>皇</small> 近世詩文歌集	十一月	高橋鎌三郎	松林堂
新選名家歌集	十二月	根岸千引	江島喜兵衛
月不詳			
江月齋遺稿	二	久坂玄瑞	久坂道明
明治花月集		下澤保躬	

明治文雅姓名錄

清水信夫 東花堂

- 一・一二 歌御會始。御題松不改色。題者點者三條西季知、點者福羽美靜、近藤芳樹。召歌稅所教子 飯田年平
- 伊達千廣
- 二・二〇 加部巖夫文學御用掛被命。
- 三・三 岡麓（三郎）東京本郷湯島に生る。
- 三・ 穎才新誌（東京製紙分社）創刊 投書雜誌の濫觴にて永續。
- 五・一八 伊達千廣歿（七五）×餘身歸
- 六・八 窪田空穂（通治）長野縣和田村に生る。
- 六・二六 田代清秋歿（五八）
- 七・一 伊能穎則歿（七三）夏衣集
- 八・三〇 自今侍講局を被置文學御用掛を侍講局へ被付旨達有
- 一〇・一 沼波武夫名古屋市に生る。
- 一〇・一 梅本敏鎌歿（三九）
- 一〇・三 中根雪江歿（七一）
- 一〇・六 渡忠秋被免出仕更に宮内省御用掛被仰付。
- 一〇・二三 樋口眞彦宮内省侍講付被命文學御用掛被仰付。
- 一〇・ 印東（舊姓佐々木）昌綱伊勢石薬師に生る。
- 一一・一四 宇都野研愛知縣本宿村に生る。
- 一一・一八 加藤千浪歿（五八）五九？ 千浪自筆詠草
- 一一・一八 横井守城歿（七六）
- 一二・五 脇坂安斐小出榮文學御用掛被仰付。
- 一二・二八 平福百穂（貞藏）秋田縣角館町に生る。

明治十一年（一八七八）

一月	毛利千秋 大平相治	飯山綱之助
二月	同風歌集一編 三	
三月	歌るかや集 三 水穂舎詠草	松波資之 眞鍋豊平
五月	明治詩文歌集 瀧のしぶき 二	出雲路万次郎 岡村 邁 黒田清綱
七月	みやこの錦	同鹽書樓 金華堂
八月	志濃夫廼舎歌集 四	拜郷蓮茵
九月	感詠一貫 石竹集（歌の部）	井手今滋 稲田佐兵衛 佐藤元長 冷泉古風
		醉菊書屋 村上勘兵衛

正信偈句和歌

十一月

超 然

開化新題歌集

明治百人一首

大久保忠保  
岡田霞船

金花堂

月不詳

寶薰集

類題石川歌集

明治花月歌集

蝶園集

古許呂能志遠理

老のすさび

近藤芳樹

高橋富兄

下澤保躬

門脇重脇

野々口正武

眞鍋豊平

一・七 御講書始近藤芳樹古事記進講被仰付。

一・一八 御歌會始。御題鷲入新年語。題者三條西季知、點者  
福羽美靜 高崎正風 近藤芳樹。 召歌稅所教子

飯田年平 村山松根 渡忠秋

二・一〇 片山廣子東京麻布に生る。

四・五 岡本保孝歿（八二） またるる聲、

同日 文亭綾繼歿。

七・九 近藤芳樹 加部巖夫 東海御幸供奉被仰付。

八・二一 千家尊澄歿（七九） 和歌の浦鶴

明治十二年（一八七九）

- 一・五 中山忠能 近衛忠熙 嵯峨實愛御歌會取調中當分文  
學御用掛被仰付
- 一・六 御歌會詠進の歌自今屬籍尊卑を不論秀逸撰擇之分披  
講に可加旨布達せらる（註 高崎正風の進言による）
- 一・七 鳳晶（昌）子大阪堺市甲斐町に生る。
- 一・一〇 力石重遠萬葉古義上木被仰出に付校正掛被命。
- 一・一二 高崎正風 鍋島直彬文學御用掛被仰付。
- 一・一七 御歌會始の節自今撰擇の分披講被仰出に付召歌被廢  
（右に付 村山松根 飯田年平 泷忠秋 税所教子へ  
相達す）
- 月日不詳 志賀巽軒歿（四九） 巽軒歌集

叢書目録 一

維新史料

- 長州三太夫傳（傳記第二）
- 小河一敏傳（傳記第三）
- 柿日記（日記第一）
- 伴林光平籠中日記（日記第二）
- 歩路日記（同）
- 西航日記（日記第三）
- 南遊遺閑集（同）
- 庚申轉蓬日録（同）
- 萬延轉蓬日録（同）
- 文久轉蓬日録（同）

小河 忠夫  
有馬 新七  
榎路 和種  
菊池 楨子  
東久世通禧  
關 鐵之助  
同  
同  
同

果園雜詠百首	一月	佐久間種次郎	佐久間舜一郎
箱根草 五	二月	福住 九藏	聚星館
手引草百首	三月	小河一敏	小林二郎
類題和歌聯玉集 二	四月	毛利千秋	山本彦兵衛
僧良寛歌集		村上半牧	飯山綱之助
聲香集		河瀬徳兵衛	金花堂佐助
同風歌集二編	十一月	毛利千秋	村上眞助
明治歌集第三集 三		橋 東世子	
明治英名百詠撰	十二月	笠亭仙果	

珍々室集 二  
歌學裁拾衣 八  
大熊辨玉  
上田及淵  
藤波 恒雄  
前川善兵衛

月不詳

雅言解 四  
鈴木重嶺  
加藤公阿  
稻田佐兵衛

餘力詠歌集(明治新題)  
加藤公阿  
松並 正名

猴冠集第一集

一・七 御講書始、近藤芳樹日本紀進講。

一・一三 文學御用掛分課を定む。詩文掛三條西季知 高崎正風 鍋島直彬 力石重遠 小出榮、言語部類編纂掛

近藤芳樹、脇坂安斐、加部巖夫、敷原尙樹、萬葉集

註疎掛近藤芳樹 松平忠敏 安部眞貞

一・一七 福羽美靜文學御用掛被付。

一・一八 御歌會始。御題新年祝言。題者點者三條西季知、點者近藤芳樹。金子有卿 加部巖夫 小出榮預選に入る。

三・三 久我建通文學御用掛被付。  
三・五 岡本定清依願侍講付被免。  
三・七 渥美正幹侍付被命。

四・三 長塚節茨城縣岡田村に生る。  
四・一六 齋藤瀧長野縣七貴村に生る。

四・一七 兒玉源之允文學御用掛被命。  
六・一一 三條西季知文學御用掛依願被免。

六・ 上田及淵歿(六一)

七・一六 池原香禪文學御用掛被命、同二十二日言語部類編述被仰付。

七・二六 山川登美子若狹國小濱町に生る。

七・二七 赤木格堂鹿兒島に生る。

九・一五 近衛忠照 久我建通 嵯峨實愛 脇坂安斐 松平忠敏へ御代御代御製取調被仰付。

九・一六 萬葉集註疎編纂中止。

九・一八 仙石政固文學御用掛被命。

一〇・七 近藤芳樹御用掛被免。

一〇・一三 樋口眞彦侍講付被命。

一〇・二〇 清宮秀堅歿(七一) 總適含歌集

一〇・二二 加部巖夫 安部眞貞 力石重遠 小出榮 佐藤誠

山田安榮 會田安昌文學御用掛被命 同二十三日久野宗照同上

一二・二 横山由清歿(五四) 横山由清詠草

一二・一三 谷勤文學御用掛被命萬葉古義校正被命。

叢書目錄 二

日本歌學全書 第一編

古今集  
貫之集  
躬恒集  
友則集  
忠岑集  
初貫之  
躬恒  
友則  
紀貫之  
凡河内躬恒  
紀友則  
壬生 忠岑



明治十三年（一八八〇）

一月

猴冠集第二集

藤岡惠美

二月

現英名百首  
篠並集二

沼尻銚一郎  
服部春樹

寶文閣  
澤宗次郎

四月

增補冠辭例

松山貞主

成井貞央

五月

類題明治新和歌集  
類題明治歌集二  
新風雅之友三

猿渡樅園  
朝比奈泰吉  
法木徳兵衛

萬笈閣  
巖々堂

六月

千草の花六

高崎正風

宮内省

七月

明治開化和歌集二

佐々木弘綱

山中市兵衛

九月

名門名歌集四

天野御民

十月

白嶺百吟

布川正沖

十一月

開化新題歌集二篇  
藤廻舍集

大久保忠保  
加藤祐一

月不詳

和歌類題川隈集

西原晁樹

明治歌集第四編四

橘東世子

足代弘訓翁家集

山田常典

漫吟百集

森有恕

明治百人一首

名倉重三郎

民間大全明治新百人一首

小笠原美治

英雄百人一首

綠亭川柳

八頭山集

井上氏廣

秋田歌集(歎冬集)

江幡澹園

勢海集

岡吉胤

松琴詠草

本多銳子

金花堂佐助

金花堂

岡崎左喜介

ならのくちば 奈良原時子  
 かはらぬかけ 岩倉具視  
 歌道 神風の伊勢の海 村山守雄  
 本義

一・一二 葉若清定文學御用掛被命。  
 一・一八 御歌會始。御題庭上鶴訓。題者點者三條西季知、點者高崎正風。

- 二・二九 近藤芳樹歿(八〇) 薰風集
- 二・ 海上龍子福島縣鎌田村に生る。
- 三・二三 賀茂(岡本)經春歿(六一) 秩父根集
- 四・二五 大熊辨玉寂(六三)
- 五・六 増田(茅野)雅子大阪市に生る。
- 六・一四 廣瀬純治文學御用掛被命。
- 八・二四 三條西季知歿(六九)
- 九・三〇 森山汀川長野縣落合村に生る。
- 一一・二七 西尾爲忠文學御用掛被命。

叢書目錄 三

日本歌學全書 第二編

後撰集  
 元輔集  
 能宣集  
 順集  
 内裏歌合

建禮親王時文  
 能宣元輔  
 清原元輔  
 大中臣能宣  
 源順  
 小野宮實賴

明治十四年(二八八一)

一月	有賀長伯	野村秀太郎
二月	渡忠秋	細辻昌雄
三月	松波資之	松浦辰男
四月	岡田伴治	二階堂北漢
五月	清水完和	柳原喜兵衛
	伊達千廣	柳原喜兵衛
	彈舜平	錦松堂
	安井乙熊	
	村山松根	山本彦兵衛
	忘貝二	

六月

明治列婦傳

松村春輔

文永堂

九月

開化新題和歌碑

佐々木弘綱

文言堂

十一月

月合集

横山山清

横山謙吉

櫻蔭集 二

熊代繁里

村上忠順

十二月

松の友

鈴木義準

伊藤小文司

近世名婦百人一首

岡田良策

聚榮堂

類題採花集 二

物集高世

北尾新聞鋪

月不詳

鳴世餘音

瀬戸愛次郎

柳園詠草 四

石川依平

法服歌讚

慈雲

月瀬梅風集

佐々木弘綱

錦山百首

姉崎正治

貞操古今名婦百首

兒島永成

明倫百首

福羽美靜

近世名譽百人一首

谷莊太郎

和歌俳諧語碎金 二

羽山尙德

雅言略解 二

白井憲成

一・二八 御歌會始。御題竹有佳色。題者點者高崎正風、點者福羽美靜。葉若清定 稅所教子 平民伴たま子預選に入る。

一・二五 石原純東京本郷に生る。

一・ 武山英子東京に生る。

二・二一 紀元節 御題寄國祝（註 紀元節の詠進は此年を以て始めます）

三・ 三 佐瀬蘭舟千葉縣大平村に生る。

四・ 正富汪洋岡山縣本庄村に生る。

五・二八 高畑式部歿（九七）

六・ 五 渡忠秋歿（七一） 楊園詠藻、×かつらの響

一〇・ 神戸大汀歿（五六）

一一・二一 若江薰子歿（四七）

一二・二二 川田剛 山領利貞文學御用掛被仰付。

一二・四 榑原芳野歿（五〇） 源淑野集

一二・八 久我建通 千種有任文學御用掛被命。

月日不詳 田中如迪歿 田中如迪詠草

明治十五年（一八八二）

二月

あさきぬ

小出 榮

吉川半七

三月

南山遺草  
名譽百人一首

大草公彌  
谷 壯太郎

近藤活版所

四月

現今百人一首

大島綱吉

五月

類題芳風集 二  
中興高名百首  
相陽名勝集

住谷明宣  
河村與一郎  
福住正兄

金花堂  
松本甚助  
寰翠樓

六月

千題明治歌集

大野 定子

駒井友三郎

七月

感詠一貫 二編

佐藤元長

醉菊書屋

九月

三判四季歌合 二

橋 道守

十一月

釋教玉材和歌集

釋 辨惠

月不詳

明治歌集第五編 三

橋 東世子

繪島廻浪 二

村山松根

苦のしづく

肥田景正

勅題歌集

大塚直彦

くちば集

岩崎利記

通追集

吉川經健

傘松道詠集 二

笠間龍跳

愛國演說家百詠選 二

谷 莊太郎

校主自筆百人一首

渡邊 益

一・四 村山松根歿（六一） 瀟島の波

一・二四 外山且正越後に生る。

一・二五 川田順東京下谷に生る。

一・二八 御歌會始。御題河水久澄。題者点者高崎正風、點者  
福羽美靜。千種有任 砂川雄健預選に入る。

明治十六年(二八八三)

- 一・三〇 高鹽青山栃木縣喜連川町に生る。
- 一 安江不空山城に生る。
- 二・三 神山魚貫歿(九六)
- 二・四 中村守手歿(六三)
- 三・一 花田比露思福岡縣安川村に生る。
- 三・三〇 氏家信仙臺市に生る。
- 四・六 和田山蘭青森縣松島村に生る。
- 四・六 松平忠敏歿。
- 四・二六 西尾爲忠、七月三日日本多阿伎良、八月十二日植松有園、十一月六日師岡正胤等文學御用掛被命。
- 六・五 葉若清定歿。
- 七・二七 齋藤茂吉(舊姓守谷)山形縣堀田村に生る。
- 八・二一 加藤東籬青森縣松島村に生る。
- 一〇・一三 桶東世子歿(七七)
- 一〇・二五 平田鐵胤歿(八二)
- 一一・六 植松有園歿。
- 一一・一五 千種有任文學御用掛被命。
- 月日不詳 小谷古蔭(諸平門)歿 六杉園集

一月

相陽名勝集 第二集

福住正兄

袁翠樓

三月

和歌梯雜部 三

宮崎玉緒

柳原喜兵衛

六月

杉のわか葉 第一輯

大國魂神社

七月

萬葉集倭文機 四

船曳鐵門

菊竹儀平

萬葉山常百首解

久保季茲

平田胤雄

熊毛集

上妻宗武

若林茂助

九月

和歌梯 二

蘭園

辻本九兵衛

十月

秋の初風

釋湛澄

小林大空

類題鏡池集  
東京大家十四家集

下田吉蔭  
平井言滿

群玉堂  
若菜園

月不詳

月もるかげ 六

都々古神社

葵の舎集

小原燕子

薑菜舌遺稿

江里川千照

梅園餘香

白株多助

歡露集

大村純飄

彰功帖

丹羽少尉

新撰百人一首

西村茂樹

明治名婦百首

千家尊福

博文館

四大人贈位祝祭歌集

松村操

曲亭遺稿

馬琴和歌

文盛堂

開化教訓道戲百人一首

一・二 物集高世茂 葎屋歌集

一・二八 御歌會始。御題四海清。題者點者高崎正風、點者福羽美靜。丸岡堯爾 小出榮 香川景敏預選に入る。

三・一三 平山季吉文學御用掛被命

三・二六 西村眞琴生る。

三・ 高村光太郎東京下谷に生る。

三・ 茅野蕭々(儀太郎)長野縣上諏訪に生る。

四・九 水野葉舟東京下谷に生る。

四・二〇 今中楓溪大阪府英田村に生る

六・二七 島山如心齋歿

七・一〇 相馬御風(昌治)新潟縣糸魚川町に生る。

七・二〇 岩倉具視薨(五九)

七・二七 前田夕暮(洋造)相州大根村に生る。

七・三〇 中島哀浪佐賀縣泉村に生る。

一〇・九 新井洗東京日本橋に生る。

一〇・一六 三井甲之山梨縣松島村に生る。

一〇・二八 千種有任、十二月二十六日木村滋雄文學御用掛被命

一一・二 熊谷武雄宮城縣新見村に生る。

月日不詳 鈴木新歿 鈴木新歌集

叢書目錄 四

日本歌學全書 第三編

拾遺集

公任卿集

紫式部集

清少納言集

日本歌學全書 第四編

後拾遺集

相摸集

經信卿母集

高陽院歌合

藤原 公任

藤原 公任

紫式部

清少 納言

藤原 通俊

相摸 摸

經信卿 母

藤原經信判

明治十七年（一八八四）

一月

開花新題歌集三篇

大久保忠保

金花堂

二月

明治志士心血集 二

和歌入門

三田葆光

四月

井上文雄翁家集 三

釋竹集

春月集

御代のはな 三

石園集 二

伊能穎則翁追遠歌集

五月

和布留の山婦美 四

九月

曙廼舎主人

隨時書房

標註古今和歌集 二

十月

明治十七年御會始歌集

鄙佐遍豆理 二

十一月

東京十四家集評論

十二月

松屋歌集 二

當仁迺遠求科 春夏ノ部

月不詳

蜻蛉集

明治歌集第六編 三

春月集

松のしたつゆ

うつせ貝

詩歌句集

名譽百首

高賀茂集 三

一八

内藤萬春

内藤活版所

大塚眞彦  
橋本信行  
和泉圓

金花堂  
博聞社

海上胤平

晚成堂

問宮永好  
問宮資明  
寶田通文

柳河梅次郎  
川邊御精

西園寺公望  
デユワツゴオチエ

橘道守

椎本吟社

毛利元徳

勝安房

小山多乎理

林立守

細島市五郎

土佐神社

紫灘遺稿 二

千代のさきくさ

献詠集

手向草

眞木保臣

飯田守年

水谷川忠起

榑田利貞

一・一八 御歌會始。御題晴天鶴。題者點者福羽美禱。點者高

崎正風。柳原愛子 小出榮預選に入る。

二・一七 久保よりえ伊豫松山市に生る。

四・三 吉植庄亮千葉縣印旛沼のほとりに生る。

五・一四 宗不早熊本縣來民町に生る。

六・二一 平山季雄文學御用掛被免。

七・五 伊藤祐命、九月八日植松有經、十月九日西村茂樹

十月十五日宮崎駿兒 十一月二十日坂田傳藏文學御用掛被命

七・一四 池原香釋殘(五五)

八・八 猿渡容盛殘(七四)

一〇・一 川崎社外長野縣和田村に生る。

一〇・六 西出朝風石川縣大聖寺町に生る。

一一・二三 村上忠順殘(七一)×類題玉藻歌集、×嵯峨野歌集、

類題菅藻集

月日不詳 龜井茲龜殘(六二) いそしのや歌集 歌よみ五十首

同 歌 慨世詠草

同 羽鳥春蔭殘(六八)

猿渡容盛殘(七四)

明治十八年(一八八五)

一月

明治類題桑乃若葉 二  
新撰類題桑乃若葉 二  
筑波嶺集

拜郷蓮茵  
色川御蔭

福井正寶堂  
色川誠一

歌樂論

歌樂論

歌樂論

歌樂論(完)

二月

調道大意

平田篤胤

平田胤雄

四月

明治續三十六歌仙  
現存續三十六歌仙

豊島有常

雪吹之屋

前賢故實百首

谷 俊三

七月

歌之語解

中島芳雄

成立舎

短歌撰格

橘 守部

淺倉屋久兵衛

十二月



東京十四家集評論辨

報國詠史歌集

月不詳

類題新英集初編 二

類題芳風集 二

柿園詠草拾遺

絲舍集

稻爾能弘群佐 二

都氣能雄久志

美代の花

中西爲子歌集 二

麗居詠草

みかほのたまも

さかきにつゆ

此花の葉

三山の葉

和歌王言使かみつかひ

一・八

一・二九

依田秋圃東京深川に生る。  
御歌會始。御題雪中早梅。題者點者高崎正風。點者  
福羽美靜。毛利元徳。千家尊福。吉田諷訪子(一一)

鈴木弘恭

原田直茂

吉川半七

原田千代造

井上淑蔭

住谷明宣

加納諸平

鬼澤大海

寶田通純

松平直平

幻々子

彈々舜平

南郷柳子

大脇春嶺

村上忠順

羽田野敬一

近藤清石

瀨見靜人

松川帯川

大八洲學會

二〇

歲) 預選に入る。

一・二五 北原白秋(隆吉)筑後國沖端村に生る。

二・二八 白井大翼下總浦賀村に生る。

二・ 硯友社の我樂多文庫創刊。

三・一八 興風會發會式あり、高崎正風等の發起によるもの。  
以下數年間毎月例會を開く。

四・ 四 鎌田正夫、八月二十八日小栗栖香頂、九月二十二日

物集高見文學御用掛被命。

四・二一 四賀光子(舊姓有賀)長野市に生る。

六・ 八 土岐善麿東京淺草に生る。

八・二四 若山牧水(繁)宮城縣東郷村坪谷に生る。

一〇・一五 柳原樺子東京麻布に生る。

月日不詳 平野萬里埼玉縣遊馬村に生る。

叢書目錄 五

日本歌學全書 第五編

金華集

詞花集

堀河百首

日本歌學全書 第六編

千載集

永久百首

忠度集  
後京極自歌合

源 俊頼

藤原 顯輔

公實匡房等

藤原 俊成

顯仲仲實等

平 忠 度  
藤原俊成判

明治十九年（一八八六）

一月

越佐歌集 二

石丸忠胤

玄同舎

三月

開化道外百人一首  
新調

詠歌自在 二

詠史百首（千代の跡）

四月

弘法大師詠歌集

鯉のうろこ六輯

五月

岩倉贈太政大臣集

萬葉私抄 二

六月

和歌梯 四季の部 四

七月

幾久能志太播  
萩の花つた  
稻舎長歌集 二

小出 繁  
九藤みほ子  
日下田足穂

北村四郎兵衛  
生澤濟齊  
金花堂

石園歌話（一）

九月

道歌百首和解

飯田年平 八洲

森本惠觀  
信行社

石園歌話（續）

十一月

萬葉集の歌乃解

飯田年平 八洲

木村正辭 八洲

五

十二月

存採 歷代和歌勅選考 五

吉田令世

近藤圭造

歌道ノ沿革

月不詳

小中村義象 東學

一

類題新英集 第二編

現今自筆百人一首

露園長歌集

井上淑蔭  
勝野正滿  
村山守雄

蘭園主人  
風月堂

宮地祖宗  
水川社務所

岩倉具視  
橋本直香  
淺倉屋久兵衛

明治佳調

熱海調音歌集 二

山梨岡來歷歌詩集 一

大日本皇國風雅の友

吟五百人一首

紫玉百人一首

杉の落葉

常磐の花

合浦友千鳥集

はつゆき

壽筵吟藻

波々會葉

介壽集

平野 春躬

小島 泰堂

清水市郎右衛門

宇都宮壽經

平尾 旨義

永井 裁之

牧 孝太郎

毛利 仲聽

佐藤萬太郎

服部 磯子

股野 琢

耕 文 社

かなのくわい

一・一 木下利玄備中足守町に生る。

一・一八 歌御會始。御題綠竹年久。題者點者願羽美靜、點者高崎正風。水菫盤樟。谷勤預選に入る。

二・五 文學御用掛廢せられ侍從職に御歌掛を置かれ、參候寄人勤務の職を置かる。

辭令 三等出仕高崎正風任式部次官御歌掛長被仰付

文學御用掛伊藤祐命 同植松有經 同加部巖夫 同

谷勤 同鎌田正夫 同香川景敏任侍從屬御歌掛被命

文學御用掛川田四等出仕 西尾七等出仕 御用掛千

種有任 同脇坂安斐等非職被仰付。

御用掛佐藤誠 同山田安榮 同安部眞貞 同坂田傳

藏 同本多阿伎良 同物業高見等非職被命。

履敷原尙樹 同會田安昌 同星啓二等履被免

侍講付屬文學御用掛渥美正幹 同根本承等非職被命

宮内省出仕西村茂樹任宮中顧問官。

文學御用掛福羽美靜今般該掛被免。

石川啄木(一)岩手縣澁谷村に生る。

三・一 廣田樂東京本郷に生る。

三・五 久保季茲殘(五七) 萬葉山常百首解

四・ 服部嘉香東京本郷に生る。

五・一二 御衛立の畫讚高崎御歌掛長 伊藤祐命 植松有經

六・二六 飯田年平(六七)×石園歌話、×石園集、美濃尾張家

菴評

七・四 萬造寺齋鹿兒島に生る。

八・七 三ヶ島殿子埼玉縣三ヶ島村に生る。

八・一二 里見義政。

九・二六 古泉千桎(幾太郎)千葉縣吉尾村に生る。

一〇・八 吉井勇東京芝高輪に生る。

一一・七 小田觀螢岩手縣宇部村に生る。

一二・一九 間島冬道 黒川眞頼御歌掛寄人被仰付

一二・二一 井上淑蔭(八三)

一二・二七 内藤存守御歌掛勤務被命。

一二・二〇 橋田東聲高知縣中筋村に生る。

月日不詳 久保田不二子長野縣下諏訪村に生る。

明治二十年（一八八七）

一月	石園歌話(二)	飯田年平	八洲	七
三月	馬酔木の考 和歌ニハ韻アリヤナシヤノ疑 石園歌話(三) 小言	木村正辭 旗野餘太郎 飯田年平 萩野由之	八洲 八洲 八洲 東學	九 九 九 四
四月	和歌に宗教なし	大西 祝	六合	七六
五月	いなばの波	上田重女	式之舍	
	旗野氏の歌に讀ありやの間に答ふ 明治長歌集をつくらんの主意 石園歌話(四) 歌の事	青木幸躬 村山守雄 飯田年平 鈴木弘恭	八洲 八洲 八洲 女雜	一〇 一一 一一 六五

六月	名所栞 一一 一洗堂百首(明治新萬葉集)	村上忠順 三國幽眠	吉川半七	
七月	歌に韻ありやといふに	石河光燦	八洲	一一
	國學和歌改良論	小中村義象 萩野由之	吉川半七	
八月	歌の事 和歌稽古の仕方 萬葉集を讀む心得	鈴木弘恭 木村正辭 鈴木弘恭 鈴木弘恭	女雜 八洲 女雜 女雜	六六 一三 六七 六八
九月	萬葉集を讀む心得(續稿)	木村正辭	八洲	一四
十月	式紙短冊書方の事	美妙齋主人		
	古今和歌集講義	本居豐穎		

歌學新論

物集 高世 松成堂

古のはなは櫻花なること  
眞淵翁和歌評釋

飯島雪堂 知玉 六  
月岡迂人 知玉 六

月不詳

類題秋草集二篇 二

彈 琴緒

明治歌集第七編 三

橘 道守

播江集

笹目原佐

椎本吟社  
笹目智幹

いそこすなみ

藤井眞壽

鹽谷  
碑文明治新百人一首

塩谷道博

霜堤遺響 二

近藤清石

更老編

双松園主人

華胄頌言

佐々木古信

古計武壽岩

深澤治道

玉霞窓の小篠 五

中島廣足

一・一八 御歌會始。御題池水浪靜。題者點者高崎正風(註以下明治末年に及ぶ)下田歌子 小池道子 鶴久子預選に入る。

二・一一 釋空道(折口信夫)大阪府下木津村に生る。

三・三 山田龜夕岐阜縣多良村に生る。

三・本多俊民歿(六四)

三・宮本池臣歿(七六) 水舎言葉の塵

四・天田愚庵京都林丘寺に入りて剃髮。

四・福田行誠智恩院門主となる。

六・八 椎田直助歿(七九) 神歌歌譜、露道百首、長歌學村

八・九 川端(川畑)千枝神戸市に生る。

九・一〇 半田良平栃木縣大飼村に生る。

一〇・三 堀秀成歿(六七) 國名百首、武備百首、歌の姿の論

歌名考、芳野詠史、枕の塵、濱千鳥、萬葉類詩、紀

歌類語、花かたみ、伊勢の家苞辨、三集類辭、三代

集類言 九條武子京都に生る。

一〇・二四 香川景敏歿(二七)

一一・五 阪正臣御歌掛勅務被命。

月日不詳 白石千別歿 ×古今今様集

明治二十一年（一八八八）

一月

初枝折集

熊耳立哲

國學和歌改良論を評す

女雜 九二

和歌改良論ヲ讀ム

服部元彦 東學 二・三

歌道の衰を歎く

出雲小琴 筆花 一

二月

國學和歌改良不可論

武津八千穂 弘道會

校主自筆詩歌百家集

渡邊益 東京東崖堂

和歌のはなし

佐々木健 女雜 九八

三月

新躰詩

蘇峰生 國友 二・七

百人一首一夕話(其一)

鈴木弘恭 女雜 一〇〇

百人一首一夕話(其二)

鈴木弘恭 女雜 一〇一

歌の論

三上參次 東學 二・五

言文一致歌

林夔臣 東學 二・五

四月

百人一首一夕話(其三)

鈴木弘恭 女雜 一〇三

風教百首講説

千家尊福 大八洲學會

百人一首一夕話(其四)

鈴木弘恭 女雜 一〇四

百人一首一夕話(其五)

鈴木弘恭 女雜 一〇五

五月

伊素志の屋歌抄

龜井茲監 龜井玄明

淺瀬の波 二

池袋清風 河合卯之助

明治長歌集

村山守雄

北戲作百人一首

高崎龍太郎

百人一首一夕話(其六)

鈴木弘恭 女雜 一〇八

百人一首一夕話(其七)

鈴木弘恭 女雜 一〇九

百人一首一夕話(其八)

鈴木弘恭 女雜 一一〇

六月

百人一首一夕話(其九)

鈴木弘恭 女雜 一一二

詠歌論

佐々木信綱 女雜 一一三

百人一首一夕話(其十)

鈴木弘恭 女雜 一一四

詠歌論(二)

佐々木信綱 女雜 一一六

歌勸進する人に告ぐ

筆花 六

和歌概論

池袋清風 東京日日 二九

七月

女子穎才集

鈴木弘恭 中外堂

歌道の沿革

小中村清短 日本 一四

百人一首一夕話(其十二)

鈴木弘恭 女雑 一二七

百人一首一夕話(其十二)

鈴木弘恭 女雑 一一九

和歌概論(前號の續)

池袋清風 東京日日 六

和歌概論(前號の續)

池袋清風 東京日日 八

八月

萬葉集書目提要 二

木村正辭 檀齋藏版

邦光社歌集 三

詠歌論(三)

佐々木信綱 女雑 一一二

百人一首一夕話(其十三)

鈴木弘恭 女雑 一二三

新日本の詩人

徳富猪一郎 國友 三・二八

枕詞の説

辰巳小次郎 學 二

二六

和歌の略史

池袋清風 郵便報知 二二

和歌の略史

池袋清風 郵便報知 二四

和歌の略史

池袋清風 郵便報知 二五

和歌の略史

池袋清風 郵便報知 二六

和歌の略史(完)

池袋清風 郵便報知 二八

九月

稻葉良通三百年祭詩歌集

岡部 轍 吉川半七

百人一首一夕話(其十四)

鈴木弘恭 女雑 一二五

新日本詩人の評

井上運泰 國友 三・二九

我にはゆるせ敷島の道

記 者 國友 三・二九

和歌を論ず 一

森田 思軒 國友 三・三〇

辰巳氏の枕詞の説を読む

濱田健次郎 學 三

長歌改良論

佐々木弘綱 筆花 九

十月

大八洲歌集 二

本居 豊穎 大八洲學會

和歌を論ず

思軒 居士 國友 三・三一

百人一首一夕話(其十五)

鈴木弘恭 女雑 一三一

百人一首一夕話(其十六)

鈴木弘恭 女雑 一三二

十一月

殘香集 二

小倉百人一首畧解 二

香川景嗣  
深田正韶

香川景次郎  
三輪文次郎

千歳の幾久  
聲廻餘波

歌の朶

歌謡教育論

歌格分類抄

川田 剛  
鈴木重嶺  
佐々木信綱  
西村正三郎  
高須葛根

將來の和歌  
歌の詞のつかひ方二種  
將來の和歌(二)

記 者 女雜  
鈴木重嶺 八洲  
記 者 女雜

一三九

二九

一三六

十二月

手向の倭文織

内海政雄

魚住長胤

和歌は纖弱なりと云ふ説を評す  
詩人ハ國語ヲ以テ歌ハザルベカ  
ラズ(其一)

雲 峰子 女雜  
内田 遠湖 國友  
思軒居士 國友

一九〇

三・二五

三・二五

月不詳

本多俊民集

柳のおち葉

ちりひぢ

回顧集

美豆穂歌集

吉川元春三百年祭典雅藻

大島 爲足  
戸澤たね  
早川千代子

戸澤利作

天野 御民  
稻葉 雍通

下 連城

- 一・一八 御歌會始。御題雪埋松。福崎季連 三輪貞信女預選に入る。
- 三・九 冷泉爲紀御歌掛參候被仰付。
- 四・一八 岩谷莫哀生る。
- 四・二五 福田行誠寂(八三)
- 五・二八 若山(舊姓太田)喜志子長野縣東筑摩野に生る。
- 六・七 侍從職御歌掛廢せらる。宮内省に御歌所設けらる。御歌所の名稱はこの時に始る。高崎正風御歌所長 西四辻公業 堀河康隆 富小路敬直 松浦詮 冷泉爲紀 交野時萬 千種有任 綾小路有良 長谷信成參候。間 島冬道 黒川眞頼寄人。伊東祐命 植松有經 小田榮 谷勤 内藤存守 坂正臣 鎌田正夫御歌所勤務被命。
- 六・二二 中山忠能歿(八〇) 翠轡集
- 六・二一 原阿佐緒宮城縣床村に生る。
- 七・二五 松浦貞總生る。
- 八・二七 與謝野尙綱(禮巖)寂(七六)
- 九・ 中村栲花長野縣東條村に生る。
- 一・一八 御歌所を置かれ候に付ては題者點者別段命令なく高



崎所長相勸可然旨徳大寺侍従長より口達せられ已來  
右題點者不仰下

一一・一二

峰村國一長野縣富士山村に生る。

一二・二一

新井守村歿(八一) 菊百首、雪百首、梅百首、月百首、上野百首、鶯百首、雁百首、牧公百首、紅葉百首

一二・

餘輝道人歿(七九) 稚の舎集

月日不詳

香川不抱香川縣川西村に生る。

同

稻垣琴成(篤胤門)歿(八三) 歌のこまあげ

叢書目錄 六

日本歌學全書 第七編

新古今集

長明家集

自讃歌

日本歌學全書 第八編

林下集

頼政集

山家集

金槐集

日本歌學全書 第九編

日本歌學全書 第十編

日本歌學全書 第十一編

萬葉集

源具實 實家  
早隆 繼家  
鴨 長明  
類鳥羽 式子内  
親 玉 等

後徳大寺 實定

源 頼政

西行法師

源 實朝

撰者 不詳

明治二十二年(一八八九)

一月

詩人の國語ヲ以テ歌ハザルベカラズ(其二)

和歌を論ず

歌の記三つ

百人一首一夕話(其十七)

歌のひとつし

新年會漫言

新體詩批評 一

歌詞と俗言とは別なり

二月

千代田歌集

新體詩批評 二

福住正兄ぬしに答ふる文

三月

萬葉集美夫君志

内田遠湖 國友 四・三七

森田文藏 日論 二〇

末松謙澄 女雜 一四三

鈴木弘恭 女雜 一四三

月岡迂人 知玉 一九

福住正兄 知玉 一九

池袋清風 國友 四・三九

小田清雄 文 三・三

高橋五郎 國友 六・七二

池袋清風 國友 四・四二

佐々木信綱 讀實新聞 二二二

木村正辭 大八洲學會

仁德天皇御製の疑問  
歌學正言

伊藤松宇 知玉 二二  
鈴木雅之 日誌 二

四月

小倉の出口  
現今自筆百人一首

田所千秋 大八洲學會  
網野延平

新體詩批評 (完)

池袋清風 國友 四・四六

香川景樹ノ傳

井上通泰 國友 四・四六

歌學正言

鈴木雅之 日誌 三

池袋清風君に一言す

森 鷗外 讀賣新聞 七

五月

長歌改良論辨駁

海上胤平 玄同舎

相模名勝集

福住正兄 魚住長胤

歌謡論

佐藤定介 皇典 七

日本の歌人

高津蹊三郎 東學 三・五

越智東風氏に答ふ

井上通泰 日本 八七

六月

萬葉集書目

木村正辭

六月會雜誌

福住正兄 知玉 二四

長歌改良論辯駁

佐々木信綱 讀賣新聞 二七

七月

民の畑

小中村義象 明叢 八

柳樹の考

佐々木信綱 知玉 二五

仁德天皇高台の舊趾

梧堂生 知玉 二五

七月會漫言

福住正兄 知玉 二五

長歌改良論辯駁

佐々木弘綱 出版 二二

あながまし

皆無齋主人 讀賣新聞 一〇

八月

筆の花外集歌合

鈴木重嶺 花雨吟社

八月會雜誌

福住正兄 知玉 二六

とはすがたり

新保正與 新潟 五

九月

家集辨

村田春海 八洲 三九

竹柏園隨筆

佐々木弘綱

知玉

二七

柳樹の考(續)

佐々木信綱

知玉

二七

とはすかたり(二)

新保正與

新潟

六

見塩井川憶彌二郎北八作歌

巨智東風

讀賣新聞

一三

十月

いさり火

大和田建樹

中央堂

歌學新論序

物集高見

國光

一・三

長歌改良論をよみて

石丸忠胤

明叢

一一

小澤芦庵の傳

井上通泰

柵草

一

長歌改良論を讀みて

石丸忠胤

日文

一五

遊君の文藝

越智東風

讀賣新聞

二

十一月

池袋清風氏の歌

雲 峰子

女雜

一八六

昔時の批評

緑の舍主人

知玉

二九

和歌の纖弱なるは和歌の罪にあらず

其 川子

女雜

一八八

歌話二則

井上通泰

柵草

二

景樹傳補遺(附桂園巨擘傳第一)井上通泰

柵草

二

細川幽齋和歌の主義漫評(其一)

以良

三二

細川幽齋和歌の主義漫評(其二)

以良

三三

十二月

御垣の下車 二

稅所敦子

松井總兵衛

歌文要語解

佐々木弘綱

老の友がき

郷 純造

雅調論

福住正兄

日文

一七

短歌は六句の説

海石榴舍

柵草

三

請教放語

幸田露伴

柵草

三

和歌及新體詩を論ず

萩野由之

東學

三・一二

月不詳

神樂の舍五百首

伴林光平

香川景恒歌集

高橋古道

宜灣親方家集(松風集)

宜灣朝保

謹得久朝置

みたまのさち

池田次郎

可通能美佐遠

島崎利助

翠山公壽宴歌集

近衛忠熙

盛事千代田の春

鈴木重嶺

神 風 舍

東海拾玉

井上喜文

梅のかをり

高橋富兄

梅花盛久

平田盛胤

大八洲學會

わすれかたみ

薦藻集

手向草

艶情百人一首

釋教百首

近世歌人略草

高崎正風

川崎胤春

角田忠行

所 淑子

福田行誠

廣田常善

其中堂

一・一五 綱野延平歿(七一) 新撰百人一首

一・一八 御歌會始。御題水石契久。伊東祐命 谷勤 尾崎栄夫 預選に入る。

一・二五 中村靈吉廣島縣布野村に生る。

一・二六 年々詠進歌入の行李十五箇長櫃二棹文庫三個赤坂離宮侍從職土藏に移す。

二・一一 憲法發布。

三・一一 矢代東村千葉縣東村に生る。

四・七 菊池知勇岩手縣溢民村に生る。

五・二六 生田蝶介山口縣長府に生る。

六・二三 三木壽風兵庫縣龍野に生る。

七・五 金澤種美大阪に生る。

七・一〇 森園天涙(豊吉)鹿兒縣東郷村に生る。

七・ 橋本直香歿(八三) 旋頭歌解

八・二四 内藤鑑策新潟縣長岡市に生る。

一〇・一六 伊東祐命歿(五六)

一一・一 淺野梨郷名古屋市に生る。

一一・八 大口鯛二宮内省御歌所勤務被命

一・二・一五 尾山篤二郎金澤市に生る。

一・二・三一 松村英一東京芝愛宕下町に生る。

月日不詳 半井稻庵歿(七七)

同 澁谷國安歿(六五)

叢書目錄 七

日本歌學全書 第十二編

悦目抄

無名抄

にひまなび

新學異見

歌がたり

歌ぶくろ

調の直路

續日本歌學全書 第一編

自撰晚花集

自撰漫吟集

春葉集

賀茂翁家集

歌意考

にひまなび

十二番歌合

國歌八論

國歌八論評

國歌八論斥非

國歌八論餘言

國歌八論餘言拾遺

藤原 基俊

鴨 長明

賀茂 眞淵

香川 景樹

村田 春海

富士谷 御杖

八田 知紀

下河邊 長流

圓珠庵 契冲

荷田 春滿

賀茂 眞淵

賀茂 眞淵

賀茂 眞淵

賀茂 眞淵

賀茂 眞淵

荷田 在滿

本居 宣長

大萱 公圭

田安 宗武

賀茂 眞淵

明治二十三年（一八九〇）

一月

千代田歌集 第一編  
行誠老和上遺稿  
維新史料 二四  
佐々木弘綱  
梶 寶順  
富岡政信  
博文館  
能潤社  
野史台

雅調論

萬葉集通釋といふものゝ事  
歌よまんさちの心得にもさあり  
し事さも認め置きたる文

貧窮百首(一)

百千鳥(其一)

桂園高足傳 第二

二月

百千鳥(其二)

雅調論を駁す

雅調論を駁す

長歌改良論同辨駁及辨駁辨の評  
(二)

福住正兄 八洲 四三  
木村正辭 八洲 四三  
井上唯平 筆花 二五  
小川銀次郎 史會 二  
木下幸文 日華 二  
桃李園主人 日華 二  
井上通泰 柵草 四  
桃李園主人 日華 三  
佐々木弘綱 日華 三  
佐々木弘綱 八洲 四四  
村上正雄 筆花 三六

三二

和歌よみ方  
鎌倉日記(其三)  
和歌よみ方  
和歌ノ趣向ヲ論ズ  
中島廣足略傳  
鈴木弘恭 女雜 二〇〇  
佐々木信綱 日華 一・四  
鈴木弘恭 女雜 二〇一  
池袋清風 國友 六・七七  
足立正枝 柵草 五

三月

寄居文集 二  
經緯歌  
近藤芳樹 文玉圃  
鈴木重胤 大瀧直之助

貧窮百首(二)

雅調論の駁を駁す

駁雅調論を讀む

長歌改良論同辨駁及辨駁辨の評  
(二)

和歌の浦波

貧窮百首(三)

歌僧澄月傳

女子何ぞ和歌を學ばざる

歌の話

四月

中興高名百首

木下幸文 日華 一・五  
福住正兄 八洲 四・五  
田所千秋 八洲 四・五  
村上正雄 筆花 二七  
池袋清風 女雜 二〇四  
井上幸文 日華 一・六  
木下幸文 柵草 六  
雲 峯子 女雜 二〇六  
黒川眞頼 日雜 二  
河村與一郎 一酉樓

貧窮百首(四)

再雅調論を駁す

明倫歌集序

再雅調論を駁す(一)

女子詠歌論

貧窮百首(五)

歌論

人丸赤人の優劣

和歌ノ趣向ヲ論ズ(承前)

蓮月尼の逸事

桂園叢話 第三

和歌漫言

短歌を排して長歌を興す可し

五月

再雅調論を駁す(二)

再雅調論を駁す(續稿)

雅調論の再駁を駁す

歌ものかたり

披書知昔

人丸赤人優劣の辯

源實朝論

井上幸文 日華

佐々木弘綱 八洲

咬菜軒主人 學林

佐々木弘綱 日華

田邊龍子 日華

井上幸文 日華

高崎正風 日雜

木公迂人 知玉

池袋清風 國友

磯野秋渚 柵草

井上通泰 柵草

原田芳太郎 東學

和田萬吉 國

一・七

一・七

一・七

一・八

一・八

一・八

一・八

一・八

一・八

一・八

一・八

一・八

一・八

佐々木弘綱 日華

佐々木弘綱 八洲

福田正兄 八洲

半田忠見 日雜

小田清雄 知玉

花友情仙 知玉

小中村義象 國

古今集講義

六月

明治五百人一首初篇

歌道初歩

再雅調論の再駁を駁す(續稿)

再雅調論を駁せる文を見ていさ

さかおもふよしを述ぶ

和歌の沿革

歌ものかたり(續き)

香川景樹詠草の奥書

明治歌友肖像千人一首

雅調餘論

十二番歌合

鬼原郡古訓考

歌ものかたり(續き)

歌の論

和田萬吉氏の短歌を排して長歌

を振起すべしといへるをよみて

聊思ふこと

桂園叢話(第四)

歌の論(續)

落合直文 關秀

彈 舜平

林 弘訓 關秀

福住正兄 八洲

坂部てる子 八洲

半田忠見 日論

越俎道人 柵草

橘 道守

福住正兄 筆花

村岡良弼 日雜

半井忠見 日雜

雲 峯子 女雜

横山政和 國

井上通泰 柵草

雲 峯子 女雜

雲 峯子 女雜

雲 峯子 女雜

雲 峯子 女雜

雲 峯子 女雜

雲 峯子 女雜

雲 峯子 女雜

二

二

三

四

四

四

六

六

九

九

九

九

九

九

九

九

九

九

九

九

九

明治二十四年

- 一・一 富田碎花盛岡市に生る。
- 一・二・六 日下山足穂歿(六七)
- 一・二・一四 道家大門歿(六一)
- 月日不詳 柴田花守歿(八二) 咲園集
- 同 四海多實三神奈川縣吾妻村に生る。
- 同 村山守雄歿

叢書目錄 八

續日本歌學全書 第二編

- さき卯
- うげらが花
- 眞幸千蔭歌問答
- 答小野勝義書
- 琴後集
- 贈稻掛大平書
- 答村田春海書
- 再贈稻掛大平書
- 香取魚彦家集
- 靜屋家集
- 山のさち
- 筑波子家集
- 縣居門人錄
- 賀茂翁家集正誤

- 賀茂 眞淵
- 加藤 千蔭
- 加藤 千蔭
- 加藤 千蔭
- 村田 春海
- 村田 春海
- 村田 春海
- 稻掛 大平
- 村田 春海
- 香取 魚彦
- 河津 美樹
- 日下部高豊
- 土岐筑波子
- 賀茂 眞淵
- 村田 春海

一月

日本歌學全書三篇

佐々木弘綱

博文館

詩辨——美妙齊に與ふ(一)  
或人歌をもよみたりし歌書をよむ  
順序いかしてよからんといふに  
答ふ

K. U 生 國友 八・一〇五  
鈴木重嶺 筆花 三七

詩辨——美妙齊に與ふ(二)

K. U 生 國友 八・一〇五

しきしま發行のゆえよし

遠山英一 しき 一

續詞花集の撰者につきて

小田清雄 日雜 一一

秋萩帖釋文

轉軸老人 日雜 一一

日本韻文論 (八)

山田美妙 國友 八・一〇七

歌論(一)

白井治堅 筆花 三八

題をときたるとき歌

筆花 三八

歌體はかゝよるべからず俗調を  
はまぬかれたし

鈴木重嶺 筆花 三八

歌話三則

田原樸水 柵草 一六

神方升子が詠草のおくに

香川景樹 柵草 一六

歌かたり

久米幹文 國文 一

二月

日本歌學全書四編

佐々木信綱 博文館

古今和歌集序まぐらト言語ノ事

矢川求 八洲 五六

奈雅こと草紙拔萃

春山弟彦 八洲 五六

歌論(續)

白井治堅 筆花 三九

俗情俗語

小中村義象 筆花 三九

百人一首講義

井上通泰 柵草 一七

桂園叢話(第六)

白井治堅 筆花 四〇

歌論(續)

鈴木重嶺 筆花 四〇

おとといねといふに差別ある事

轉軸老人 日雜 一三

秋萩帖釋文(前承)

轉軸老人 日雜 一三

新葉集なる京極贈左大臣の間

轉軸老人 日雜 一三

天津乙女の歌につきて

中村秋香 東京日日 一二

天津乙女の歌に就て中村秋香大人に答ふ

藤 朧 生 東京日日 二五

三月

日本歌學全書五編

佐々木信綱 博文館

寶田集

佐々木弘綱 東 崖 堂

松のしづ枝

間宮八十子 東 崖 堂

歌かたり

久米幹文 國文 二

歌論(續)

白井治堅 筆花 四一

百人一首講義

小中村義象 筆花 三

奈雅こと草紙拔萃

春山弟彦 八洲 五七

續詞花集の事

田中敦忠 日雜 一四

戀のうたにつきて

美濃笠松 以良 八一

天津乙女の歌に就きて再び藤朧ぬしに答ふ

中邨秋香 東京日日 七

天津乙女の歌に就きて再び藤朧ぬしに答ふ(承前)

中邨秋香 東京日日 八

重ねて中村秋香大人に答ふ

藤 朧 生 東京日日 一一

三たび藤朧ぬしに答ふ

中邨秋香 東京日日 一四

四月

國會議員百首

伊東洋次郎 三輪靜觀堂

歌文かなつかひ

佐々木弘綱 博文館

明治響洋歌集

岡部伊平 文 玉 圃

作歌問答

服部元彦 國文 三

長夜のすさひ

石河光熙 八洲 五八

百人一首講義

小中村義象 筆花 四

飯田年平翁傳

十百舍主人 柵草 一九

秋萩帖釋文(前承)

轉軸老人 日雜 一五



五月

日本歌學全書六編  
婦女詞藻第一編

佐々木弘綱  
佐々木信綱  
佐々木信綱

博文館  
博文館  
博文館

歌話

萬葉集

百人一首講義

桂園叢話 第七

わかさしがらの歌はこかに心え  
てわよむへきき問ひける人にこ  
たへる

歌話

六月

日本歌學全書七編

足代弘訓翁家集

歌話三則

古今集正義總論補註釋

七月

蛙園庭訓集

菊乃下葉第二集

坂正臣 國文

大和田建樹 國文

小中村義象 しき

加藤雄吉 柵草

城戸千栢 筆花

無人無言樓 筆花

主人 日人

佐々木弘綱 博文館

佐々木信綱 博文館

佐々木弘綱 博文館

加藤雄吉 柵草

八田知紀 柵草

福住正見 福運社

尾崎突夫 福運社

三八

百人一首講義

きしうつ波(蓮月尼の歌)

きしうつ波(平相國の歌)

古今和歌集正義追考序

熊谷直好と八田知紀と

和歌麻那波之良

八月

日本歌學全書八編

和歌手引草

和歌のしるべ

百人一首講義

佐々木弘綱翁小傳

桂園叢話(第八)

九月

日本歌學全書九編

歌學

隨處師說

歌話

歌書聞書

小中村義象 しき

小田清雄 日雜

小田清雄 日雜

熊谷直好 柵草

森林太郎 柵草

八木美穂 筆花

佐々木弘綱 博文館

佐々木信綱 博文館

藤井行麿 女鑑

井口隆太郎 女鑑

井口隆太郎 女鑑

松岡國男 日論

松岡國男 柵草

佐々木弘綱 博文館

佐々木信綱 博文館

大和田建樹 女講

香川景樹 しき

小中村義象 國文

扇橋漁老 亞細

七

一六

一六

二二

二二

五〇

博文館

一・一

一・一

一・一

三・八

二二三

博文館

三

九

八

一三

十月

日本歌學全書十編	佐々木弘綱	博文館	宮内省	五
萬葉集古義品物解	鹿持雅澄	宮内省	宮内省	一〇
萬葉集古義人物傳	鹿持雅澄	宮内省	宮内省	二五
萬葉集古義枕詞解	鹿持雅澄	宮内省	宮内省	三
萬葉集古義名所國分	鹿持雅澄	宮内省	宮内省	
萬葉集古義名所考	鹿持雅澄	宮内省	宮内省	
萬葉集古義註釋目錄	佐本弘蔭	宮内省	宮内省	
故八田知紀翁の歌論	三浦千春	筆花		
隨處師說	香川景樹	しき		
桂園叢話(第九)	松岡國男	柵草		
今の世は	小林正和	東京日日		
十一月				
日本歌學全書十一編	佐々木弘綱	博文館		
新説歌かたり	佐々木信綱	福田書店		
桂園一枝	中村秋香	しきしま發行所		
新撰歌典	香川景樹	博文館		
隨處師說	落合直文	しき		
	香川景樹	しき		

和歌のおとづれ

桂園叢話(第十)

魚住長胤氏の答辯を反論す

歌話

國文學諸家

早稻田文學學第三號和歌評

評論『大八洲學會雜誌卷六十三に出たる主任先生本居豊頼外五名の歌』

評論『大八洲學會雜誌卷六十三に出せる長歌八首』

新撰歌典評

十二月

和歌のおとづれ	時文欄	早稻	三
桂園叢話(第十)	松岡國男	柵草	二六
魚住長胤氏の答辯を反論す	三栗屋主人	筆花	五六
歌話	千葉梅園	早稻	四
國文學諸家	時文欄	早稻	四
早稻田文學學第三號和歌評	稻田白兔	大日	二三
評論『大八洲學會雜誌卷六十三に出たる主任先生本居豊頼外五名の歌』	海上胤平	郵便報知	二五
評論『大八洲學會雜誌卷六十三に出せる長歌八首』	海上胤平	郵便報知	二八
新撰歌典評	日本記者	日本	二九
十二月			
日本歌學全書十二編	佐々木弘綱	博文館	
百人一首一夕話	竹田晨正	金華堂	
新撰歌典	高橋五郎	國友	九・一三九
隨處師說	香川景樹	しき	一二
國文學諸家(前號のつゞき)	時文評論欄	早稻	五
漫言一則	饒舌子	日本	一
新撰歌典の評をよみて	萩巴秋村	日本	一
新撰歌典の評をよむをよむ	日本記者	日本	三

月不詳

井上翁遺稿

翠樹集 三

東園歌集

岡舍詠史集

汲古集

熊鷹集 二

梅の下風

道戲芝居百人一首

讚酒歌百首

明治歌集肖像千人一首

歷世紀事詠史百首

みちのつと

みくるまのあと

俗語歌調

國語のしるべ

井上 信義

中山 忠能

林 厚德

高平 眞藤

近藤 清石

甲斐 一彦

柿田 利和

梅廻家妬山人

雲根の會 一平

橘 道守

天野 御民

小池 道子

小出 繁

彈 舜平

小川 清雄

博文館

皇后 職

皇后 職

森本 專助

一・六 落合直澄歿(五二)

一・二一 土屋文明辭馬縣上野村に生る。

二・一九 間島八十子歿(六九) 和歌玉石集

二・一九 三條實美墓(五六)

二・二八 御歌會始。御題社頭祈世。近藤芳介 松波資之 藤

村叡雲預選に入る。

五・一五

しきしま第五號 現今和歌十大家の捐命投票發表

高崎正風(三六四點) 禰羽美靜(三三八點) 小出榮

(三三〇點) 小中村清短(三一〇點) 税所敦子(三〇

五點) 黒川眞頼(二八四點) 鈴木重嶺(二三二點) 本

居豊頼(二三〇點) 松門三帥子(二一八點) 近藤芳介

五・二七

杉浦壺子(舊姓岩崎)川越市に生る。

六・二五 佐々木弘綱歿(六四) 夜鶴集 百人一首僅言解 萬

葉集童噺 萬葉集歌辭童噺 萬葉集僅言解 古今百

人一首 續百人一首

一・二・二五 水町京子(宮坂みち子)高松市に生る。

月日不詳 石河正養歿(七一) 多頭廻會歌文集

叢書目録 九

續日本歌學全書 第三編

自撰歌

石上私淑言

後鈴屋集

稻葉集

歌のしるべ

詩歌論

詠歌大概評

海士の轉

本居宣長

本居宣長

本居春庭

本居大平

藤井高尙

横井千秋

齋藤彦麿

足代弘訓

明治二十五年

一月

- 楡の舍哥かたり
- 古代和歌史
- 隨處師說
- 香川景樹翁の歌につきて
- 古代和歌史(前承)
- 桂園叢話(第十八)

二月

- 百人一首略解
- 頭書古今和歌集遠鏡
- 頭註新葉和歌集
- 百人一首峰の梯
- 古代和歌集(前承)
- 古代勅選和歌批評
- 隨處師說
- 和歌に就きての説くさく

富田馬太 女鑑 一〇・一四二 六

池袋清風 國友 一〇・一四二 六

香川景樹 しき 一三 一三

遠山英一 しき 一三 一三

池袋清風 國友 一〇・一四三 四〇

井上通泰 柵草 四〇 四〇

下野遠光 博文館

本居宜長 圖書出版會社

山崎美成 稽照館

村上忠順 小林新兵衛

服部元彦

池袋清風 國友 一〇・一四四 一四

池袋清風 國友 一〇・一四五 一四

香川景樹 しき 一四 九

早稻 九

歌話

萬葉集講義

桂園派の流行

桂園叢話(第十一)

萬葉集畧解補闕序

大八洲學會歌評

大八洲學會歌評(續)

大八洲學會歌評(完)

香川景樹の發句並に俳諧歌

三月

歌學捷徑

桂園一枝拾遺

西田敬止 文學 一

萩野由之 文學 一

大谷望之 柵草 二九

松岡國男 柵草 二九

新貞老 筆花 五八

三栗園主人 郵便報知 五

三栗園主人 郵便報知 七

三栗園主人 郵便報知 一

井上通泰 日本 一一

井口隆太郎 博文館

香川景樹 しきと發行所

古代勅選和歌批評(前承)

歌話

萬葉集講義

贊成ゆえよしなのべて歌學發行的趣旨に代ふ

三十六番歌合

祝詞

歌道の沿革(一)

池袋清風 國友 一〇・一四七 二

西田敬止 文學 二

萩野由之 文學 二

落合直文 歌學 一

木村正辭 歌學 一

小中村清矩 歌學 一

漢詩和歌の將來如何

贈正一位柿本朝臣人麻呂の傳

香川景樹詳傳

歌會式(一)

歌がたり

歌を見る目

論するもの必しも能せず

賀茂真淵と香川景樹

古代勅選和歌批評(前承)

隨處師說

歌の説

井上哲二郎氏の漢詩和歌論を駁す

近世歌學評論(其一)

歌話

古今和歌集

古代勅撰和歌批評(前承)

桂園叢話(第十三)

韻文所見

桂園遺芳を讀みて

桂園叢話(第一)

井上哲次郎 歌學 一

小中村義象 歌學 一

井上通泰 歌學 一

阪正臣 歌學 一

中邨秋香 歌學 一

關根正直 歌學 一

巴戟天會主人 歌學 一

巴戟天會主人 歌學 一

池袋清風 國友 一・二四八

香川景樹 しき 一五

林 壘臣 女鑑 一一

高良山人 城南 一

佐々木信綱 城南 一

西田敬止 文學 三

半井眞澄 日學 一九

池袋清風 國友 一〇・二四九

松岡國男 桐草 三〇

湖處子 早稻 一二

記者 日 本 一八

井上通泰 讀賣新聞 三一

歌詞遠鏡 三

歌の栞

草庵和歌集を讀みて頓阿を論ず

狂歌源流

萬葉集講義

歌話

歌學者の偏僻

歌道の沿革(二)

漢詩和歌の將來如何(前承)

和歌及新體詩を論ず(一)

大伴家持傳

景樹傳補遺

歌會式(二)

續歌がたり(一)

歌よまむときのさとし

夕顔棚の下涼といふ歌

柿本人麿と山部赤人と

歌は隱居の業にあらず

歌は柔弱なるものにあらず

佐々木弘綱

佐々木信綱

蔽日生

關根吟風

萩野由之

西田敬止

落合直文

小中村清矩

井上哲次郎

萩野由之

増田于信

井上通泰

阪正臣

中村秋香

伊能穎則

關根正直

今泉定介

巴戟天會主人

巴戟天會主人

弦卷書肆

博文館

一〇・一五〇

一〇・一五〇

四

四

一

一

一

一

一

一

一

一

一

一

一

一

一

三十六番歌合

古代勅撰和歌批評(前承)

歌(しらへ)につきておのか感を述ふ

歌話

萬葉集講義

井上通泰歌集(其一)

和歌僭評

近詠の中に

桂園叢話(十三)

古今和歌集(前號續)

歌に字音を日ふる可否の質疑に答ふ辨

五月

浦の志保貝拾遺

歌の徳

漢詩和歌の將來如何(前承)

和歌及新體詩を論ず(二)

国歌流派の變遷を論ず(一)

紀朝臣貫之傳

歌會式(三)

續歌かたり(二)

歌學 二

池袋清風 國友 一〇・一五一

敷島道人 しき 一六

西田敬止 文學 五

萩野由之 文學 五

松岡國男 柵草 三一

孤山居士 柵草 三四

槐園鉄朝 柵草 五〇

松岡國男 柵草 三一

半田眞澄 日學 二〇

林 陸夫 筆花 六〇

熊谷直好 粟田允治校 川瀬代助

藤井行麿 女鑑 一四

井上哲次郎 歌學 一三

萩野由之 歌學 一三

佐々木信綱 歌學 一三

小中村義象 歌學 一三

阪 正臣 歌學 一三

中 郵 秋香 歌學 一三

澄月上人逸事

隨處師説

近世歌學評論(其二)

國民の友第百四十九號古代勅撰和歌批評を讀む

桂園叢話(第十四)

俗歌韻話

歌謡の世界

歌のことは書

皇學鼻くらへ(續)

俗歌韻話

俗歌韻話(續)

俗歌韻話(續)

俗歌韻話(續)

俗歌韻話(續)

俗歌韻話(續)

俗歌韻話(續)

俗歌韻話(完)

井上通泰 歌學 一・三

香川景樹 しき 一七

佐々木信綱 城南 一・三

松波遊山 柵草 三二

松岡國男 柵草 三二

櫻坪の隠士 早稻 一六

早稻 一六

筆花 六一

筆花 六一

櫻坪の隠士 讀賣新聞 一

櫻坪の隠士 讀賣新聞 三

櫻坪の隠士 讀賣新聞 四

櫻坪の隠士 讀賣新聞 五

櫻坪の隠士 讀賣新聞 七

櫻坪の隠士 讀賣新聞 八

櫻坪の隠士 讀賣新聞 一一

櫻坪の隠士 讀賣新聞 一二

櫻坪の隠士 讀賣新聞 一三

六月

類題近世和歌集 二卷

上田維曉

青木嵩山堂

日本英傑百首

歌俳百人傳

玉鉾集第一輯

櫻陰居士  
菊廼家東籬

山中孝之助  
今古堂  
稽照館

皇學鼻くらへ(續)

筆花

六一

琉球人歌結

歌學の精神

和歌及新體詩を論ず(三)

國歌流派の變遷を論ず(二)

柿本人麿の事跡

歌會式(四)

續歌かたり(三)

宇奈爲能春佐備(一)

小澤蘆庵傳

金槐和歌集を讀む

唱歌の來しかた及び現在

隨處師說

近世歌學評論(其三)

斯體和歌意見

狂歌源流

歌話數則

日本韻文の形體に就きて

歌學

時文欄  
早稻  
一八

金陵翁が磯丸傳の誤

岩上安敬

歌學

一

五

小中村義象

萩野由之

佐々木信綱

落合直文

阪正臣

中邨秋香

中島廣足

小澤政胤

停春樓主人

時文欄

香川景樹

佐々木信綱

惜寸暇文房

關根吟風

大西祝

芳賀矢一

時文欄

早稻  
七  
六四

磯鷹翁のこと

井上頼文

歌學

一

五

歌學  
一  
四

歌學  
一  
四

歌學  
一  
四

歌學  
一  
四

歌學  
一  
四

歌學  
一  
四

歌學  
一  
四

歌學  
一  
四

國友  
一〇・二五七

早稻  
一七

しき  
一八

城南  
一

城南  
一

城南  
一

國友  
一〇・一五八

婦教  
一・一七

哲學  
七・六四

七月

俗歌韻話(續)

俗歌韻話(續)

俗歌韻話(續)

俗歌韻話(續)

俗歌韻話(續)

俗歌韻話(續)

俗歌韻話(續)

俗歌韻話(續)

俗歌韻話(續)

俗歌韻話(續)

俗歌韻話(續)

櫻坪の隱士

櫻坪の隱士

櫻坪の隱士

櫻坪の隱士

櫻坪の隱士

櫻坪の隱士

櫻坪の隱士

櫻坪の隱士

櫻坪の隱士

櫻坪の隱士

櫻坪の隱士

讀賣新聞

讀賣新聞

讀賣新聞

讀賣新聞

讀賣新聞

讀賣新聞

讀賣新聞

讀賣新聞

讀賣新聞

讀賣新聞

讀賣新聞

二九

二六

二三

二二

一一

一〇

六

五

二

一

一

長歌規則  
正調和歌作法指南  
新案

星野忠直  
笹村良昌

歌學

一

五

圖書出版會社

磯丸の逸事	鞍智芳章	歌學	一	五
歌會式(五)	阪正臣	歌學	一	五
机の塵(一)	前田夏繁	歌學	一	五
琉球人歌結	歌學	一	五	
(續歌かたり(四))	中村秋香	歌學	一	五
熊谷直好が秘藏せし景樹の書簡	吉田耕平	歌學	一	五
字名爲能春佐備(二)	中島廣足	歌學	一	五
歌の進化	青木清高	歌學	一	五
萬葉集を讀む	無主樓主人	亞細	一	四七
旗野士良氏が音韻論の由來	時文欄	早稻	一	一九
隨處師說	香川景樹	しき	一	一九
香川景樹翁と本居宣長翁と歌の 見解の差異	大西祝	青文	一	九
詩歌論	井口隆太郎	女鑑	一	九
百人一首の起源	櫻井元茂	こと	一	一
草庵集難詰	ともしび	城南	一	五
借寸暇文房主人の新体和歌見解	佐々木信綱	城南	一	五
近世歌學評論(其四)	中郵秋香	柵草	一	三
大ぬさ	孤山居士	柵草	一	三
和歌僭評	萩園主人	柵草	一	三
題詠の事につきて	加藤雅吉	柵草	一	三
歌話五則	三浦千春	柵草	一	三
井手曙覺翁の傳				

無韻非歌論	旗野櫻坪	早稻	二〇
濱荻考	武田信賢	筆花	六三
桂園翁の名歌	三浦千春	筆花	六三
俗歌韻話(完)	櫻坪の隱士	讀賣新聞	一
八月			
新撰長歌集	岸本宗道	東京堂	一
類辭類言撰歌集	大宮宗司	東京堂	一
歌よむわざを學生にもどく	魚住長胤	稽照館	一
紀貫之傳	林麴臣	精華	八
百人一首につきて	小中村義象	精華	八
歌學の前途	井口隆太郎	女鑑	二〇
國歌の韻	小中村義象	歌學	一
琉球人歌結	佐藤誠實	歌學	一
號加茂眞淵翁傳つゞき	落合直文	歌學	一
歌會式(六)	阪正臣	歌學	一
机の塵(二)	前田夏繁	歌學	一
續歌かたり(五)	中村秋香	歌學	一
逸事四則	井上通泰	歌學	一
宇奈爲能春佐備(三)	中島廣足	歌學	一



歌の進化(前承)

無韻非歌論(つゞき)

隨處師說

桂園翁の直話

詩歌論

戀歌は詠むべからず

蓮月尻か花の歌の評

香川景樹の歌論

柵草紙をよみて

歌話一則

古今和歌集(續)

無韻非歌論(つゞき)

皇學鼻くらべ(續)

俗歌韻話解嘲

俗歌韻話解嘲(未完)

俗歌韻話解嘲を中止する理由

九月

明治佳調集

非加計乃加津羅

青木清高 歌學 一・六

旗野櫻坪 早稻 二二

香川景樹 しき 二〇

大口多加志 しき 二〇

大西 祝 青文 一〇

林 麴臣 女鑑 二二

三田 葆光 こと 二

大西 祝 國友 一一・一六四

萩園主人 柵草 三五

加藤雄吉 柵草 三五

半田眞澄 日學 二二

旗野 櫻坪 早稻 二二

筆花 六四

櫻坪 隱士 讀賣新聞 一二

櫻坪 隱士 讀賣新聞 一三

櫻坪 隱士 讀賣新聞 一七

木山清名 吉川半七

堀 秀成 歌林 一・一

國歌八論

紀貫之傳(前承)

歌は目にて見るべきものなるか  
耳にて聞くべきものなるか

國歌の韻(前承)

國歌流派の變遷を論ず(四)

机の塵(三)

續歌かたり(六)

新古今和歌集評(一)

古寫本元輔集の表紙の繪

字奈爲能春佐備(四)

日本書紀講義

歌の進化

香川景樹の歌論(前承)

隨處師說

詩歌論

むら時雨

平民的短歌の發達

柵草紙第三十四號井手曙覽の傳  
をよみて

歌の聲調について

桂園叢話(第十五)

羈窓漫筆三則

持統天皇(一)

荷田在滿 歌林 一・一

小中村義象 精華 九

落合直文 歌學 一・七

佐藤誠實 歌學 一・七

佐々木信綱 歌學 一・七

前田夏繁 歌學 一・七

中邨秋香 歌學 一・七

金子元臣 歌學 一・七

川崎千虎 歌學 一・七

中島廣足 歌學 一・七

飯田武郷 歌學 一・七

青木清高 歌學 一・七

大西 祝 國友 一一・一六六

香川景樹 しき 二二

大西 祝 青學 一一

惜寸 暇 城南 一・七

愛山 生 國友 一一・一六七

井手今滋 柵草 三六

皆無齋主人 柵草 三六

松岡國男 柵草 三六

井手今滋 柵草 三六

東洋小史 亞細 五八

『歌學』六號七號國歌之韻を讀む 旗野 櫻平 早稻 二四

徳井田忠友 井上通泰 日(本) 一一二

十月

明治百人一首 石丸 忠胤 菊廼家東籬

歌俳百人傳

平民的短歌の發達(二) 愛山 生 國友 一一・一六八

號持統天皇(二) 東洋小史 亞細 五九

落合直文判十四番歌合 今様考 佐藤 誠實 歌學 一・八

ほのぼのとながながし夜 井上 頼文 歌學 一・八

大友黒主 關根 正直 歌學 一・八

歌會式(七) 阪 正 臣 歌學 一・八

机の塵(四) 前田 夏繁 歌學 一・八

新古今集歌評 金子 元 臣 歌學 一・八

日本書紀講義 飯田 武郷 歌學 一・八

宇奈爲能春佐備(五) 中島 廣 足 歌學 一・八

柿本人麻呂の墳墓に付て 若溪 漁 史 歌學 一・八

持統天皇(三) 東洋 小 史 亞細 六〇

桂園大人判歌結薄氷 亞細 六〇

亞細 六〇

平民的知歌の發達(三) 愛山 生 國友 一一・一六九

隨處師說 香川 景樹 しき 二二二

持統天皇(四) 東洋 小 史 亞細 六一

桂園大人判歌結薄氷 亞細 六一

國語八論 大菅 公 主 等 歌林 一一・二

鎌倉右大臣歌百首評 加茂 眞 淵 歌林 一一・二

大西氏の景樹論 惜 寸 暇 城南 一一・八

鎌倉時代漢學及び佛教の國文學に及せる影響 岫 雲 逸 史 城南 一一・八

持統天皇(五) 東洋 小 史 亞細 六二

歌話三則 無人 無 言 樓 亞細 六二

平民的短歌の發展第二を讀む 愛 々 生 亞細 六二

羈窓漫筆三筆 井手 今 滋 柵 草 三七

我邦に短篇韻文の起りし所以を論ず 正 岡 子 規 早 稻 二六

和歌の現況 早 稻 二六

近日和歌尙戰の評判 狼 眼 蜂 月 生 讀 賣 新 聞 一四

十一月

戀歌は詠むべからずといへる説を讀みて 奎 堂 散 史 女 鑑 二六

持統天皇(六) 東洋 小 史 亞細 六四

桂園大人判歌結薄氷 亞細 六四

落合直文判十四番歌合 歌學 一・九



古今集評釋

詩歌論

高崎正風先生談話

萬葉集歴史解

近世歌評

國歌八論

垣内の七草

思ふ旨ありて

桂園叢話(第十七)

國詩に就いて

詩論

月不詳

千種の花 二

櫻園集

藥癡家集

梅園詠草 二

海人の捨繩

洗行獨吟

藻しほ草

餘光集

かたみのいそ茶

さくらごの翁

大西 祝

大口多比之

さくらごの翁

さくらごの翁

荷田在滿

伴林光平

柿の舍主人

松岡 國男

米山保三郎

裏錦

青文

女鑑

裏錦

裏錦

歌林

歌林

こと

柵草

哲學

早稻

二

一四

二八

二

二

四

一

四

六

三九

七〇

三〇

海航書屋

彈 舜平

大久保一翁

三井 高蔭

尾高 高雅

柳 楢悦

山口 眞臣

澤田 弘道

松平 春嶽

佐々木弘綱

大口 鯛二

泥舟先生詩歌

かざしの花

松籟帖

深みどり

東山供薦集

煮蕎餘情

桂園叢書 三卷

百人・首通解

葉櫻日記

歌學類聚

小林 節

野口正忠

安生順四郎

小林正策

頼 龍三

三上一彦

井上通泰

平井頼吉

山縣有朋

富田良穗

一・七 小出榮御歌所寄人被仰付。

一・一八 御歌會始。御題目出山。税所敦子預選に入る。

三・二七 柱岡香川景樹の五十年祭京都東山左阿彌樓に催さる

近藤芥介齋主にて小出榮外百數十名の出席あり、な

ほ東京にては四月二十七日星岡茶寮にて開かれ高崎

正風外八十餘名出席。

四・一 佐久間果園歿(九〇) 千五百御統 ×果園雜詠百首

四・九 西村陽吉(舊姓江川)東京本所に生る。

五・二〇 彌住正兄歿(六九) 蛙園歌袋 函根百首

八・ 與謝野寛上京して落合直文の門に入る。

九・二 千種有任歿。

一一・八 水野忠敬御歌所參候被仰付。

明治二十六年（一八九三）

一月

一・二・二〇 こさげの花雜報欄、現今の三大家。高崎正風 佐々

木信綱 鈴木重嶺

一一・ 正岡子規（竹の里人）日本新聞社に入社。

一・二・二四 拜郷蓮茵歿（八五） 唯心庵家集

一・二・二〇 伊達宗城歿（七六）

月日不詳 高須葛根歿（六六）

同 小川清流（常矢門）歿（七三） 梅木抄

歌人異名詞

落合 直文 萩の家 櫻の舎

鮎貝 盛影 蕪の家 松の家 槐園

與謝野 寛 蘇鐵の屋 くしみたまの舎 鐵幹

佐々木信綱 小鈴 健 磯邊千浪 残月樓主人

正岡 常規 子規 竹の里人 香雲 規 獺祭書屋主人 莞爾先

坂井 辨 生 偷花兒 花風病夫 地風升 越智處之助

丸岡 桂 原久良伎

大町 芳衛 桂 月の桂のや かつら

金子雄太郎 薫園 皎潔 清原文彦 春風醉士

伊藤幸二郎 左千夫 春園 無一塵庵 四壁居道人 唯眞閣主人

久保田俊彦 樂燒道人 夾竹桃書屋主人

窪田 通治 柿蔭山房主人 島木赤彦 二水軒 伏龍 山百合 柿人 柿の村人

若山 繁 空穂 小松原春子 うつぼ

北原 隆吉 牧水 桂露 雨山 白雨 野百合

白秋 蘆愁 射水

萬葉集長歌類葉抄 標註七種百人一首

歌學雜誌

國詩論（中）

隨處師說

古今集評釋

與翁滿歌の難疎

國歌八論

歌がたり

古今集傳授一斑

詩歌改良の方針

皇國學琴

古今和歌集講義

筆麴須沙飛

皆無齋主人が歌の聲調に就きて

いへる説をよみて

新々體詩人

小塚逸夫 稽照館  
佐々木信綱 博文館

正岡子規 早稻 三一

磯貝雲峰 六合 一四五

香川景樹 しき 二五

さくらごの翁 裏錦 三

千稚有功 歌林 一・五

荷田在滿 歌林 一・五

松野操雄 女鑑 三二

森 馬太 女鑑 三一

井上哲次郎 國友 一一・二七九

橘 冬照 明歌 四〇

橘 道守 明歌 四〇

長野美波留 明歌 四〇

翠松園主人 柵草 四〇

早稻 柵草 三二

千代萬代

我歌學の取るところ

國歌流派の變遷を論ず(七)

歌會式(十)

話歌一則

續歌かたり(八)

新古今集歌評

萬葉集の版本

歌學者の系統(一)

蒙求和歌

典舍漫錄

阿蘇ぶり

名歌十首

兼好法師蒙集(一)

女歌仙家集講義(一)

阿佛尼

海石榴舍雜話(第一)

海石榴舍消息集(第二)

古今集正義

小中村義象 歌學 二・

落合直文 歌學 二・

佐々木信綱 歌學 二・

阪正臣 歌學 二・

鈴木重嶺 歌學 二・

中村秋香 歌學 二・

金子元臣 歌學 二・

木村正辭 歌學 二・

小杉愠郎 歌學 二・

黒川眞道 歌學 二・

堀秀成 歌學 二・

小中村義象 歌學 二・

佐々木信綱 歌學 二・

大和田建樹 歌界 一

天知子 歌界 一

新田清節 郵便報知 一五

中川恭次郎 郵便報知 二六

香川景樹

しきしま發行所

新體詩學

類題歌集 二

最明寺殿教訓百首

難四之可他延

新體詩を論ず

國歌流派の變遷を論ず(了)

歌會式(十一)

大僧正慈圓傳(前承)

机の塵(六)

佐平が幼小のうた

日本書紀講義

桃澤夢宅日記(第一)

典舍漫錄

明治百人一首をよみて

莫黨圓隣の歌衆說辨

本居宣長の傳

詩歌改良の方針(前承)

歌の種類

隨處師說

小澤蘆庵

大和田建樹

杉谷正隆

文酒家主人

三條實美

小中村義象

佐々木信綱

阪正臣

金子元臣

前田夏繁

鞍智芳章

飯田武郷

井上通泰

堀秀成

岸本宗道

小田清雄

落合直文

井上哲次郎

さくらごの翁

香川景樹

太華山人

博文館

國文會

古川半七

歌學 二・

歌學 二・

歌學 二・

歌學 二・

歌學 二・

歌學 二・

歌學 二・

歌學 二・

歌學 二・

歌學 二・

日論 五・

日論 五・

國友 二・二八

裏錦 四

しき 二六

小團 九・一〇

八

二月

草庵集雜註

歌がたり

古今集傳授一斑

皇國學葉

筆麴須沙飛

詩歌改良の方針(前承)

浪華文學史料(其二)

桂園叢話(十九)

筆のすさび

女歌仙家集講義(二)

兼好法師家集(二)

日本音樂談

橘曙覽

三月

古今和歌集序解

日本雅曲集

校古今和歌集講義

和歌吳竹集

歌がたり

國文學者の新體歌

こと 八

松野操雄

森馬太

橋冬照遺稿

長野美波留

井上哲次郎

磯野秋渚

井上通泰

花圃

大和田建樹

旗野櫻坪

芳賀矢一

こと 三三

女鑑

女鑑

明歌

明歌

國友

柵草

柵草

文界

文界

文界

哲學

三三

三三

四一

四一

二・一八二

二・一八二

五三

四一

二・

二・

二・

三四

日本音樂談(前承)

歌學者の系統(二)

古人の歌さても模範となしかたきあり

歌話一則

歌會式(二二)

歌學管見

續歌かたり(九)

桃澤夢宅日記第一(前承)

櫻園集をよみて

典舍漫錄

本居宣長の傳(二)

莫葦圓隣の歌衆說辯(承前)

喚子鳥說

國詩論(下)

歌の種類

現今五大歌人

歌がたり

古今集傳授一斑

萬葉和歌集

金槐和歌集

難陳三十番歌合

歌かたり

旗野櫻坪

小杉樞郎

鈴木重嶺

小中村義象

阪正臣

佐々木信綱

中村秋香

井上通泰

金子元臣

堀秀成

落合直文

小田清雄

中田顯忠

磯貝雲峰

さくらごの翁

松野操雄

森馬太

橋道守

橋道守

橋守部

楠廼舍主人

早稻

歌學

歌學

歌學

歌學

歌學

歌學

歌學

歌學

日論

八洲

六合

裏錦

こと

女鑑

女鑑

明歌

明歌

明歌

明歌

こと

三五

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

一四七

五

九

三五

三五

四二

四二

四二

九

日本音樂談(承前)  
浪華歌學史料(其三)  
女歌仙家集講義(三)

旗野櫻坪 早稻 三六  
磯野秋香 柵草 五四  
大和田建樹 文界 三

海石榴消息集 三

郵便報知 一二

三十一言(一)

日 本 二一

三十一言(二)

日 本 二二

三十一言(三)

日 本 二三

三十一言(四)

日 本 二四

文界八つあたり(和歌)

日 本 二四

三十一言(五)

日 本 二五

四月

歌學會歌範評論

海上胤平 一 本社

歌枕 秋の寢覺

中村芳松 岡本仙助

杉屋遺稿

三本貞健 島田富子

大八洲學會詠歌正邪論

春日敬之 一本 社

難四之可他延

岩倉具視 吉川半七

井上、花岡、花散里三氏の歌論  
を評す

石本健 城南 二・一二

歌がたり

松野操雄 女鑑 三三六

日本音樂談(前承)

旗野櫻坪 早稻 三七

そゞろごと

莫鷲圓隣の歌衆說辨(接前)

歌學者の系統(三)

石川依平翁

高橋正翁

磯丸翁の年齢につきての疑

歌會式(了)

机の塵(七)

新古今集歌評

日本書紀講義

いはでも

椎の歌

題詠につきての論

古風の歌

典舎漫筆

歌人の三平

歌の種類

古今集傳授一斑

歌がたり

古今歌話

皇國學葉

古今集序文講義(一)

屋代弘賢 八洲

小田清雄 日論

小杉樞郎 文學

井上頼文 學歌

後藤多美雄 歌學

小栗章三 歌學

阪正臣 歌學

前田夏繁 歌學

金子元臣 歌學

飯田武郷 歌學

金子元臣 歌學

大石千引 歌學

村田春海 歌學

本居太平 歌學

堀秀成 歌學

岸本宗道 歌學

さくらざの翁 裏錦

森馬太 女鑑

松野操雄 女鑑

橘道守 明歌

橘冬照 明歌

本居豐穎 文海



歌がたり  
後撰集講義(一)  
歌人論

日本音楽談

桂園雜誌  
そゞろ言

對花小録

兼好法師家集(三)

五月

百人一首講義  
應用歌學

歌がたり

歌がたり

歌がたり

古今集序文講義(二)

後撰集講義(二)

活語新話

兼好法師家華(四)

あさ香社戲稿

楠適合主人 こと 一〇

佐々木信綱 文海 一・一

飯田武郷 文海 一・一

旗野櫻坪 早稲 三八

加藤雄吉 柵草 四三

三浦千春 柵草 四三

脫 蟬 文界 四四

文界 四四

島山 健 誠之堂書店

大和田建樹 博文館

松野操雄 女鑑 三八

楠適合主人 こと 一一

松野操雄 女鑑 三九

本居豊穎 文海 一・二

佐々木信綱 文海 一・二

橘冬照 明歌 四四

文界 四五

日本 四

あさ香社戲稿  
あさ香社戲稿  
あさ香社戲稿

六月

詠歌自在  
歌論類纂

歌仙俊頼卿

井上博士の詩歌改良論を讀む

偽歌人

西行上人談話

歌史

歌史

歌に打返し句を用ひる法

詠歌論

歌の種類

下總國郡郷考

海野遊翁より香川景樹におくりし消息文

後撰集講義(三)

古今集序文講義(三)

そゞろ言

日本 一四

日本 一五

日本 一八

佐々木弘綱 東雲堂

平 淳 美文社

楢の舎主人 思想 一

川の舎主人 思想 一

湯浅吉郎 國友 一二・一九二

西島 勝 國文 八

阪 正臣 國文 八

阪 正臣 國文 九

矢田 求 八洲 八四

木村正辭 皇典 一〇五

さくらどの翁 裏錦 八

村岡良弼 皇典 一〇五

あ、ま、 女鑑 四一

佐々木信綱 文海 一・三

本居豊穎 文海 一・三

三浦千春 柵草 四五

隨覽隨記

七月

橘 道守 明歌 四五

千代田歌集 三  
歌曲評註

佐々木信綱 博文館  
大和田建樹 博文館

歌仙俊賴卿  
不審草紙

橋の舍主人 思想 二  
小田清雅 日論 五・七  
西島 勝 國文 九

歌話

彈氏評論ヲ駁ス

橘 道守 明歌 四七  
濱武 慎 明歌 四七  
井上高槻 明歌 四六

木村主馬の歌

活語新話

古今集序文講義(四)

後撰集講義(四)

千家男爵自歌合

橘 冬 照 明歌 四六  
本居 豊 穎 文海 一・四  
佐々木信綱 文海 一・四  
本居 豊 穎 文海 一・四

近世俚歌の趣致

雲水雜記(歌評)

雲水雜記(歌評)

あさ香社詠草

あさ香社詠草

春野花之助 國民新聞 二  
日 南 生 日 本 本 七  
日 南 生 日 本 本 八  
日 本 本 一 一  
日 本 本 一 四

「日本」文苑歌評  
「日本」文苑歌評(其二)  
海風胤平氏の「日本」文苑歌評を評す  
海上胤平 日本 二〇  
海上胤平 日本 二三  
鳥啄 齋 日本 二三

八月

樂翁公遺書 三

松平定信 八尾書店  
江間政發

下總國郡考(續)

大成旅人

歌話

歌讀は師に従ふべし

萬葉集古注日本紀年紀考

船曳大滋の歌話

萬葉集時代の詞の古今集時代の詞に移りたるゆゑよしに就きて

後撰集講義(五)

藤原朝忠畧傳

そとろ言

桂園叢話(第二十)

詩人論(上)

詩人論(中)

詩人論(下)

村岡良弼 皇典 一〇八  
馬醉木滋野 精華 一八  
竹貫佳水 國文 一〇  
黒河春村 八洲 八六  
木村正辭 史學 四五  
井上高槻 明歌 四七  
諏訪忠元 女鑑 四五  
佐々木信綱 文海 一・五  
豁堂居士 柵草 四七  
三浦千春 柵草 四七  
井上通泰 柵草 四七

今の世の和歌に就て  
大和田建樹大人和歌註釋  
節月庵主人 日 本 二二  
大笑樓主人 日 本 二六  
柵草紙四十七號歌話  
藪堂居士 柵草 四八

九月

文章詩歌作法良材  
修正小倉百首  
明治  
新撰滑稽三十六歌撰和  
西村 豊 誠之堂  
蕪廼舎主人 女學雜誌社

彈氏評論ヲ駁ス  
萬葉集古注日本紀年紀考  
萬葉集時代の詞の古今集時代の  
詞に移りたるゆゑよしに就きて  
萬葉集時代の詞の古今集時代の  
詞に移りたるゆゑよしに就きて  
考證  
諏訪忠元 女鑑 四六  
木村正辭 史學 四・四六

安部仲麿の歌を読む  
三卿三説  
四十八號(廿六年十月五日)  
四十九號(全 十月廿日)  
五十號(全 十一月五日)  
五十一號(全 十一月廿日)  
橋 道守 明歌 四八  
木村正辭 史學 四・四六  
諏訪忠元 女鑑 四六  
木村正辭 八洲 四七  
半 分 生 裏錦 一一  
松野操雄 女鑑 四七

歌のことも 一一一  
活語新語  
後撰集講義(六)  
中島廣足 女鑑 四七  
橘 冬 照 明歌 四八  
佐々木信綱 文海 一・七

十月

歌格類聚  
桂園叢書 四  
富田良穗  
井上通泰  
有斐閣書房

野草歌の評  
村田春海翁著傳  
後撰集講義(七)  
古今集序文講義(五)  
柵草紙第四十八號の歌評  
桂園叢話(第廿一)  
國詩の形式に就いて  
國詩の形式に就いて  
歌を知るかたし  
五 子 裏錦 一一二  
佐々木信綱 文海 一・七  
佐々木信綱 文海 一・七  
本居豐類 文海 一・七  
鐵 幹 柵草 四九  
井上通泰 柵草 四九  
大西 祝 早稻 四九  
大西 祝 早稻 五〇  
坂 正 臣 歌文 一

春色秋光(一)  
春色秋光(二)  
春色秋光(三)  
春色秋光(四)  
春色秋光(五)  
地風 升日 本 九  
地風 升日 本 一一  
地風 升日 本 一二  
地風 升日 本 一四  
地風 升日 本 一六

春色秋光(六)  
春色秋光(七)  
春色秋光(八)

地風 升日 本 一八  
地風 升日 本 二二  
地風 升日 本 二三

十一月

群書類從第七輯

經濟雜誌社

荷田宿禰春滿の傳

難波津淺香 精華 二二

後撰集講義(八)

佐々木信綱 文海 一八

新古今集歌講義(一)

佐々木信綱 文海 一八

古今集序文講義(六)

本居 豐穎 文海 一八

足代弘訓翁傳

佐々木信綱 文海 一八

柵草紙四十九號歌評

棟園、鐵、幹 柵草 五〇

桂園一枝拾遺評

井上 通泰 柵草 五〇

桂園叢話(第廿二)

井上 通泰 柵草 五〇

あさ香社新作

二六新報 二

あさ香社詠草

二六新報 八

紅葉

文、鐵、柵園主人 二六新報 一二

今物語

評、鐵、柵園主人 二六新報 一五

菊

評、鐵、柵園主人 二六新報 一六

あさ香社詠草

文、鐵、柵園主人 二六新報 二二

落葉

文歌、鐵、柵園幹 二六新報 二二

十二月

鍼囊 二

鹿持 雅澄 宮内省

結詞例

鹿持 雅澄 宮内省

日本文人傳

大和田建樹 博文館

萬葉集摘英新釋

新 貞老 吉川半七

軒和歌詞の千種 二

百聽合 積善館

加茂縣主眞淵傳

難波津淺香 精華 二二

古今和歌集傳授の話

太田 華陰 日論 五・一二

古今集序文講義(七)

本居 豐穎 文海 一・九

棟園鐵幹兩氏の歌を評す

白川生 芝園 柵草 五一

棟園氏の歌評を讀みて

井軒 樓主人 柵草 五一

辨惑一則

打碎 柵園 柵草 五一

鐵幹氏の歌評を讀みて

鐵 柵園 柵草 五一

浪花歌學史料

磯野 秋渚 柵草 五一

桂園叢話(第廿三)

井上 通泰 柵草 五一

深草元政 附深草歌集

戸川 殘花 文界 一二

あさ香社詠草

二六新報 三

あさ香社詠草  
 反古歌(一) 二六新報 一〇  
 あさ香社詠草 二六新報 一六  
 反古歌(二) 二六新報 一七  
 反古歌(三) 二六新報 一七  
 鐵 幹 二六新報 二一三

月不詳

蜻蛉集  
 雁のゆく方 進藤泰世  
 和可葉園集 永井直道  
 桃屋歌集 二 平井言滿  
 龜壽集 渡邊 壽  
 ちとせのためし 森 遷  
 花かつら 小津新五郎  
 常磐堅磐 長岡文次郎  
 荒そこの玉藻  
 八千代椿  
 追悼集  
 會傳の涙  
 當武計久沙  
 花のうたかた  
 秋のねざめ

鐵 幹 二六新報 一〇  
 鐵 幹 二六新報 一六  
 鐵 幹 二六新報 一七  
 鐵 幹 二六新報 一七  
 鐵 幹 二六新報 二一三

進藤泰世  
 永井直道  
 平井言滿  
 渡邊 壽  
 森 遷  
 小津新五郎  
 長岡文次郎

西尾小左衛門  
 横井忠直  
 萩原正夫  
 大田純融  
 伊達泰子  
 中村芳松

蘭室先生遺草  
 峰月百首  
 標百人一首詳解  
 百人一首注釋  
 新註古今集講義  
 伊勢乃家裏 三  
 萬葉集釋義

南合義之  
 大槻峯子  
 三田村熊之助  
 永峰種彦  
 増田于信等  
 井上文雄  
 島山 健  
 早稻田大學

- 一・一八 御歌會始。御題巖上龜。近衛忠照 遠山預選に入る
- 一・二八 大井廣長野縣長久保新町に生る。
- 一・二九 魚住長胤歿。
- 一・ 少年文庫に掾原伏龍(赤彦)の歌出づ。世もかくははかなきものよ紅葉の深きよりはや散りそめにけり
- 一・ 落合直文 弟鮎貝房之進(槐園) 伊藤正弘 大町桂月 鹽井雨江 内海月杖 堀内新泉 井上一(經足) 與謝野 鐵幹 國分操子 清水丸子 池田末雄 師岡須賀子 藤井靜子 風當咲子 富田道生 佐方たま子等の門下生と共にあさ香社を興す。
- 二・一八 大熊信行米澤市に生る。
- 二・ 山田武甫歿(六三)
- 三・二〇 「こまげの花」雜報欄 現今五大歌人。福羽美靜 高崎正風 鈴木重嶺 本居豊頼 黒川眞頼。
- 三・ 岡本かの子(舊姓大貫)東京青山に生る。
- 四・一 河野慎吾播州河野村に生る。

四・一七 新聞日本に與謝野寛の歌出づ 飛ぶ鶯のつばきにふれて高嶺より枝ながら散る山ざくら花。

四・一七 藤原忠朝歿(七三)

四・二二 新聞日本に鮎貝桃園の歌出づ。花を見てかへらんさすれば初瀬山うしろにひびくいりあひの鐘。

七・ 「萬葉集古義」の刊刻成る。

八・六 松野勇雄歿(四二)

九・五 大橋松平大分縣日出町に生る。

一〇・ 金子薫園淺香社に加る。

一〇・ 結城哀草果(舊姓墨沼)山形市に生る。

一一・ 與謝野寛 直文の推舉に依りこの月二十六日創刊の「二六新報」に入社。

月日不詳

大鹽正路歿(八六) 張弛軒詩歌集  
小笠原長行歿 養老塙歌草稿 養老塙和歌并詩 長行公和歌詠草

誤植正誤表

頁段行 誤

二七下 三 歌の翠

二八下 一 佐々木信綱

二九下 三 長歌改良論辯駁

二九下 三 佐々木信綱

二九下 三 佐々木信綱

正

トル

佐々木弘綱

長歌改良論辯駁

佐々木弘綱

明治二十七年(一八九四)

一月

蓬加露 二

百人一首講義

群書類從第八輯

兼好法師傳考(一)

本居宣長傳

歌かたり

歌會正式次第

慕景集

新古今集春歌講義(二)

後撰集講義(九)

古今集序文講義(八)

桂園叢話(第廿四)

柵草紙第五十二號の歌を評す

打碎樓井軒二氏にこたふ

明治二十六年文學會の風潮

三輪貞信  
佐々木信綱

山本彦兵衛  
博文館  
經濟雜誌社

笹本 恕 日論 六・一

難波津淺香 精華 二四

小中村義象 花園 三六

橘 道守 明歌 五二

明歌 五二

佐々木信綱 文海 一〇

佐々木信綱 文海 一〇

本居 豐穎 文海 一〇

井上 通泰 柵草 五二

鐵 幹 柵草 五二

槐 園 柵草 五二

小 洋 園 柵草 五二

西 蹊 子 早稻 五五

あさ香社詠草

科學と詩歌

二月

新撰明治歌集第一編

贈正四位平田篤胤傳

兼好法師傳考(二)

歌範文範

歌文の標的

男女の歌文

歌話

古歌を讀むに就ての注意

新古今集春歌講義(三)

後撰集講義(十)

高山彦九郎先生の九州にての歌

古今集序文講義

柿本人麻呂

歌學枝拆

鐵幹に答ふ

歌評を讀みて思ふ事ども

桂園叢話(第二十四)

二六新報 一二  
國民新聞 二二

三汲漁郎  
佐々木信綱 博文館

難波津淺吉 精華 二五  
笹本 恕 日論 六・二

林 麿臣 歌文 一  
林 麿臣 歌文 一

林 麿臣 歌文 一  
菅沼 斐雄 國文 一六

鈴木重嶺 花園 三七  
佐々木信綱 文海 一一

佐々木信綱 文海 一一  
小中村義象 文海 一一

本居 豐穎 文海 一一  
大町 芳衛 明叢 六三

鈴木弘恭 女雜 三六八  
落 葉 柵草 五三

蒼 人 柵草 五三  
龜田 俊夫 柵草 五三

日本詩の連聲

「早稻田文學」の歌

雜詠數首

祝部菟道彦ぬしの歌を評す

三月

くちなしの花 三

群書類從第十輯

初學必携和歌獨まなび

贈正四位平田篤胤の傳(前承)

歌の早學び

竹柏園歌會詠草

仙覺律師が萬葉鈔の跋を讀みて感あり

歌むすび

近來出版長歌集に就て

新古今集春歌講義(四)

古今集序文講義(十)

後撰集講義(十一)

落合直澄氏

足代弘訓翁傳(前承)

六〇

石橋忍月 早稻 五八

埋 木 二六新報 一五

雲 峯子 國民新聞 六

海上胤平 日本 二五

小出 祭 柵 蔭 社

東遷 大人 別所 平七

難波津淺吉 精華 二七

久保田蓬庵 小文 二・五

日論 六・三

大高常雄 國光 七・一〇

鈴木重嶺 花園 三八

櫻井義令 明歌 五四

佐々木信綱 文海 一一

本居 豐穎 文海 一一

佐々木信綱 文海 一一

小中村清短 文海 一一

佐々木信綱 文海 一一

歌會當座式

柵草紙第五十三號歌評

桂園叢話(第廿五)

兼好法師

連聲につきて

本年御歌會始御題詠進歌評

歌評

去月廿七日「日本」紙上浪華津會の歌を評す

高調歌

高調歌

高調歌

四月

類題和歌鴨川集 三

新百人一首

類題和歌鯉玉集

歌談

歌論

歌むすび

歌論

鈴木弘恭 女雜

落葉・鐵幹・槐園 柵草

井上通泰 柵草

杉江彦太郎 明叢

文頓生 早稻

栗の屋主人 日

高島茂秀 日

海上胤平 日

海上胤平 日

海上胤平 日

海上胤平 日

長澤伴雄 交盛館

橋千蔭 常徳院殿

加納諸平 交盛館

本居豊穎 皇典

賀古保五郎 裏錦

鈴木重嶺 花園

井上文雄 文海

三七二

五四

五四

六四

五九

一

三

四

七

八

九

新古今集(夏歌)講義

兼好法師

井上通泰歌集

桂園叢話(第廿六)

桂園叢話(第廿七)

長歌模範

題知らず

二世正太夫に誨ゆ

拙詠の評について

本居豊穎の歌を評す

和歌を論ず

其又答について

和歌を論ず(二)

栗園主人の誤見を正す

和歌を論ず(三)

歌評(題知らず)

歌評

讀(日本)文苑

和歌を論ず(四)

興風會席上談話

佐々木信綱 文海

杉江彦太郎 明叢

松岡國男 柵草

井上通泰 柵草

井上通泰 柵草

橋守部 明歌

二世正太夫 讀賣新聞

正太夫 讀賣新聞

關根正直 讀賣新聞

栗園主人 日 本

巖峯生 自由新聞

正太夫 讀賣新聞

巖峯生 自由新聞

禿山生 日 本

巖峯生 自由新聞

二世正太夫 讀賣新聞

二世正太夫 讀賣新聞

神風連臣 東京日日

巖峯生 自由新聞

高崎正風 二六新報

二〇

一〇

一〇

一〇

一〇

一〇

一〇

一〇

一〇

一〇

一〇

一一

一一

一一

一一

一一

一一

一一

一一



和歌を論ず(五)

五月

歌學案内 附詞の解

冠辭考 二

松屋集

群書類從第九輯

歌の話

歌論(續)

大田垣蓮月

新古今集(秋歌)講義

紀貫之傳

花の一もと(其一)

一節

八田知紀が調につきていへる

近時の和歌論

はなかがみ(募集短歌)

和歌を論ず(六)

和歌を論ず(七)

歌範評論問答

和歌を論ず(八)

巖 峯 生 自由新聞 二八

三田村熊之助 鹿田書店

賀茂 眞淵 交 盛 館

小林 大茂 吉川 半七 經濟雜誌社

高崎 正風 女鑑 六二

賀古保吾郎 妻錦 一九

鹽井 雨江 女鑑 六三

佐々木信綱 文海 二

中 邨 秋香 國光 八・三

柵 草 五五

早 稻 五六 六四

海上胤平選 日 本 二

巖 峯 生 自由新聞 二

海上胤平 日 本 四

巖 峯 生 自由新聞 五

巖 峯 生 自由新聞 八

「三月九日の二六新聞紙上阪正臣氏談長歌並短歌」評  
和歌を論ず(九)

亡國の音

長歌論

和歌を論ず(十)

亡國の音(二)

長歌論(つゞき)

和歌を論ず(十一)

亡國の音(三)

海上胤平君に與ふる書

亡國の音(四)

長歌の格

案山子廻舍諸、社中詠草

亡國の音(五)

海上胤平君に寄す

亡國の音(六)

海上大人に答ふ

亡國の音(七)

渡邊雄治氏に與ふ

亡國の音(八)

「ほろく」の歌につきて  
新聞紙上の歌論及歌

六二

海上胤平 日 本 一〇

巖 峯 生 自由新聞 一〇

鐵 幹 二六新報 一〇

春日敬三 日 本 一一

巖 峯 生 自由新聞 一一

鐵 幹 二六新報 一一

春日敬三 日 本 一二

巖 峯 生 自由新聞 一二

鐵 幹 二六新報 一二

萩原尙盛 日 本 一三

鐵 幹 二六新報 一三

春日敬三 東京日日 一三

案山子廻舍 讀賣新聞 一三

鐵 幹 二六新報 一五

三宅 光彦 日 本 一六

鐵 幹 二六新報 一六

渡邊雄治 日 本 一七

鐵 幹 二六新報 一七

與謝野 寬 日 本 一八

鐵 幹 二六新報 一八

埋 木 二六新報 二二

和歌を論ず(完)  
春日敬三ぬしは眼目あるか理解  
力あるか  
海上氏の評を辨す

六月

和歌作法指南  
稜威言別 一〇

笹村良昌  
橋守部

顕才新誌社  
椎本吟社

巖峯生 自由新聞 二四  
敷島生 東京日日 二五  
大口鯛二日 本 三〇

俊頼卿のうた  
征夷大將軍宮事跡考

檜の舍主人 女鑑  
菅政友 八洲 九六

七月

歌學作法指南

川上文彦

交盛館

歌論(つゞき)

俊頼卿のうた(續)

賀古保吾郎 裏錦  
檜の舍主人 女鑑 六五

歌談

檜の舍主人 女鑑 六六

てにをは不調歌辨明集解

武谷等 文海 二〇

近時の和歌論

六合記者 六合 一六三

四十番歌合

佐々木信綱 文海 二〇

俊頼卿の見識

檜の舍主人 女鑑 六七

新古今集秋歌講義

落葉 文海 二〇

藤原俊成傳

本居豊穎 文海 二〇

柵草紙第五十六號歌評

福田琴月 柵草 五七

歌談

文海 二〇

蓮月尼の逸事

中邨秋香 柵草 五七

てにをは不調歌辨明集解(續)

武谷等 文海 二〇

花の一もと(其二)

村上忠順 明歌 五七

山上憶良を評す

大町秋劍 明叢 六八

笹粟

飛鳥井雅親 明歌 五七

桂園叢話(第二八)

井上通泰 柵草 五八

太田道灌花月百首

早稻 明歌 六六

花の一もと(其三)

中邨秋香 柵草 五八

歌會の波瀾界

あさ香社詠草

はなかゞみ難歌批評

大口氏の歌をよみて

熊田信平に答ふ

批評はなかゞみ難歌批評

文學漫言(韵文と散文)

句の獨立と云ふに付きて

大口鯛二氏の答に答ふ

文學漫言(和歌)

再熊田信平氏に答ふ

文學漫言(和歌と俳句上)

八月

類題和歌怜野集

明治百家風月集

進講筆記

「日本」募集和歌評

詩歌の格調

征戰文學

薪古今集多歌講義

歌詩の區別並勝劣論

鈴酒舎主人 日 本 二六新報 六

熊田信平 二六新報 一九

大口鯛二 二六新報 二〇

つりがねのや 日 本 二二

獺祭書店主 日 本 二三

日景忠太 日 本 二四

熊田信平 二六新報 二五

獺祭書店主 日 本 二六

大口鯛二 二六新報 二七

獺祭書店主 日 本 二八

清原雄風 交盛館

増山守正

高崎正風 しき 四四

遠山英一 しき 四四

國友記者 國友 一五・二三

國友記者 國友 一五・二三

佐々木信綱 文海 二・五

横井千秋 明歌 五九

歌談(續)

花の一もと(其四)

飯田年平翁の逸事

落葉君の歌評をよみて

上田秋成

文學漫言(和歌と俳句下)

明治廿七年前半期史「詩歌」

字餘りの和歌俳句

九月

組立自在歌學作法新書

西行法師

和歌は女徳を敗るものゝ一つなり云ふ説を聞きて所感を記す

詠歌教授法

進講筆記(つゞき)

詩歌の區別並勝劣論

詠歌教授法(續)

昨今の詩歌界

六四

本居豊穎 文海 二・五

中邨秋香 柵草 五九

榎酒舎主人 柵草 五九

文苑 柵草 五九

福笑門 早稻 七〇

獺祭書店主 日 本 二〇

國民新聞

獺祭書店主 日 本 二〇

平野長興 大成堂

伊藤洋二郎 大成堂

眞野玉蓮 其中堂

泉館家理 女鑑 七〇

目黒和三郎 女鑑 七〇

高崎正風 しき 四五

横井千秋 明歌 六〇

目黒和三郎 女鑑 七一

早稻 七一

十月

和歌俳諧作法指南

征清歌集

翠雲深處主人

佐々木信綱

松榮堂

博文館

進講筆記(つゞき)

桂園派の歌論を論じ併せて淺瀨の波第二編を評す

富本重任君

松風會第六例會の記

詩歌の區別並勝劣論

歌話

山上憶良

高崎正風

本吉武之

金子雄太郎

皎潔

横井千秋

黒川眞道

瑞廼舍主人

しき

六合

少庫

少庫

国歌

國文

早稻

四六

一六六

一一・三

一一・三

六一

二四

七四

二六新報滿一年の祝日にあたりいさゝか希望をのぶ

十一月

隨緣集 二

和歌 捷徑 百人一首講義

契沖阿闍梨

麓の道

落合直文

二六新報

二六

伊達千廣

松廼家貞堅

字田川文海

香川景樹

阪上半七

文陽堂

博文館

小松甲子太郎

進講筆記(つゞき)

高崎正風

しき

四七

今様の歌につきて思へる事ども

詩をつくりて歌はよめ

詩歌の區別並勝劣論

山上憶良

物集 高見

坂正臣

横井千秋

瑞廼舍主人

一・一

一・一

六二

七六

枯柳 秋風(短歌)

十二月

武田信玄百首

松屋集

清少納言

蓼生園歌集 三

鐵幹 二

六・二二

太田百祥

小林大茂

綠亭主人

中村良顯

國史臺

民友社

高山堂

新體歌の製作

山上憶良

桂園派の和歌を論じ併せて淺瀨の波第二編を評す

和歌の現況

詩歌の區別並勝劣論

業平朝臣

和田尙古生

菊池太三郎

本吉武之

國學記者

横井千秋

天知

國學

國學

六合

國院

明歌

文界

一

一六八

一・二

一・二

六三

二四

月不詳

わしの山集

山縣夫人

佐々木古信

倭文能屋集

いしむのみづ

古稀頌言

松のちとせ

千代の松風

かしこの雪

千とせのかけ

阿波百人一首

宮城百人一首

上木清成

石川光子

永井介堂

徳川準子

熊谷直清

佐々木古信

松平頼聰

中川清流

日野資治

松蔭舍

一・五 上田英夫兵庫縣大路村に生る。

一・一八 御歌會始。御題梅花先春。長尾尙久預選に入る。

三・一六 在京の歌人を以て成る興風會の歌會屋阿茶寮に開かる。同四月十八日には第二回、以下數年間に亘り毎月會合ありし如し。

三・一八 村野(田中)次郎東京下多摩村に生る。

三・二五 より四月十五日にかけて新聞日本募集短歌の歌數四千八百四十八首人員九百九十四名(選者小出榮その

府縣別次の如し 東京(二四八) 長野(八一) 千葉(四八) (神奈川(三三) 群馬(三三) 福島(三一) 宮城(二九) 新潟(二八) 岐阜(二五) 山口(二五) 青森(二五) 愛知(二五) 大分(二四) 埼玉(二二) 茨城(二二) 島根(二二) 秋田(一九) 岡山(一八) 鹿児島(一六) 大阪(一五) 静岡(一五) 京都(一四) 三重(一三) 山

梨(一二) 長崎(一二) 山形(一二) 愛媛(一二) 福岡

(一一) 佐賀(一〇) 兵庫(九) 熊本(九) 福井(九)

北海道(九) 富山(八) 岩手(六) 香川(六) 栃木(六)

滋賀(五) 廣島(五) 高知(五) 鳥取(五) 宮崎(三)

石川(三) 和歌山(三) 徳島(二) 奈良(二) 計九九四

酒井廣治福井縣今立に生る。

五・一八 園美蔭歿。

五・二一 二六新聞社告和歌募集 ▲選者 分ちて三選とし左

の通り依頼せり(一) 海上胤平翁 (二) 落合直文

小中村義象二君互選 (三) 桃園 鐵幹二氏互選 ▲

兼題 夏の部に屬するもの及び雜の部に屬するもの

▲浮華絨巧自然の情景を離れたるものは採らず ▲

短歌を限り三句切り三句の獨立せざるものを採らず

六・一〇 松尾多勢子歿。

七・三 御巫清直歿(八三) 御巫清直詠草 百二十首詠 東

京大家十四家集評論再辨

九・一〇 橋本德壽生る。

一〇・一〇 久米幹文歿(六七) 古今集百人一首

一〇・一九 岡山巖廣島市に生る。

一一・二一 落合直亮歿(六七)

不詳 由利貞三秋田縣に生る。

不詳 田中美喜子歿(六一) 田中美喜子詠草

明治二十八年（一八九五）

一月

嵯峨野の花

津崎村岡  
津崎彦二

長歌振起の事

橋道守 明歌 六四

詠歌法

佐々木信綱 少世 一

明治の文學界（現時の歌人）

Y K 生 太陽 一

連歌小史（一）

佐々政一 帝文 一

柿本朝臣人麿事蹟考

岡田正美 帝文 一

學祖六大人

和田信二郎 國學 二

山上憶良（前承）

菊池大三郎 國學 二

或人に答ふ

鈴木重嶺 女鑑 七八

今様の歌につきてまた思へる事  
（ごも）

物集高見 國院 一・三

二月

百人一首註解

石原和三郎 松榮堂

詠歌法

佐々木信綱 少世 一・三

連歌小史（二）

柿本朝臣人麿事蹟考

佐々政一 帝文 一・二

貫之朝臣の事蹟

岡田正美 帝文 一・二

桂園派の歌論を論じ併せて淺瀨の波第二編を評す

本居清造 國學 一七〇

わが友

本吉武之 六合 一三〇

詠歌法

金子薫園 少庫 一三〇

歌よむ人の心得

佐々木信綱 少世 一・四

長篇合

橋道守 明歌 六五

新體詩就にいて

橋本直香 明歌 六五

明治の文學界補遺（歌人）

格文堂主人 文界 二六

三月

古謡集

栗田寛 皇典 一四六

柿本朝臣人麿事蹟考

岡田正美 帝文 一・三

桂園派の歌論を論じ併せて淺瀨の波第二編を評す

本吉武之 六合 一七二

古謡集（前承）

栗田寛 皇典 一四七

學弟與謝野鐵幹に與ふる文

落合直文 二六新報 一七

三句切七首

與謝野寛 日 本 一九

四月

香川景樹論

此木生 精神 五五

詠歌法

歌かたり

連歌小史(三)

人麿の和歌

紀貫之朝臣

詠歌界の新現象

香川景樹論(續)

淺瀬の波の批評に就いて

香川景樹論(續)

與謝野寛ぬしを送る

五月

伊達歴世歌集

山したみづ

詠歌法

萬葉集の晒の守の致

紀貫之朝臣(前承)

連歌小史(四)

香川景樹の歌論

長利氏ノ問ニ答フ

案山子廼舍諸社中詠草

六月

内外詠史歌集 二

長歌會

短歌と俳句

詠歌法

紀貫之朝臣(前承)

案山子廼舍諸社中詠草

案山子廼舍諸社中詠草

案山子廼舍諸社中詠草

案山子廼舍諸社中詠草

案山子廼舍諸社中詠草

七月

皇朝詠史明治百人一首

擬律小長歌

歌かたり(二)

和歌の義徴

詠歌法

紀貫之朝臣(前承)

案山子廼舍 讀賣新聞 二〇

税所敦子 松井總兵衛

大和田建樹 太陽 一・六

記 者 帝文 一・六

佐々木信綱 少世 一・二

宮澤義喜 國學 七

案山子廼舍 讀賣新聞 一〇

案山子廼舍 讀賣新聞 一七

案山子廼舍 讀賣新聞 二四

富田良穗

橋 道守 明歌 七〇

中村秋香 太陽 一・七

記 者 帝文 一・七

佐々木信綱 少世 一・四

宮澤義喜 國學 八

坂 正臣 二六新報 八

此 木 生 精神 一七二 五七

井上通泰 六合 一七二

此 木 生 精神 五六

尙 古 生 國學 五

宮澤義喜 國學 五

高津蹴三郎 帝文 一・四

佐々政一 帝文 一・四

中 邨 秋香 太陽 一・四

佐々木信綱 少世 一・七

大和田建樹 老鶴 圃

仙台文庫會 作並清亮

佐々木信綱 少世 一・九

木村正辭 八洲 一〇七

宮澤義喜 國學 六

佐々政一 帝文 一・五

本吉武之 六合 一七三

橋 道守 明歌 六八

案山子廼舍諸社中詠草  
案山子廼舍諸社中詠草  
景樹直好二翁の肖像

八月

討清歌集

詠歌の教授法  
和歌の題目  
歌會私式  
神代の和歌

案山子廼舍諸社中詠草  
案山子廼舍諸社中詠草

九月

武家新撰仙新撰武家百人一首

古代の歌謡  
新古今和歌集卷第三講義  
村田春海が本居宣長大人におく  
る文  
本居宣長大人傳

案山子廼舍 讀賣新聞 一  
案山子廼舍 讀賣新聞 一四  
井上通恭 讀賣新聞 二九

大淵 淺 駸々堂

目黒和三郎 皇典 一三二  
帝文記者 帝文 一・八  
なにがし 女鑑 九二  
寛 裳 文界 三二

案山子廼舍 讀賣新聞 一二  
案山子廼舍 讀賣新聞 一九

近衛權中將 作並 清亮  
伊達 吉村

塩井雨江 女鑑 九三  
鈴木弘恭 高國 一  
小杉樞郎 高國 一  
川口常文 高國 一

連歌小史(五) 佐々政一 帝文 一・九

古代の歌謡の形態 塩井雨江 女鑑 九四

歌のひらき 橋 道守 明歌 七二

聽雨居雜誌 尙 綱 文界 三三

百人一首講義(一) 清風樓主人 花園 五五

第五六號(廿八年十月卅日) 第六四號(廿九年六月十日)

第五七號(全 十一月十日) 第六五號(全 七月十日)

第五八號(全 十二月十日) 第六六號(全 八月十日)

第五九號(廿九年一月十日) 第六七號(全 九月十日)

第六〇號(全 二月十日) 第六八號(全 十月十日)

第六一號(全 三月十日) 第六九號(全 十一月十日)

第六二號(全 四月十日) 第七〇號(全 十二月十日)

第六三號(全 五月十日) (完)

案山子廼舍諸社中詠草 案山子廼舍 讀賣新聞 一  
大口鯛二氏にをしふ 矢地馬太郎 日 本 二〇  
大口鯛二氏にをしふ(前承) 矢地馬太郎 日 本 二二  
大口鯛二氏にをしふ(前承) 矢地馬太郎 日 本 二三  
矢地馬太郎君に謝す 坂 正臣 日 本 二四  
海上黨の暴論又出でたり 大口鯛二 日 本 二五

十月

詠歌法 佐々木信綱 少世 一・一九

古代の歌謡の形態 塩井雨江 女鑑 九五



内遠翁四十年祭追悼歌

悠々庵 太陽 一・一一

雪臣和歌の風を論ず(藝林拾葉)小宮山南梁 太陽 一・一一

和歌の徳 塩井ふく子 女鑑 九七

古代の歌謡の形態 塩井雨江 女鑑 九八

連歌小史(六) 佐々政一 帝文 一・一一

歌のはなし(續) 間島冬道 名家 三

歌話 海上胤平 名家 三

歌話 橘道守 明歌 七四

西行法師(一) 井口基二 文界 三五

十二月

皇風集 諏訪忠元

詠歌法 佐々木信綱 少世 一・二三

韻文に就て 島崎藤村 太陽 一・一二

百人一首につきて 小青庵主人 女鑑 九九

柿本朝臣人麿事蹟考 岡田正美 帝文 一・一二

連歌小史(七) 佐々政一 帝文 一・一二

水屋集評 寛裳子 帝文 一・一二

水屋集 久米幹文 高國 三

沖小島 閻宮永好 八洲 一・一二

詠歌法 佐々木信綱 少世 一・二〇

歌のはなし 間島冬道 名家 二

古代の歌謡の形態 塩井雨江 女鑑 九六

歌話 橘道守 明歌 七三

新古今和歌集卷第三講義 鈴木弘恭 高國 二

和泉眞國が村田春海に贈る書 小杉楳邨 高國 二

本居宣長大人傳(前承) 川口常文 高國 二

小中村清矩大人傳 落合直文 高國 二

矢地氏にかはりて坂氏に問ふ 熊田信平 日 本 二

坂氏に代りて熊田信平氏に答ふ 大口鯛二 日 本 四

坂氏に代りて熊田信平氏に答ふ(前承) 大口鯛二 日 本 六

詩人歌人の喧嘩 白眼生 日 本 六

白眼生さいふ君に一こ申す 白眼生 日 本 七

諸大家近作評 中野文子 日 本 七

諸大家近作評(承前) 梅の舍主人 日 本 二二

梅の舍大人の歌評につきて 梅の舍主人 日 本 二四

梅の舍主人に問ふ 鹿角生 日 本 二五

坂正臣 日 本 二五

十一月

古今和歌集正義 香川景樹 積善館

本居宣長大人傳(前承)

小中村清矩先生傳

詠歌法

修身百首評釋

歌のはなし(續)

歌話(續)

和歌寄稿の人々に告るこゝは

短歌國醉の辯

西行法師(二)

棒三味(歌人)

棒三味(歌辨海上派)

棒三味(歌の評)

破邪歌評

月不詳

清葉集 二

百花草紙第二編

ますのみかけ

水屋集

喜久廻志豆久

川口常文 高國 三

中邨秋文 高國 三

佐々木信綱 少世 一・二四

杉谷正隆 女鑑 一〇〇

間島冬道 名家 四

海上胤平 名家 四

松羅由人 文庫 一・六

女學雜記者 女雜 四一七

井口基二 文界 三六

地風 升日 本 八

子規 子日 本 一六

地風 升日 本 一八

熊田信平 日 本 二四

前田利保

徳川鏡子

久米幹文

土屋種秋

さみだれ集

瓊戈集

秋冬の加吉葉 二

會津根集

古今和歌集講義

一・五 明治の文學界 太陽創刊號

○歌人

多賀鳥我

芳賀眞咲

江幡通理

渡邊雄治

本居豊穎

(博文館)

大八洲學會

高崎正風 黒川眞頼 税所敦子 黒田清綱 宇田瀧

小出榮 海上胤平 松浦詮 鈴木重嶺 福羽美靜

松の門みさ子 坂正臣 小杉楓邨 中島歌子 植松

有經 江刺恒久 大口綱二 鶴久子 橋道守 會田

安昌 上杉義順 千葉胤昌 本居豊穎 内藤左守

小中村清矩 飯田武郷 木村正辭 前田利邨 水野

忠敬 増山雪子 諏訪忠元 近衛忠熙 加藤安彦

田中頼庸 東久世通禧 佐々木高行 久我建通 谷

勤 小池道子 鎌田正天 林鑿臣 郷純造 池袋清

風 井上通泰 島山健 佐々木信綱 猪熊夏樹 三

浦千春 水原みさ子 千家尊福 加茂水穂 徳大寺

實則 大谷光章 近藤芳介 西岡訓棟 桐廼合かつ

ら子 竹尾雅子 西升子 河谷子 安藤菊子 冷泉

爲紀 毛利元徳 竹尾光昭 増山正治 田所千秋

勝安房 三田篠光

此の中高崎小出植松大口會田千葉谷小池鎌田等の諸

氏は御歌所員たり。鈴木重嶺氏は翠園の名にて歌會を起し、阪正臣氏は茅園、江刺恒久氏は華麴舎、鶴

久子氏は鶴園、諏訪忠元氏は年麴舎、佐々木信綱氏は竹相園、水原みさ子氏は花雨吟社、桐麴舎かつら子氏は桐麴舎の名にてそれぞれ歌會を組織したり。

其他一派を爲して歌學の門戸を張るもの頗る多し。

御歌會、御題寄海祝(休)

一・二二 會田安昌歿(六四)

二・五 補遺明治の文學界 太陽(一ノ二)

○歌人

松波資之 千葉胤明 土方久元 正親町實徳 鍋島

直大 杉孫七郎 香川景三 三條西公允 大原重朝

北小路隨光 丸屹作樂 丸山正彦 町尻量衡 加郭

巖夫 梅溪通善 井關美清 尾崎突夫 尾崎昌雄

慈光寺有仲 金子有郷 田中尙芳 井上頼閑 園美

蔭 諏訪晴子 佐々豊水 落合直文 小中村義象

美濃郭貞亮 綾小路有主 井手今滋 三宅龍子 國

友みさ子 小山多乎里

其他新體詩の部に與謝野鐵幹、俳句界に正岡子等を擧ぐ。

四・

與謝野寛 二六新報社を辭し韓國政府學郭省乙未義塾の教師として赴任、乙未義塾の總長は鮎貝房之進

(註 鮎貝氏は京城に健在)

六・一

土田耕平信州諏訪町に生る。

六・二五 御歌所長高崎正風桐術院顧問官に任ぜらる。

七・ 岡本光海(京都桐蔭社中)歿。

八・ 文庫(一ノ二)に太田貞一(水穂)の歌出づ。春海邊。

鶴のある磯の松原ほのほのさ海ばらかけてかすむ春かな。

一〇・二 有村蓮壽院歿(八八)

一・二二 小中村清矩歿(七四) 小中村清矩家集

一・二・一 松田常憲筑前國に生る。

叢書目録 一〇

續日本歌學全書 第四編

桂園一枝 香川 景樹

桂園一枝拾遺 香川 景樹

新學異見 香川 景樹

古今集正義總論 香川 景樹

桂園遺文 香川 景樹

中空日記 香川 景樹

まゆた青葉 香川 景樹

六十四番歌辭 香川景樹列

うす水 香川景樹列

大ゆさ 中川 自休

歌學提要 内山 眞弓

明治二十九年 (一八九六)

一月

歌のしるべ(一)

舊詩人の猛省を促す

詩と散文

歌合故實

新古今和歌集卷第三講義

眞國が春海に贈る書(續)

歌のしるべ(二)

歌話(續)

歌のはなし(完)

歌話

大口綱二氏の歌を見て腹ふくる  
いまに一言いはむ

案山子廼舍諸社中詠草

二月

士氣慷慨詩歌集

和歌麓の栞

佐々木信綱

記者 太陽

大町桂月 太陽

下田義天類 女鑑

鈴木弘恭 高國

小杉樞郎 高國

佐々木信綱 少世

海上胤平 名家

間島冬道 名家

橋道守 明歌

海上胤平 日本

案山子廼舍 讀賣新聞

藍外堂

衝冠居士

岡吉胤

明治の歌

新古今和歌集卷第三講義

鹿持雅澄翁

小澤蘆庵傳

歌のしるべ(三)

額田女子の御歌

西行法師(三)

和歌界

歌人としての大江元就

三月

六歌仙

歌のしるべ(四)

新しき歌語

つぼすみれ(短歌)

西行法師(四)

御歌所

和歌と新用語

明治兩歌仙

加部巖夫

嵩山房

鈴木弘恭 高國

井野邊茂雄 高國

中村秋香 高國

佐々木信綱 少世

永石徳文 女鑑

井口基二 文界

早稻

停春 國民新聞

二三

芳賀矢一 帝文

佐々木信綱 少世

記者 國院

佐々木信綱 めさ

井口基二 文界

早稻

早稻

蒸し氣車の舍人

日本

二

珍篇臍の種

橋 洩尻 日本 二一

案山子廼舎社中詠草評

池袋清風 女雜

四二二

四月

千代の光

中村良顯

四二二號(廿九年六月廿五日) 四四〇號(三十年四月廿五日)

櫛齋集 二一

木村正辭

四二三號(七月廿五日) 四四一號(五月十日)

連歌小史(續)

佐々政一 帝文 二・四

萬葉集の反歌の説

木村正辭 八洲 一一八

磯うつ波(短歌)

佐々木信綱 めさ 四

墨つぼ(短歌)

萩舎主人 めさ 四

新古今和歌集卷第三講義

鈴木弘恭 高國 六

歌人としての徳川家光(上)

停 春 國民新聞 五

歌人としての徳川家光(下)

停 春 國民新聞 一九

花ふぶき

あさ香社 日本 二二三

五月

荷田春滿羽倉駿河守に與る書

平出鏗二郎 帝文 二・五

歌のしるべ(五)

佐々木信綱 少世 二・一〇

版本の萬葉集

木村正辭 國院 二・七

歌話

橘 道守 明歌 八〇

歌林要材

橘 道守 明歌 八〇

瀧のひびき(短歌)

佐々木信綱 めさ

五

軒のしのぶ

落合直文 めさ

五

歌評

松岡國男 めさ

五

歌の説

中根 彪 早稻

九

猫ぢやらし

くちあみ 日本

一二

評論の評論

停 春 國民新聞

一三

無絃琴

龜皇上人 日本

一三

中島歌子

醉痴 來 讀賣新聞

二八

中島歌子(續)

醉痴 來 讀賣新聞

二九

歌のしるべ(六)

佐々木信綱 少世

二・一一

蓮月尼の和歌(一)

藤本藤陰 太陽

二・一二

和歌の素養

記 者 帝文

二・六

六月

版本の萬葉集  
權馬樂名義考  
歌かたり

新古今和歌集卷第三講義

本居宣長大人傳(前承)

歌のしるべ(七)

連月尼の和歌(二)

歌の葉

歌のはなし

夕つゞ(短歌)

新体詩に就て

七月

東西南北

古今集夏歌(獨譯)

歌のしるべ(八)

和歌教授法

歌の葉

家集辨

鐵幹の「東西南北」

歌の葉

木村正辭 八洲

山井景建 八洲

黒田清綱 高國

鈴木弘恭 高國

川口常文 高國

佐々木信綱 少世

藤本藤陰 太陽

塩井正男 女鑑

梅村宣雄 筆花

佐々木信綱 めざ

幸田露伴 文界

與謝野 寛

明治書院

ランゲ めざ

佐々木信綱 少世

獨來生 女鑑

塩井雨江 女鑑

村田春海 帝文

記者 國院

塩井雨江 女鑑

一一〇

一一〇

七

七

七

一一二

一一三

一一一

一一〇

四二

六

一一三

一一二

一一二

二・七

二・九

一一三

和歌教授法(つゞき)  
歌詞の變化を論じその省略法に及ぶ

新古今和歌集卷第三講義

本居宣長大人傳(前承)

深山木(短歌)

ねぶの花

歌評

歌評を謝す

阪正臣君に忠告す

國風會詠草

紅塵萬丈

國風會詠草

獨來生 女鑑

金子元臣 筆花

鈴木弘恭 高國

川口常文 高國

佐々木信綱 めざ

くちあみ 日

海上嵐平 日

竹の里人 日

阪正臣 日

加治有恒 日

白雲 日

國民新聞

八月

歌のしるべ(九)

文學(和歌)

東西南北を評す

歌のしるべ(十)

今の世の歌並に擬古體普通體

文學(和歌)

梅村宣雄君の歌のはなしについで

一一三

一一一

八

八

七

二〇

二〇

二二

二二

二六

二九

三〇

二五

二四

二八

一六

一七

二五

一一二

香川景樹の日記

鳥崎藤村 文界 四四

國風會詠草

國民新聞

國風會詠草

國民新聞

ぐれんどう(一)

鐵 幹 讀寶新聞 六

ぐれんどう(二)

鐵 幹 讀寶新聞 七

ぐれんどう(三)

鐵 幹 讀寶新聞 八

九月

五十番歌合

遠山英一

西行法師

眞野玉蓮

其中堂

萬葉集に於ける宗教

桂濱月下漁郎

明歌 五・一〇

岩清水(短歌)

佐々木信綱

めさ 八

紀貫之(一)

塩井雨江

太陽 二・一八

文學(和歌)

越智處之助

日人 二・二六

和歌俳句及び俳諧に就きて

桂濱月下漁郎

帝文 二・九

現時の和歌壇

記 者

帝文 二・九

ぐれんどう

鐵 幹

大倭 一

「時報」佐々木信綱中村秋香

幸田露伴

新小 三

萬葉集卷十一二十三中軍載歌

木村正辭

國院 二・一一

鐵幹の「東西南北」

記 者

太陽 二・一九

七六

文學(和歌)

越智處之助 日人 二七

歌の衆

塩井雨江 女鑑 二一七

土佐日記と貫之(一)

塩井正男 女鑑 二一七

「東西南北」評

記 者 女鑑 四二七

歌 話

橋 道守 明歌 八四

氷の床(短歌)

佐々木信綱 めさ 九

古歌の係結につきて

香木園主人 早稻 一八

海人の刈藻

なにがし 早稻 一八

唐偏木

くちあみ 日本 七

十月

和歌俳諧作法指南

翠雲處主人 松榮堂

紀貫之(二)

塩井雨江 太陽 一・二〇

文學(和歌)

越智處之助 日人 二八

土佐日記と貫之(二)

塩井正男 女鑑 一一八

鏡王並鏡王女額田姫王の辯

飯田武郷 八洲 一二四

亂る乱すいでいざの辯

記 者 帝文 二・一〇

ぐれんどう

鐵 幹 大倭 三

文學(和歌)

越智處之助 日人 二九

土佐日記と貫之(三)

塩井正男 女鑑 一一九

先光主の論説に就て  
歌評  
をちかた人(短歌)  
和歌界

十一月

梅村宜雄 筆花 一二四  
横園のあるじ めざ 一〇  
佐々木信綱 めざ 一〇  
早稻 一九

帝國文學記者の謬見

蓮月尼の性行

文學(和歌)

小觀(鐵幹)

新古今和歌集講義(第一回)

第一二二號(廿九年十二月五日)

第一二三號(全 十二月廿日)

第一二四號(三十年 一月五日)

第一二五號(全 一月卅日)

記者 帝文 二〇・一一  
藤井藤陰 太陽 二〇・二三  
越智處之助 日人 三二

橘香生 新聲 一・五

塩井正男 女鑑 二二・二

二月廿日

二月廿七日

三月十六日

二〇・一〇

二〇・一〇

二〇・一〇

二〇・一〇

二〇・一〇

二〇・一〇

二〇・一〇

二〇・一〇

二〇・一〇

二〇・一〇

二〇・一〇

十二月

桂園遺聞 第一編  
井上通泰 渡邊宗十郎  
詩人西行 中 龍兒 民友社  
秋香詩歌集 堀内秋香 堀内宗之助

歌のしるべ(十二)  
萬葉集より古今集に至る言語の變遷  
佐々木信綱 少世 二〇・二三  
藤井乙男 太陽 二〇・二四  
藤井藤陰 太陽 二〇・二四

蓮月尼の性行(其二)

再び鷗外に答ふ 記 者 帝文 二〇・一二

一葉女史を悼む 橘香 新聲 一〇・一六

歌のしるべ(十二)

柿本人麻呂の歌 佐々木信綱 少世 二〇・二四

關の夜道 島山健 國院 三〇・二二

古歌に現はれたる日本上代の女子 北里 闌 めざ 一二  
桂 月 文界 四八

月不詳

觀雲亭家集 加藤雄吾  
利根の舍遺稿 青野賢佐  
隨意莊題詠全集 二 郷 純造  
慶音集 六條 定光  
めぐみの露 六條 定光

因幡人の歌 進藤泰世 筆花 一一五  
新古今和歌集卷第三講義 鈴木弘恭 高國 八  
觚 歸休庵 めざ 一一  
野づかさ 佐々木信綱 めざ 一一  
蓮月尼 宮島春齋 早稻 一一  
海石榴舍瑠談 讀賣新聞 一一



菊廻屋七十賀集

江刺 清臣

松の落ち葉

北原阿智之助

廉堂遺稿  
幡野刈艸

旗野 古樹

旗野 蓑織

宗觀院追遠集

大久保誠一郎

和歌甲斐嶺集

丸山道太郎

伊勢名所和歌集 二

松田 久敬

川梨名所歌集

田澤八十作

萬葉私刪 二

森田 義郎

一・一八 御歌會始。御題寄山祝。大口鯛二 小池道子預選に入る。

二・一六 岡野直七郎岡山縣西山村に生る。

二・二九 下澤保躬歿(五九)

三・一 寶田通文歿(八〇)

六・一四 飯田守年歿(八二)

八・一五 梶園社中の大歌合、しきしま(第六八號)。遠山英一氏催主となり梶園翁の人選を受け五十番歌合を催す

其の人名次の如し 須川信行 山添直治(以上京都) 渡邊俊明(美濃) 竹田辰正(名古屋) 小貝諸文 貝

谷政道 岡山高齒(以上熱田) 船田高好(横須賀)

吉堀弘賢(上總) 遠山英一(東京)

樋口一葉歿(二五)

一一・二三 上田萬年 落合直文 小中村義象等の發起にて國文

一一・二九

學者懇親會を上野松源樓に催せり。黒川眞頼 木村正辭 本居豊頼 小杉楓郎 鈴木重嶺等數百餘人會合。

月日不詳 横山重長野縣片丘村に生る。

同 戸澤正實歿(六五) 戸澤正實公詠艸

叢書目錄 一一

續日本歌學全書 第五編

隨所師說

かるかや集

景恒翁歌集

須磨日記

古今正義總論補註

古今正義總論補註論

古今正義總論補註論辨

古今正義序註遺考

浦のしほ貝初篇

桂の下枝

香川 景樹

松波 資之

高橋 古道

香川 景周

熊谷 直好

八田 知紀

熊谷 直好

熊谷 直好

熊谷 直好

佐々木信綱

# 明治三十年 (一八九七)

一月

天地玄黃

新體詩論

國歌八論評

大歌所附歌所

歌のしをり

明倫歌集略解(一)

和歌古今集

遠島御歌合

歌論

扶桑拾葉集をよみて

新年

末松青萍博士に質す

末松青萍博士に質す(承前)

末松青萍博士に質す(承前)

和歌を論じ兼て與謝野君に答ふ

(其一)

與謝野鐵幹

明治書院

井上哲次郎

帝文

三〇一

伴 蒿 蹊

帝文

三〇一

岡本 保孝

八洲

二二七

佐々木信綱

少世

三〇二

稻村 眞里

國院

三〇三

欲 東 翁

家庭

九四

木村 要

國誌

一一

神谷 保朗

國誌

一一

佐々木信綱

めざ

一一三

與謝野 寬 讀賣新聞

與謝野 寬 讀賣新聞

與謝野 寬 讀賣新聞

末松 謙澄 讀賣新聞

四

五

六

九

和歌を論じ兼て與謝野君に答ふ

(其二)

和歌を論じ兼て與謝野君に答ふ

(其三)

寬大の一種は滑稽なり

和歌を論じ兼て與謝野君に答ふ

(其四)

和歌を論じ兼て與謝野君に答ふ

(其五)

和歌を論じ兼て與謝野君に答ふ

(其六)

和歌を論じ兼て與謝野君に答ふ

(其七)

和歌を論じ兼て與謝野君に答ふ

(其八)

和歌を論じ兼て與謝野君に答ふ

(其九)

和歌を論じ兼て與謝野君に答ふ

(其十)

和歌を論じ兼て與謝野君に答ふ

(其十一)

和歌を論じ兼て與謝野君に答ふ

和歌を論じ兼て與謝野君に答ふ

末松 青萍 讀賣新聞 一〇

末松 青萍 讀賣新聞 一一

正太 夫 讀賣新聞 一一

末松 青萍 讀賣新聞 一四

末松 青萍 讀賣新聞 一五

末松 青萍 讀賣新聞 一七

末松 青萍 讀賣新聞 一八

末松 青萍 讀賣新聞 二一

末松 青萍 讀賣新聞 二二

末松 青萍 讀賣新聞 二三

末松 青萍 讀賣新聞 二六

末松 青萍 讀賣新聞 二八

末松 青萍 讀賣新聞 二九

末松 青萍 讀賣新聞 三一

二月

增補詠歌自在

增補蓮月歌集

佐々木信綱

牧野 一平

博文堂

觀文館

三

三

三

三

三月

「天地玄黄」を讀む

鈴屋翁詠草及縣居翁評

都麻萬考

萬葉集

明倫歌集略解(一)

末松博士の詩歌論

歌は片歌がもとにて奇數を正格とし施頭歌また長歌の偶數なるもの變格にて變格に諸體ある論上

女房三十六人歌合

和歌界の二派

和歌を論じ兼て與謝野君に答ふ(其十五)

和歌を論じ兼て與謝野君に答ふ(其十六)

和歌を論じ兼て與謝野君に答ふ(其十七)

和歌を論じ兼て與謝野君に答ふ(其十八)

和歌を論じ兼て與謝野君に答ふ(其十九)

和歌を論じ兼て與謝野君に答ふ(其二十)

和歌を論じ兼て與謝野君に答ふ(其廿一)

和歌を論じ兼て與謝野君に答ふ(其廿二)

和歌を論じ兼て與謝野君に答ふ(完)

橘香生 新聲 二・二

木村正辭 八洲 一二八

牧野一平 八洲 一二八

欲東翁 家庭 九五

稻村眞里 國院 三・四

記者 國院 三・四

近藤清石 國院 三・四

藤井行磨 女鑑 一二六

雜俎生 中新 一・一

末松青萍 讀賣新聞 三

末松青萍 讀賣新聞 四

末松青萍 讀賣新聞 七

末松青萍 讀賣新聞 八

末松青萍 讀賣新聞 一〇

末松青萍 讀賣新聞 一一

末松青萍 讀賣新聞 一三

末松青萍 讀賣新聞 一四

この花(詩集)

佐々木信綱

同文館

「天地玄黄」評

國歌衰微論

歌論二則

小觀(新詩界の機運)

東西南北と天地玄黄

天地玄黄を評す

堀秀成翁略譜

新體詩に就きて

新體詩歌論

ふくろ

第一四二號(卅年 十月五日) 第一四九號(卅一年一月廿日)

第一四三號(全 十月廿日) 第一五〇號(全 二月五日)

第一四四號(全 十一月五日) 第一五一號(全 二月廿日)

第一四五號(全 十一月廿日) 第一五二號(全 三月五日)

第一四六號(全 十二月五日) 第一五三號(全 三月廿日)

第一四七號(全 十二月廿日)

國誌

二

記者 反省 一二・二

時文記者 明評 六・四

橋香 新聲 二・三

桂月 少集 三・三

桂月 帝文 三・三

海上胤平 太陽 三・六

中村秋香 太陽 三・六

下田義天類 女鑑 一二九

答松永松齡君  
案山子廼舍諸社中詠草

末松青萍 讀賣新聞 九  
案山子廼舍 讀賣新聞 一五

契沖阿闍梨

大町桂月

大日本圖書株式會社

作詩意見(上)

大町桂月 新聲 二・四

武島羽衣氏の新體詩論

橘香生 新聲 二・四

詩歌に於ける古語及俗語

大町桂月 帝文 三・四

新年來の短歌壇

記者 帝文 三・四

青萍居士の歌論

幸田露伴 新小 二・五

答卿内春蔭氏

末松青萍 讀賣新聞 五

新體詩論を讀む(一)

犬骨生 日 本 五

答卿内春蔭氏(承前)

末松青萍 讀賣新聞 六

新體詩論を讀む(二)

犬骨生 日 本 六

答卿内春蔭氏(承前)

末松青萍 讀賣新聞 七

新體詩論を讀む(三)

犬骨生 日 本 七

答卿内春蔭氏(承前)

末松青萍 讀賣新聞 八

新體詩論を讀む(四)

犬骨生 日 本 八

答卿内春蔭氏(承前)

末松青萍 讀賣新聞 九

新體詩論を讀む(五)

犬骨生 日 本 九

答卿内春蔭氏(承前)  
新體詩論を讀む(六)

末松青萍 讀賣新聞 一〇  
犬骨生 日 本 一〇

答卿内春蔭氏(承前)

末松青萍 讀賣新聞 一一

新體詩論を讀む(七)

犬骨生 日 本 一一

答卿内春蔭氏(承前)

末松青萍 讀賣新聞 一二

答卿内春蔭氏(承前)

末松青萍 讀賣新聞 一三

第卿内春蔭氏(承前)

末松青萍 讀賣新聞 一四

答卿内春蔭氏(承前)

末松青萍 讀賣新聞 一七

五月

國歌新論

末松謙澄

哲學書院

歌の話

高崎正風

反省 一二・四

落花等

鐵幹

反省 一二・四

作詩意見(中)

大町桂月

新聲 二・五

詩歌に於ける古語及俗語

大町桂月

帝文 三・五

新古今和歌集講義(第九回)

塩井ふく子

女鑑 一三・二

代々の調べ

三鼎 澁軒

東經 三五・八七六

江戸初世の歌人戸田茂睡(上)

桂月

國友 二〇・三四八

明倫歌集略解(三)

稻村眞里

國院 三・七

歌は片歌がもとにて奇數を正格とし施頭また長歌の偶數なるもの變格にて變格に諸體ある論 中

近藤清石

國院 三・七

新古今和歌集講義(第十回) 塩井ふく子 女鑑 一三三  
折にふれたる 佐々木信綱 めさ 一七

松濤窟社中詠草評(其二) 池袋清風 國友二〇・三五四  
折にふれたる 佐々木信綱 めさ 一八

六月

二宮尊徳翁道歌集 二宮尊親 復興社  
作歌自在 宮澤春文 博文館  
柿園詠草拔萃傍註 加納諸平 松村亮

鶏肋集(一) 鐵 幹 讀賣新聞 七  
鶏肋集(二) 鐵 幹 讀賣新聞 九  
鶏肋集(三) 鐵 幹 讀賣新聞 一四  
鶏肋集(四) 鐵 幹 讀賣新聞 二一  
鶏肋集(五) 鐵 幹 讀賣新聞 二三

歌の話 高崎正風 反省 一一・五  
作詩意見(下) 大町桂月 新聲 二・六

桂月先生に呈す 山田美妙 國民新聞 二一  
新調和歌のうら風 鐵 幹 讀賣新聞 二一

七月

新古今和歌集講義(第十一回) 塩井ふく子 女鑑 一三四  
佛教の和歌に及ぼせる影響 星川清成 新國 九  
香川景樹の書牘 平出鏗二郎 帝文 三・六  
詩歌に於ける古語及俗語 大町桂月 帝文 三・六  
小野小町履歴 岡本保孝 八洲 一三二

悲哀の詩人 増岡子信 福島書店  
新古今和歌講義 註 古田目經徳 誠之堂書店

高崎正風大人講話筆記

しき 七八

松濤窟社中詠草評(其三)

池袋清風 國友二一・三五五

松濤窟社中詠草評(其一)

池袋清風 國友二〇・三五三

歌は片歌がもとにて奇數を正格とし施頭また長歌の偶數なるもの變近藤清石 國院 三・八  
格にて變格に諸體ある論 下

病間歌談 武島羽衣 新小 二・八  
新體詩學 武島羽衣 新聲 三・一〇  
一夕歌話 大町桂月 少集 三・八  
鐵幹さんに 桂月 少集 三・八

秀歌集(一)

高崎正風 女鑑 一三五  
塩井ふく子 女鑑 一三五

高崎正風大人講話筆記

本吉武之 六合 一九九

松濤窟社中詠草

池袋清風 家庭 一〇四

香川景樹の歌論

本吉武之 六合 一九九

金玉集講義

明倫歌集略解(四)

歌話(二)

大口 旅師 女子 三

稻村 眞里 國院 三・九

高崎 正風 女鑑 一三七

鶏肋集(六)

鶏肋集(七)

鶏肋集(九)(註 ハヲ缺ク)

鶏肋集(十)

北村季吟(一)

鶏肋集(十一)

鐵 幹 讀賣新聞 一

鐵 幹 讀賣新聞 五

鐵 幹 讀賣新聞 一二

鐵 幹 讀賣新聞 一三

花笠 主人 讀賣新聞 一七

鐵 幹 讀賣新聞 二一

八月

詠歌辭典

佐々木弘綱 博文館

名殘(一)

歌話(三)

萬葉集に於ける風俗の研究

千種有功卿と翁滿とのことかき

小澤芦庵が歌よむ心得の歌

松濤窟社中詠草

明倫歌集略解(五)

香川景樹の歌論

鐵 幹 中新 一・七

高崎 正風 女鑑 一三八

金子 薫園 新聲 三・二

笹川 臨風 帝文 三・八

小澤 芦庵 帝文 三・八

池袋 清風 家庭 一〇七

稻村 眞里 國院 三・一〇

本吉 武之 六合 二〇〇

高崎正風大人講話筆記

和歌妄評(一)

新詠十首

馬上閑硯

豆糟物語

豆糟物語(續)

鶏肋集(十二)

散文雪月花

韻文雪月花

少年歌話

名殘(二)

和歌妄評(二)

高崎正風大人講話筆記

香川景樹の歌論

秀歌集(七)

折にふれたる

辨妄

馬上閑硯

九月

不知 火 文庫 六・五

鐵 幹 讀賣新聞 四

鐵 幹 讀賣新聞 九

つれづれ 日 本 一〇

つれづれ 日 本 一二

鐵 幹 讀賣新聞 二〇

大田和建樹 博文館

佐々木信綱 博文館

鐵 幹 中新 一・八

不知 火 文庫 六・六

しき 八

本吉 武之 六合 二〇一

塩井 正男 女鑑 一四一

佐々木信綱 めざ 二一

苗村 義一 めざ 二二

鐵 幹 讀賣新聞 六

馬三

八三

早稻田文學の一記者よ 悠々子 讀賣新聞 七

早稻田文學の一記者よ(前承) 悠々子 讀賣新聞 九

馬上閑硯 鐵 幹 讀賣新聞 一三

馬上閑硯 鐵 幹 讀賣新聞 二〇

馬上閑硯 鐵 幹 讀賣新聞 二五

馬上閑硯 鐵 幹 讀賣新聞 三〇

十月

夢鹿戲歌集 公月乘光 宗粹社

桂園遺聞第二編 井上通泰 渡邊宗十郎

名殘(三) 鐵 幹 中新 一・九

香川景樹の歌論 本吉武之 六合 二〇二

古今集序闇夜の磔 伊藤乘興 國院 三・一二

女子歌物語 月の屋 女子 九

讀辨妄 蓼舍主人 めざ 二二

矢田野辨 祐乘坊亂郎 めざ 二二

越前國敦賀にありける頃 佐々木信綱 めざ 二二

矢田野 苗村義一 めざ 二二

馬上閑硯 鐵 幹 讀賣新聞 一

馬上閑硯 鐵 幹 讀賣新聞 二五

馬上閑硯 鐵 幹 讀賣新聞 二五

十一月

新古今集詳解 七 塩井正男 明治書院

太田道灌 櫻井一義 明治書院

名殘(四) 鐵 幹 中新 一・一〇

釋萬葉集の事 內藤耻叟 八洲 一三七

香川景樹の歌論 本吉武之 六合 二〇四

明倫歌集略解(六) 稻村眞里 國院 四・一

古今和歌集序考 關根正直 國院 四・二

和歌史上に於ける賀茂眞淵(上) 中野小三郎 國院 四・二

「萬葉」時代の道德 難波常雄 日主 七

森田思軒若を悼みて 佐々木信綱 めざ 二二三

苗村氏に 蓼舍主人 めざ 二二三

二氏に答ふ 苗村義一 めざ 二二三

馬上閑硯 鐵 幹 讀賣新聞 一

馬上閑硯 鐵 幹 讀賣新聞 二二

馬上閑硯 鐵 幹 讀賣新聞 二二

馬上閑硯 鐵 幹 讀賣新聞 二四

十二月

小百人一首通解 邊渡又次郎 北隆館

邊渡又次郎  
波邊光風

北隆館

賀茂眞淵翁全集上卷  
芳宜園集

松濤窟社中詠草評(其四)  
考証

月不詳

瀧園集初編  
もくず集

朝日商豆家集

大願道人草稿

石竹集

海宇遺珠

回水園集

小自在庵詩歌集

夏の露

蟲明歌集

不惹集

催淚集

かたみの蔽

家庭修身百首

歌訓修身百首  
育兒百人一首

佐々木信綱  
毛利元徳

博文館  
佐々木古信

代々の面影  
國學三遷史

中野虎三

明治書院  
吉川半七

池袋清風 國友二一・三六二  
木村正辭 八洲 一三八

黒田清綱  
花房端連

花房直三郎

朝日商豆

原實雄

吉田健次

宮原積

中島宜門

南圓稔理準

田中鼎輔

松岡隣

水元愿藏

揖取三郎

高島式部

杉谷正隆

旭櫻山人

晴光館

高島千畝

一、御歌會。御題松影映水(休)

二、藤澤古實長野縣箕輪村に生る。

三、一〇 早川幾忠東京府下砂村に生る。

三、直文 子規 信綱 桂月 雨江 羽衣 鐵幹等新詩會を起す。合著新體詩集「この花」出づ。

四、清原文彦(金子薫園) 新聲 (二ノ四) 歌壇の選者となる。

七・一九 竹尾忠吉山形市に生る。

七・三一 鈴木弘恭歿(五五)

一〇・二 宮内省達甲第七號を以て御歌所官制を發布せらる。其の職員左の如し。

御歌所長 一人 勅任

天皇 皇后兩陛下の御製に關する事を掌り兼て臣民の詠進を管理し所務を總理し職員を監督す

御歌所主事 一人 奏任

長の命を承け所務を掌理す

御歌所寄人 七人 名譽職(勅任又は奏任の待遇をこす)

長の命を承け短歌長歌唱歌等に關する編纂選述を分掌す

御歌所參候 十五人 名譽職(奏任待遇をこす)



長の命を承け御歌會の儀式典例を掌理す

御歌所録事

上官の指揮を承け庶務に従事す

○辭令

樞密顧問官小松宮別當從三位勳二等男爵高崎正風  
兼任御歌所長兼小松宮別當如故(叙高等官二等)

御歌所寄人被仰付但勅任待遇 東宮侍講 本居豊頼

同 文科大學教授 黒川眞頼

同 華族女學校教授 阪 正臣

同 從七位 中村秋香

同 但奏任待遇 非職官内屬 小出 榮

御歌所參候被仰付 侍從子爵 西四辻公業

正三位伯爵 松浦 詮

從三位伯爵 西三條公允

同 冷泉 爲紀

侍從子爵 綾小路有良

掌典子爵 竹屋 光昭

同 前田 利愷

正四位子爵 水野 忠敬

從三位 長谷 信成

掌典 宮地 嚴夫

御歌所録事 植松 有經

同 大口 鯛二

同 鎌田 正夫

千葉 胤明  
遠山 英一  
菊間 義清

一〇・二 赤尾可功歿(七二)  
一二・ 新聲(三ノ六)に山川登美子の歌出づ。山柿の梢にう  
すく霜見えて秋くれがたの風そさむけき。

月日不詳 長谷川昭道歿(八三) 戸隠舎遺稿

叢書目録 一一

續日本歌學全書 第六編

- 六帖詠草 小澤 蘆庵
- 六帖詠草拾遺 小澤 蘆庵
- 芦かひ 小澤 蘆庵
- 塵ひぢ 小澤 蘆庵
- 或問 小澤 蘆庵
- 振分箋 小澤 蘆庵
- つゞら艸子 上田 秋成
- 閑田百首 伴 蒿 蹊
- 垂雲和歌集 垂雲軒澄月
- 夢宅和歌集 桃澤 夢宅
- 杉のしづ枝 荷田蒼生子